IS〜インフィニット・ストラトス〜蒼き月の輝き

曾良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ～インフィニット・ストラトス～蒼き月の輝き

【Ｎコード】
Ｎ７４１２Ｗ

【作者名】
曾良

【あらすじ】
遠い昔の記憶・・・・・・オレンジ色の髪をした少女は言った。

「あなたとずっと一緒にいるためだよ」と・・・・。

ＩＳ、女にしか動かせないそれをうごかした男子がいた。一人は、織斑一夏。　もう一人は結城海斗、だが結城海斗にはある秘密があった?ダイヤの形を模したネックレスと少女、そして失われた記憶、それらが意味するものとは?蒼き月が輝くとき、結城海斗は何を見

るのか・・・・・・。

第1話プロローグ（前書き）

初投稿なのでおてやわらかに

第1話プロローグ

遠い昔の記憶・・・・・

「これ、なに？」

自分の首にかけられているダイヤを模したネックレスを見下ろしながらいった。
どこにでもありそうな普通の公園、そこに俺はいた。その公園はいつも人ひとりいない。いるとすれば俺とひとりの少女だけ・・・・
ひどく美しい少女、オレンジ色の長い髪に、白い肌。
ちょっと吊り上った髪の色と同じオレンジの目。
まるで、妖精を想像させるかのような美しい少女だった。
その少女は悪戯ぽい笑みを浮かべながら

「あなたとずっと一緒にいるためのもの」

「ずっと一緒に？」

幼い俺にはまだわからかったけど、だけど、彼女と一緒にいられることはうれしかった。
そんなことを考えていると彼女が不安そうな顔で覗いてきて

「それとも私とずっと一緒いるのは・・嫌？」

「嫌じゃないよ」

と俺は答える。

「じゃあ・・好き?」

なんてことをいってくるので俺は

「え・・・えっと・・」

って言ってしまう。

すると、彼女は

「あなたは私のこと・・・嫌いなの?」

泣きそうな顔で言ってくるので

「ち…違うよ、嫌いな訳ないじゃないか」

「じゃあ・・私のこと好きなの?」

「え?・・・うん・・・好きだよ」

すると、彼女は子供とは思えない妖艶な笑みを浮かべて

「私も大好きだよ・・海斗」

俺は彼女の笑顔が大好きだった。俺も微笑む、そして、

「僕もだよ・・・マリア」

と、言おうとして・・・・

季節は春、桜がちらほら咲き始めているころ、どこの高校も入学式があってるころだ。
で・・俺はというと

「ここがＩＳ学園か」

今、俺はＩＳ学園のゲートの前にいる。

「しかし、でかいよなこのゲート、なぁ、紅葉？」

「ほんとだな・・・って、今更そんなこと言っても意味ない」

「それはそうだけど」

予想外のつっこみに戸惑いながらも改めて3年間通う学校をみてみる

ＩＳ（アイエス）正式名称『インフィット・ストラトス』。宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。しかし、『製作者』の意図とは別に宇宙進出は一向に進まず、結果このスペックを持てあました機械は『兵器』へと変わり、しかしそれは各国の思惑から『スポーツ』にと落ち着いた。

そして、ＩＳ学園はＩＳ操縦者育成を目的とした教育機関であり、その運営および資金調達には原則として日本国が行う義務を負う。ただし、当機関で得られた技術などは協定参加国の共有財産として公開する義務があり、また、黙秘、隠匿を行う権利は日本国にはない。また、当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し協定参加国全体が理解できる解決をすることを義務ずける。また入学に際しては協定参加国の国籍持つ者には無条件に門戸を開き、また日本国での生活を保障すること。

という学園なわけだ。

「そんなことより、いつまで話しているつもりだ」

「千冬姉さん！？・・・いつのまに？」

「ずっと前からだ・・それにここでは織斑先生と呼べ」

このひとは織斑千冬、俺の義理姉だ。

「そんなことよりそろそろ・・・」

紅葉が待ちくたびれたように言うと

「そうだったな」

というと、ゴホンっと咳払いをして

「こっちだ、ついてこい」

そういうと千冬姉さんは早歩きでいってしまおうとするのでそのあとを追いかける。

「めんどくさいのは嫌いなんだがな」

はぁ～と大きなため息ついてしまう。

「ため息なんてしたら幸せがにげるぞ」

と、紅葉のつっこみにまた、はぁ～っとため息をつく。

そう言っていたらすぐ教室の前についてしまった。

（まぁ、たまにはがんばってみるかな）

なんてことを考えながら教室のドアを開けた。

第1話プロローグ（後書き）

ここまで読んでくれたかたありがとうございます。
次回もよろしくおねがいします。

第2話　再会（前書き）

2度目の投稿です。最後まで見てくれたらうれしいです。

第2話　再会

はぁ～っと大きくため息ついているのは、世界で最初に男性でＩＳをうごかした（というよりはいまのところＩＳを動かせる男は２人だけなんだが）織斑一夏だった。先ほどの自己紹介で千冬の出席簿で頭を殴られ、しかも、いまこの教室にいる男子は一夏だけなので女子からの視線がすごい。

（これは、想像以上にきついな）

と、内心で言ってみるも状況はまったくかわらない。先ほどから６年ぶりに再会した幼馴染の篠ノ之箒に救いの視線をおくっているのだが何度も目をそらすのだ。

（薄情なやつだな）

なにかしたかな?そんなことを考えていると、いつのまにか自己紹介は終わっていた。

「おい、入ってこい」

千冬ねぇ・・・織斑先生が合図をすると教室のドアが開き入ってきたのは・・・

「か・・海斗なのか!?」

と言い立ち上がる、

「おお、一夏久しぶりだな、２年半ぶりだな」

織斑一夏と結城海斗は海斗が千冬に拾われて以来家族同然のように育ったのだ。

しかし、中学１年の冬休み突然行方がわからなくなっていた。

「元気だったか?」

「当たり前だろ、おまえの方は元気だったか？」

「おお、風邪もひいてないぜ」

一夏と海斗が感動？の再会している途中で・・・

「馬鹿どもそこまでにしろ・・・海斗は自己紹介をしろ」

鬼や魔人とも呼ばれる（一夏と海斗にだけ）織斑千冬がそう言っているのでおとなしく従う。

「えーっと・・・結城海斗です、よろしくお願いします」

といい終わると一夏と紅葉、千冬を除くクラス全員がずっこけた。

まるでなにかのコントを見ているようだった。

「紅葉、なんでみんなずっこけてんだ？」

「さぁ、私に聞くな」

一夏も意味が分からないらしくキョトンしている。そして、織斑先生は頭抱えていた。

「もういい、次」

これ以上続けるとどうなるかわからないのでそこで話を終わらせた。

「日向紅葉（ひなたもみじ）だ、これからどうぞよろしくお願いします」

髪は黄金色（こがねいろ）のミディアム。身長はおれよりやや低めだ。美人といえば美人なのだが、天然なのが玉にきずなんだよな。

そんなことを考えているとチャイムが鳴った。

「さぁ、ＳＨＲ（ショートホームルーム）は終わりだ、これから諸君にＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後は実習だが、ＩＳの基本動作は半月で体に

染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

鬼だな・・・・いや、鬼のほうがましか。なんせ目の前にいる人を見たら鬼や悪魔でさえ逃げ出すだろう。なにせこの織斑千冬は第一世代ＩＳ操縦者日本代表なのだ。しかも、公式戦は全勝無敗。ところが、ある日突然引退した。

「席につけ、馬鹿ども」

はいはい、馬鹿ですよ。

「あーやばい、駄目だ」

「全然わからん」

上から、一夏、海斗の順だ。

1時間目のＩＳ基礎論理授業がおわって今は休み時間。

（しかし、なんとかならないのかな、あれ）

海斗の視線先には廊下に詰め寄ってる女子たちがいる、ＩＳは女しか使えないはずだがなぜか男である、織斑一夏と結城海斗は起動させてしまったのだ。『世界で唯一ＩＳを使える男子』というニュースは全く間に世界中に広がった。もちろんこのＩＳ学園も例外ではない、そのため廊下には1年だけではなく2年、3年生も詰め寄っている状況だ。

「なあ、海斗」

呼ばれたのでそっちを見る

「紅葉ってさ・・・お前の彼女？」

どこかで爆発音がしたが気のせいだよな・・・・

「ちげぇよ」

当たり前みたいにかえした。

ゾクッ、なぜか紅葉の方から殺気したんだが・・・・なんでだ？

「ちょっといいか？」

「うん？・・箒か！久しぶりだな、元気だったか？」

「ああ、海斗の方も元気でなによりだ」

目の前にいたのは6年ぶりに再会した幼馴染の篠ノ之箒だった。

箒は、俺と一夏が通っていた剣道場の子。髪型は昔から変わらずポニーテール。肩下まである長い髪を結っているリボンの色が白なのはやっぱり神主の娘だからだろう（篠ノ之道場は神社兼任）身長は平均な女子のそれだが、長年剣道で培われている身体はどこか長身を思わさせる。

「一夏に用なんだろ？」

「あ・・ああぁ」

そいうと一夏と箒とは廊下にいってしまった。

「・・・であるからして、ＩＳの運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を遺脱したＩＳを運用した場合は、刑法で罰せられ・・・・・」

すらすらと教科書を読み上げているのは、クラス副担任の山田真耶

だ。身長はやや低め、生徒のそれと変わらない、しかも、服のサイズが大きいせいかだぼっとしていて、ますます本人が小さく見える。また、かけている黒縁メガネも若干ずれている。一夏曰く『子供が無理して大人の服を着た』的な、不自然さらしい。

「織斑君なにかわからないことがあったら言ってくださいね」

一夏の会話が聞こえたらしくわざわざ訊いてくる。

すると、一夏は何か決心をしたみたいで、

「全部わかりません」

「え!?ぜ・・・全部ですか」

ほかにわからない人はいますかという問いにたいしておれは、

「俺も、全部わかりません」

教室の端にいる千冬は、

「織斑、結城、入学前の参考書はよんだか?」

ふたりは目の前にうる人物からはにげられないと思い覚悟を決め、

「古い電話帳と間違えって捨ててしまいました」

「滑って、川に落としました」

上から、一夏、海斗の順だ。

パアンッ!!

出席簿のいい音が教室に響いた。

第2話　再会（後書き）

どうでしたか。感想、アドバイスなどがあったよろしくお願いします

第3話　セシリア・オルコットＶＳ織斑一夏（前書き）

どうも曾良です、今回はセシリアが登場です。

第3話　セシリア・オルコットＶＳ織斑一夏

時は、２時間目の休み時間、世界でＩＳをつかえる男子、織斑一夏と結城海斗は頭を抱えていた。理由は、少しさかのぼること数分前・・・・・

パアンッ！！

出席簿で殴られ後、

「あとで、再発行してやるから一週間以内で覚えろ、いいな！」

なんてこと言われた、そこに一夏が、

「い、いや、一週間であの厚さはちょっと・・・・」

「やれと言っている」

「・・・・・・はい。やります」

ギロッと一夏を睨む目はまるで、鬼軍曹ともいうべき目だった。その後、千冬姉さんの規則とはの講義などがあり色々と疲れた。

「ちょっと、よろしくて？」

一夏は話しかけてきた相手を見た、そこにいたのは地毛の金髪が鮮やかな女子だった。

白人特有の透き通ったブルーの瞳が、やや吊り上った状態でみていた、その女子の雰囲気は『いかにも』今の女子という感じだった。

今の世の中、女性はかなり優遇されている。理由はＩＳにある。ＩＳはどの既存する兵器よりも遥かに優れている、しかも、そのＩＳを動かせるのは女だけ、当然のようにどの国も女性待遇をよくするようになり、結果的に女性＝偉いという構図ができてしまった。

「ちょっと、訊いてますの、お返事は？」

「あ・・ああ。訊いているぞ、どういう用件だ」

一夏がそう答えると、その女子はわざとらしく声をあげ、

「まあ！なんですのそのお返事わたくしに話かけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら」

「・・・・・」

正直このタイプは嫌いだな俺。

「悪いな正直君のこと知らないし」

そんな、女子は一夏の言葉に驚いている顔だった。

「海斗はしってるか？」

「しらねぇな」

一夏の問いかけに正直に答える、俺はみんなが自己紹介が終わった後に入ってきたからしょうがないだろ。

（一夏が知らないのはおかしくないか？）

そんな、つっこみをいってると、

目の前にいる女子は気に入らない様子だったようで、吊り目を細めて、いかにも男を見下した口調で続ける。

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリス代表候補生でありながら入試主席のこのわたしくしを！？」

セシリアか・・・・覚えるか・・

「あ、質問いいか？」

一夏が続ける、

セシリアはよろしくてよといい一夏の質問にこたえる準備をした。

「代表候補生って、何？」

がたたっ。聞き耳をたてていた女子数名がずっこけた。

「一夏、それはさすがに知らなさすぎだろ」

ゆっくり眺めていた俺は思わずツッコんでしまった。

それで、セシリアはというと・・・・

「あなた、本気でおっしゃってますの？」

すごい剣幕だな、血管マークが出てるぞ。

「おう、知らん」

俺の認識が甘かった。まさか、ここまでとは・・・・・・

「一夏、代表候補生っていうのは「国家代表ＩＳ操縦者の候補生のことですわ」割り込むなよ」

海斗が喋ろうとしたらセシリアに邪魔されてしまった。

「つまり、エリートですわ！」

復活はや！！さすがだな代表候補生。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを一緒なるだけでも奇跡・・・・・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

それに一夏は・・・・・・

「それは、ラッキーだ」

「馬鹿にしてますの？」

セシリアさん、ごもっともだ。この馬鹿にはもっと教育しなければ。

「大体、あなたＩＳのことについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。、男でＩＳを操縦できると聞いてましたから、少しくらい知的さを感じさせるかとおまってましたけど、期待外れですわ。」

「それって、俺も含めているの？」

セシリアの言葉に反応した海斗が質問すると・・・・・・

「あたりまえですわ！」

（なんで俺もなの？）

他の人から見たら海斗は一夏と同じレベルに見えていることを本人は知らない。

「まぁ、ＩＳのことでわからないことがあったら教えてあげてもよっくてよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒した、エリート中のエリートですから。」

何故か、妙に唯一のところが強調されているんだが。

「入試ってあれか？ＩＳ動かして戦うやつ」

「それ以外入試はありあせんわ」

「ああ、あれ俺も教官倒したぞ」

一夏の発言にセシリアは、目を大きく見開いて驚いている。

「わ・・・わたしくしだけだと聞いていましたけど？」

「女子ではって落ちじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと・・」

「いや知らないけど」

「あなた！あなたも教官をたおしたと言うの？」

「うん、まあ。たぶん」

「たぶん!?たぶんってどういう意味かしら」

あまりにもセシリアが怒っていたので一夏は、

「えーと?落ち着けよ。な?」

「これが落ち着いていられ・・」

キーンーコーカーン。

話に割って入ったのはチャイムだった。

「っ・・・・!またあと来ますわ!逃げないことね!よくった!?」

なんか大変なことがおこっているが俺には関係ないな。

ガラッ!

ドアから千冬姉さんがはいってきて授業がはじまった。

第3話　セシリア・オルコットＶＳ織斑一夏（後書き）

今回は海斗と紅葉はなにもしなかった・・・・。

感想などありましたらよろしくお願いします。

オリジナルキャラ設定（前書き）

ここで、オリジナルキャラの設定をだしておきます

オリジナルキャラ設定

名前　結城海斗

身長１７１ｃｍ

性別　男

好きな食べ物　ご飯にあうもの

嫌いな物　チョコレート、コーヒー、ココア

趣味　読書、散歩

髪は空の色に近い青色で、長さは肩まである。幼いころ千冬に拾われ、家族同然のように育てられた。
千冬に拾われる前から持っていたダイヤの形を模したネックレスを大事にしており、千冬に拾われる以前の記憶がない。
中学時代は一夏や弾と遊んでいた、鈴とは犬猿の仲であり、よく喧嘩をしていた（だが、仲が悪いわけではない）
家族や友達が傷つくことを極端に嫌っている。普段はツッコミ役、家事全般はできるが料理は苦手、逆に裁縫が得意。手先は不器用で細かい作業は苦手（裁縫は別）らしい。本人曰く、食べ物はなんでもたべれるらしいが、チョコやコーヒーは苦手。勘が鋭く、箒や鈴の一夏への好意を見破っており、そのことが鈴との喧嘩の原因らしい、だが自分のことに対しては鈍く全く気付かないらしい。
中学１年の冬休みに家を出て行ったきり連絡がなかった。
旅途中で紅葉と知りあった、それ以来行動をともにしていた。ＩＳの研究施設に行ったとき、謎のＩＳの襲撃を受け、その際たまたま

近くにあったＩＳ『蒼月（そうげつ）』を起動させてしまった。

専用ＩＳ　蒼月

待機状態　ブレスレット

世代　第４世代

外見は青を基準とした装甲で黒のラインが入っている、背中には四つの高出力推進翼があり、内側にプラズマ集束砲が備わっている。また、腰の部分には電磁レール砲が搭載されており、普段は三つ折りの状態で装備されている。
開発途中で欠陥機として放置されていたところを海斗が起動させて、そのまま専用機になった。
最初は新型ＩＳとして開発していたが、追加装備の研究が進まず断念された。
燃費が悪く、装備が少ないため使いこなすには操縦者の技量次第である。

武装

・プラズマ集束砲『雷電』
高出力推進翼に２門装備されている。蒼月最大の火力を誇るが、そのため蒼月の燃費の悪さに拍車をかける結果となってしまった。

・電磁レール砲『雷砲』
腰部に２門装備されている。小口径の弾丸を高速で打ち出すことで火力は落ちるが、連射が可能となり敵を同時攻撃ができる。また、雷電と組み合わされることで一撃でシールドバリアーを突破するこ

とができるが、シールドエネルギーをつかって攻撃するためもろ刃の剣である。

・『蒼鬼』

刀剣の形をした蒼月の主力武装。他の武装が火力が強く大量のエネルギーをつかうため実戦ではほとんどこの蒼鬼をつかっている。

オリジナルキャラ設定（後書き）

なんか、フリーダムとかぶちゃったけど、そこのところは勘弁してください。

誤字脱字などがありましたら教えてください。

第４話　クラス代表は誰？（前書き）

主人公はなにをやってるんだろう。

話がなかなか進まない・・・・

第4話　クラス代表は誰？

「それではこの時間では実戦でも使用する各種装備について説明する」

1，2時間目とは違い山田先生ではなく、千冬姉さんが教壇に立っている。山田先生は教室の端でノートをとっている、よほど重要なことらしい。

「ああ、そういえば再来週のクラス対抗戦でる代表者を決めないとな」

ふと、思い出したように千冬姉さんがいった。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会が開く会議や委員会への出席など・・・まぁ、クラス委員と思ってもらってもかまわない。一年間変更はないからそのつもりでいろ」

俺は死んでもやりたくないな。

「はい！織斑君を推薦します。」

よし、このまま一夏になってしまえ・・・

「私は結城君を推薦します」

え～～～！？なんで俺なの？

「では、候補者は織斑一夏、結城海斗・・・・他にはいないのか、自己推薦でもかまわないぞ」

「え？お、俺！？」

一夏は驚いたような顔で立ち上がったが・・・・・

「織斑、邪魔だ席につけ・・・・・推薦されたものに拒否権はない覚悟しろ」
まじかよ・・・くそ誰か立候補してくれ!!

「ま、まってくださいそんなの納得いきませんわ」
そういって立ち上がったのは先ほどの金髪の女子だった。

(名前なんだっけ?)

一夏と口論していたときは、無視していたから全然覚えてなっかた。

「そのような選出は認められません。大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ、私、セシリア・オルコットに1年間そのような屈辱を味わえっておしゃるんですか!?」
立候補したのはいいが、なんかむかつく言い方だな。

「いいですか、大体、クラス代表というのは実力がある方の役割でしょう」
それもそうだな。ちょっとはいいこと言うじゃねぇか。

「実力でいえば私が代表になるのは当然です。それを、物珍しいからっと言って、極東の猿にされては困ります。わたしはこのような島国にまでISの鍛錬をして来たのであって、サーカスをするきはもっとうありません」

猿って・・俺と一夏、どっちなのかな?

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければいけないだけでも苦痛だと――」

カチン。

「イギリスだってたいしてお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」
やっぱ一夏は我慢できなかったか・・・

一方、セシリアは・・顔を真っ赤にして髪の毛が逆立ってもおかしくない表情だ。

「あ、あなた私の祖国を侮辱しますの？」
もうこなってしまったものは戻らない。

「決闘ですわ！」
なんか、すごいことになったな・・・・

「おう。四の五の言うよりわかりやすい」
まぁ、話が進むのはいいが俺はどうなったの！？
そんな海斗の心の声は誰にも届いていない、すると、教室中から笑いが起こった。

「織斑君、男が女より強かったのはＩＳができる前までだよ」

そんな声がどこからか聞こえてくる、どうやら一夏がハンデがどれくらいるかきいたらしい。
たしかに今の世界ＩＳを使えない男は圧倒的に弱い、もし女と男で戦争したならば、男は3日ももたない、それどころか3時間で制圧されるだろう。

「ハンデはいい」
一夏もあきらめたみたいだ。

「ええ。そうでしょうそうでしょう。女より男が強いなんて日本の男性はジョークのセンスがあるのね」
さっきまでの激昂はどこにやら、あきらかに嘲笑を浮かべている。

「ねぇ、織斑君、いまからでもハンデつけってもらったら？」

「男が一度いったことは覆せるか」
一夏のやつ完全に頭にきているな・・・

「さて、話は決まったな。それでは勝負は一週間後の月曜放課後、第３アリーナで行う、織斑とオルコット、結城は準備しておくように、結城はそれでいいな」
この空気は行くしかないだろうっていうか行かなきゃ殺される。

「はい、それでもかまいません」

「よし、それでは授業を始める」
（結局のところ俺もかよ・・・・）

でも久しぶりにがんばってみるか。
そこで俺は教科書を開いた。

「やっぱ、全然わからん」

放課後、俺と一夏は机にうなだれていた。
「教科書は意味が分からん、なんでここまで難しいんだ？」
「俺もさっぱりだからわからん」
教室には何人かの生徒が小声で話している、昼休みは地獄だった。
俺と一夏が移動するたびになにかの群れのごとくついてくるのだ、
はっきり言って疲れた。
ちなみに、紅葉と箒はもう教室にはいない。
「織斑君、結城君、まだいたんですか。よかったです」
そういっているのは副担任の山田先生だ。
「寮の部屋割が決まりましたので、あ、これは鍵です」
山田先生が言うには、事情が事情なので、急きょきまった部屋らしい。二人は別々の部屋鍵を受け取ると、
「じゃあ、荷物をとりに帰りますか」

「おまえたちの荷物ならもう手配した」
そこには、千冬姉さんがいた。

「まぁ、生活必需品だけでいいだろ」
言い訳はないだろう！さすが姉さん・・・

「えーと、ここが俺の部屋か」
一夏と別れた後、山田先生からもらった鍵で自分の部屋に入ろうと・・・

「ドアが開いていているんだが・・・なんでだ？」
特に気にすることもなく部屋にはいると、

「お～～、やっぱすげぇな」
部屋には高そうなベットが２つ並んでいる。いかにも高級ホテルという感じだ。おれはベッドに飛び込む、この感触・・・なんともいいがたい、そんなことを考えていると・・・

「誰か、いるのか」

扉越しに聞こえるその声を聞いたとき、何故か嫌な予感がした、シャワー室からでてきたのは・・・

「・・・・・海斗!?」

「・・・・紅葉?」

何秒間かの沈黙のあと、

「っ!見るな!」

そいうと体を隠すようにことらを見ている。ちなみに、紅葉の格好はバスタオルをまいただけの格好でかなりやばいかった。

「えっと・・ははは」

なにを言っていいのかわからずとりあえず笑ったがまったくもって効果がない・・・・

「・・・で・・・い・・・・」

「なにかいったか?」

「うりゃーーーーーー」

紅葉はそのままとび膝蹴りし、それを顔面にくらってしまう。そのままの勢いで俺は部屋から追い出された。

「いてぇ～～」
俺は、先ほど紅葉からキックをもらった場所をさすりながら一夏の部屋へと歩いていた。

『あと、すこしは戻ってくるな』
と言われてしまい、やることがないから一夏のとこへ暇をつぶしに行くところだった。

一夏の部屋の前に着きノックしようと・・・・・・・

バタン！

いきなり一夏が飛び出してきた、

ズドン！
扉をつきやぶって木刀が俺の頭に、命中した。

「またかよ・・・・」

ガクッ・・
そこで俺は気絶した。

第４話　クラス代表は誰？（後書き）

海斗は不幸だな。

感想などがあったらどんどん送ってください

第5話　寮での悲劇（前書き）

あいかわらず主人公はなにやってんだ？

第5話　寮での悲劇

「こ、ここはどこだ」

時は夜、ついさっきまで紅く染まっていた空はもうすっかり漆黒に染まっていた。

「目が覚めたか・・・」

そこには、紅葉が気まずそうに立っていた。

「その・・・なんだ、さっきはごめんなさい」

俺はいきなりの謝罪に驚いて声も出ない。

そもそもなんで俺はこんなところにいるんだ?

俺はついさっきまでの記憶をさかのぼってみる、

（たしか、紅葉に追い出されて、それから・・一夏の部屋にいって・・・）

それからの記憶がない、気が付いたらここにいた。ちなみにここは保健室だ。

「俺は・・」

「おまえは、一夏の部屋にいったとき、箒の木刀での一撃をくらって気絶したらしい」

木刀で!?どうりで頭が痛いはずだ。

「よいしょっと」

俺はひととおり話を聞き終えると、ベットから降りる、

「もう、大丈夫なのか？」

「ああ、元々たいした怪我じゃないしな」

そういって、保健室をでようとして、ふっと時計を見たら・・・・

「げっ！もう7時ギリギリじゃないか！」

「あ、待て私も行く」

紅葉と急いで食堂に向かう、なぜ急いでいるかというと、単に食堂の時間が7時までなのだ。

「食事抜きだけは勘弁だからな～～」

ものすごい勢いで食堂ではしっていく海斗はまるでセリヌンティウスを救いに行くメロスみたいだったと紅葉は後に語った。

「なぁ、いつまで怒ってんだよ」

今は朝の８時。１年生寮の食堂だ。

「なぁって、箒」

「・・・・・怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうだから」

「顔は生まれつきだ」

にべもない。

一夏は『同じ部屋』のよしみでこうやって箒と朝食をとっている。

なんで箒が不機嫌なのかは昨日にさかのぼる・・・・・

一夏は海斗と別れた後、自分の部屋にいくところだった。

「え～と１０２５室は・・・ここか・・」

鍵の番号を確認してから部屋に入る・・・あれ？開いてるじゃん。

ガチャ。

まず目に入ってきたのは大きめのはベット。それが２つ並んでいる。

そこいらのビジネスホテルより高いに違いない。こう見ているだけ

にはふわふわ感を醸し出している。これが格の違いというやつだろうか。国立万歳。

とりあえず荷物を床にやって、ベットに飛び込む・・・・おおおお、なんというモフ感。これは間違いなく高いベット&羽毛布団。

「誰かいるのか？」

突然、奥から声が聞こえた。ドア越しなんだろう、声にどくどくの曇りがある。そうえば全部の部屋にシャワーがついてるとか・・・・・ん？

「ああ、同室になったものか、これから一年間よろしく頼むぞ」

嫌な予感しかしない、

「こんな格好ですまない、私は篠ノ之ほ――――――」

「――――箒」

シャワー室から出てきたのは、６年ぶりに再会した幼馴染だった。

「・・・・・・・・」

きょとんとした顔の箒。当然のように一夏もきょとんとしている。

「い、一夏・・・」

「お、おう」

きまずい、それに目の行き場困る状況だ。

「っ！？・・・・見るな！」

箒は体を隠すようにタオルをきつく巻いている。

「なんで、ここにいる」

ぎこちなく聞いてくる箒。

「いや、俺もこの部屋なんだけど――――」

そこからの展開は早かった。超速だ。さすが全国剣道大会優勝者。

箒は即座に壁に立てかけてあった木刀を取ると、くるりと一回転し、

上段打突の構え、そこから基本に忠実な低腰短歩で間合いを詰めてくる、

――――――って、死ぬ！

「うおおっ！？」

一夏はベットから飛び降りすぐさまドアへ・・・・

ドアを開けると、そこに海斗がいた。すぐさま海斗のうしろに隠れると、

ズドンッ！

木刀が壁から飛び出して海斗の額に命中していた。

「お～～い、大丈夫か～～」

だめだ、完全に気絶している・・・・

それからはその騒動で女子があつまってきたり箒をなだめたり大変だった・・・・

そんなことがあったせいか、箒はどうも昨日から機嫌が悪い。

「だから箒――――」

「な、名前で呼ぶな」

「・・・篠ノ之さん」

「・・・・・・・・・」

こんどはぶすっとしてしまった。

なんでだ?

「一夏、おはよう・・」

そこには、あからさまにおなかが減ってますよてきな感じをだしている海斗がいた。

「お、おはよう・・・どうした?顔色が悪いぞ」

そこで海斗は理由を話した。どうやら昨日は食事がギリギリ間に合わなかったらしく昨日の晩飯はぬきだったらしい。一通り話終えると、ものすごい勢いでご飯を食べ始めた。

と、そのとき

「いつまで食べている!食事は迅速に効率よく取れ!遅刻したらグランド十週だからな」

鬼だ・・・なんせこのＩＳ学園のグランドは1週5キロもあるそれ

を十週なんかしたら死んでしまう。
そんなことを考えながら一夏も急いで口に朝食を運ぶ。

（ＩＳの勉強もしなきゃな）

来週のセシリアとの戦いに備えてそんなことを考えていたのだが・・
・・

それは、１時間目が終わって結論がでた。
――――結論。「「なんとかなりそうもない」」一夏と海斗の嘆きは教室中こだました、

ゴツッ！

出席簿の音も教室中に響いた。

第5話　寮での悲劇（後書き）

なかなか話が進まない・・・・

感想などがありましたら大歓迎です。

第6話　修行!?箒の秘密の特訓（前書き）

紅葉が全然喋ってないというか登場少ないことにきずいた。

今回はちょっと長いです、最後まで見てください。

第6話　修行!?箒の秘密の特訓

放課後、寮までの帰り道、歩いているのは世界で2人しかいない男子のＩＳ操縦者、織斑一夏と結城海斗だ。

「授業が全く分からん・・・」

「そうだな、単語の予習をしているからなんとかついていってるんが・・」

普通に私立高校を受験しようとしていた一夏と中一の冬にいきなり家を飛び出していった海斗はまったくといっていいほどＩＳのことを知らない。他の生徒は入学前から予習しているから大丈夫らしい。

「このままじゃ、セシリアに勝つどころか戦いにさえならないんじゃないか?」

「かもな、ＩＳの知識はまったくなく、しかも、ＩＳの稼働時間もかなり少ないんじゃな・・・」

勝つことは絶望的に思えてくる状況だな、心の中でそう呟く。

「そういえば・・・」

「一夏のＩＳはどうなってるんだ?」

海斗は思い出したように一夏に質問した。

「ああ、それだったら、政府が専用機を用意してくれるらしいって千冬姉がいってたぞ」

「この時期に専用機か・・・・」

代表候補生でもないのにこの時期に専用機専用機というのは異例なことだ。
そもそもＩＳは全部で４６７機しかない、ＩＳのコアはブラックボックスみたいなもので篠ノ之博士しか作れない。篠ノ之博士というのは箒の姉ちゃんだ。話が逸れたが、つまり、ＩＳは限られた数しかなく、どこの国にも企業にも割り振られた数のうちで研究・開発・訓練をしているらしい。
そのなかの一つをどこの国の代表候補生でもない一夏に用意するらしい。とにかくすごいことだ。

「そういう、海斗はどうなってるんだ？」

「うん？・・なにが？」

「いや・・ＩＳのこと」

「それなら――――――」
そういいながら右手につけているブレスレットをみせる。

え～～～！と驚く一夏。どこで手に入れたんだという問いかけには

「家を飛び出した２年間にちょっとな・・・・」
としか答えない。

俺の専用ＩＳ『蒼月（そうげつ）』こいつは俺が得た初めての力、みんなを守る初めての力・・・。

世界が初めて男子でＩＳを動かした織斑一夏の登場を騒いでいる頃、俺はあるＩＳ研究所にいた、なんでも紅葉に見せたいものがあったらしい。俺と紅葉は篠ノ之博士と面識があった。紅葉は篠ノ之博士に色々と教えてもらっていた。だから、ＩＳに関しては紅葉は誰より知っていた、だから度々ＩＳの研究所に来ることがあった。

その日は新しいＩＳのことを見てほしいということだったのだが暇だった俺は、研究所のなかをうろついてた。ぶらぶらしているとある倉庫にたどり着いた。そこは使わなくなった機材などが置かれていた。

その中に、それはあった。蒼色の装甲に黒色のラインがはいったそ

れはあった。それに吸い寄せられるように俺はそれに触った、その瞬間俺の世界が変わった気がした。

「あなたたち、専用機が用意されるよですね。安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとはおもってはいませんでしたけど」

相変わらず、上から目線のセシリア。さっきから一夏にエリートだな馬鹿にしているだのよく喋ってるな、相変わらず一夏もよく対応しているな・・・まぁ、適当にあしらってるんだが、

「まぁー、よくあれだけ喋ってられるよなセシリアは・・・なぁ、そう思うだろ紅葉」

突然話を振られた紅葉はびくっりしていたが、

「私もそう思うが・・・・」

紅葉の言葉が途切れた時、教室では箒がものすごい視線で一夏とセシリアを睨んでいた。

なんでも、一夏に名前で呼ばれて睨んで、セシリアには篠ノ之博士の妹だということといわれて睨んでいるという。

「・・・・まぁ、セシリアに目をつけられている、一夏に同情するがな」

まったくだ。すると、セシリアとの会話が終わったのか一夏は今度は箒と喋ってる。

「他に誰か一緒に食堂にいかない？」

一夏が言った瞬間、女子が何人か集まり、教室を出て行った。

「俺たちも行くか、じゃあ紅葉、一緒に行こうぜ」

「わかった。ＩＳ学園に入ってからまともに海斗と食事しなかったからね」

そのとき、廊下から、

ドシッ！

「相変わらず、一夏と箒は仲がいいことで」

「あれの、どこを見て行っているの？」

紅葉の問いかけに俺は、

「全部」

きっぱり答えてやった。紅葉はなんかずっこけたが・・・・まぁ、いいか。

「うりゃーーーーー」

俺は今、剣道場にいる。なんでいるかって？それは――――

「どうして、ここまで弱くなっているんだ2人とも！！」

時間は放課後、俺の目の前には箒が防具をつけてたっている。

「受験勉強してたから、かな」

「中学の時は何部に所属していた」

「「帰宅部」」

一夏と海斗の声が重なった。

「鍛えなおす！これから放課後、3時間みっちり稽古をつけてやる

2人とも

「お、俺も！？」

「あたりまえだ！！」

俺のすっとんきょな声の返答に箒が答える。

なんでこんなことになったのかは昼休みにまでさかのぼる・・・・・・

「ねぇ。君ってさぁ、噂の子だよね」

昼休み、一夏は箒と一緒にいた。そこに3年生がしゃべりかけてきた。

「代表候補生と対戦するってきいたんだけど・・・・・よかったら、私がＩＳおしえてあげよっか？」

一夏にとっては好都合ことでＩＳの稼働時間が短いだけに、３年間ＩＳを動かしてきている3年生が教えてくれるというのわありがたい話だったが・・・・

「結構です。私が教えることになってるんで」

「あなたも一年でしょ、だったら私の方が――――――」

「私は、篠ノ之束の妹なので・・・」

さすがの先輩もこれには勝てなくあえなく退散していった。

「箒、なんだ教えてくれるのか」

「そういっている」

ともあれこれでＩＳを教えてくれる人は確保したな。

「今日の放課後」

「剣道場に来い、一度、腕がなまってないかみてやる・・・・それと、海斗も呼んで来い。あいつも一緒にみてやる」

という感じで今俺も絶賛稽古中なわけで・・・・

「織斑君と結城君って結構弱い？」

なんて声まで聞こえてくる。

「たしかに、このままじゃいけないな」

すると、海斗は立ち上がり、

「さて、久しぶりにトレーニングするか、一夏」

「おう！」

ちなみに、箒はというと、さっきの会話の後、海斗たちを一瞥して更衣室にいってしまった。

（すこし、きつく言い過ぎただろうか？）

久しぶりに会った幼馴染だというのに、あんなこと言って大丈夫だったのかと心配になる。

６年ぶりにあった幼馴染はずいぶん変わっていた、特に一夏が・・・格好よくなった・・・・

（違う、違う私は決してそのような・・・）

赤くなった顔が映っている鏡をみていると、
（よくわかったものだな私だと）

9歳からの6年間もたっていたのに私の顔を・・・・

「ふふふっ」

それが妙にうれしい、しかも、今度から、一夏と一緒に・・

「いや、そのようなことは考えてないぞ」

「故に、これは正当だ」

なにをもって正当なんだろうか・・・

広い更衣室で一人拳突き上げている箒だった。

第6話　修行!?箒の秘密の特訓（後書き）

やっと、次はバトルに行けそうです。

戦闘シーン書く自身がない・・・でも、がんばってみます。

それじゃ、さようなら～

第7話　白式VSブルー・ティアーズ（前書き）

やっとバトル突入！！

バトルシーンはうまくはありませんが最後まで読んでくださってうれしいです。

第7話　白式ＶＳブルー・ティアーズ

「――――なぁ、箒」

「な、なんだ」

「ＩＳのことを教えてくれるんじゃなかったのか？」

「・・・・・・・・・」

「目・を・そ・ら・す・な！」

今、一夏達がいるのは第３アリーナのＡピットだ。今日は、セシリアとの対戦の日だが・・・・

「しかたがないだろう、お前のＩＳも届いてなかったのだから」

「それもそうだけど・・・・って、基本的なこととかあっただろう」

あれから1週間、みっちり剣道の稽古はつけてくれたがＩＳのことはまったく教えてくれなかった。

ちなみに、一夏のＩＳはまだ届いていない。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

ものすごい勢いで走ってきたのは山田先生だ。

「届きました。織斑君の専用ＩＳ！」

「織斑、実戦でものにしろ。アリーナを使用できる時間は限られているんだからな」
そこに立っていたのは鬼教官の千冬姉だった。

バシンッ！

「誰が、鬼教官だ」

うわっ・・・本気で怖い・・・・・

「そんなことより・・・」

箒と山田先生が一夏の腕をつかみ、

「「はやく」」

箒と山田先生に腕をつかまれて引きずられていった。

「おっ、ようやく来たか」

海斗はドアから入ってくる一夏をみる。

「なにやってんだ・・・一夏」

ドアから入ってくる一夏は箒と山田先生に無理やり引きずられていた。

それから一夏は自分の専用ＩＳ『白式』を装着する。

「箒・・・・行ってくる」

そう告げると、一夏は飛びだって行った。

ちなみに俺の出番は次の試合なのでここでゆっくり観戦することにする。

「あら、逃げずにきましたのね」

セシリアはまた腰に手を当てながら上から目線で言ってくる。

セシリアの専用ＩＳは鮮やかな青い色の『ブルー・ティアーズ』。その外見は、フィン・アーマー四枚背に従えて、どこか王国の騎士を思わせる。

「最後のチャンスをあげますわ。今謝るなら、ハンデをあげても構わなくてよ」

「ハンデなんかいるかよ！」

「そう・・・・残念ですわ」

――――――警告、敵ＩＳ射撃体勢に移行。トリガー確認。初弾エネルギー装填。

「お別れですわね！」

キュィィン！耳をつんざくような独特な音。それと同時に走った閃光が刹那、体を撃ちぬく。

一夏とセシリアの対決を別室でモニターしているのは、海斗と紅葉、箒と山田先生そして、千冬姉さんだ。モニターに映ってるのは一方的な攻撃を受けている一夏だった。

一夏はギリギリで持ちこたえてるようで、シールドエネルギーがほとんどなかった。

だが、一夏はセシリアの戦略がわかったようで余裕の表情だった。

「あの馬鹿者、浮かれているな」

千冬姉さんはそう言うと、忌々しげな顔をしていた。

「え？どうしてわかるんですか？」

「さっきから右手を閉じたり、開いたりしているだろう、あれが出るときは、大抵簡単なミスをする」

さすが、千冬姉さんそこまで一夏のことを・・・・・

「へぇぇぇぇ・・・さすがご兄弟ですね」

「ま、まあ、なんだ。あれでも一応私の弟だからな」

「あ、照れてるんですかー？」

そう言った瞬間、千冬姉さんのヘッドロックがきまり、苦しそうに山田先生が騒ぐ・・・・なんていうか、変な光景だな。また、モニターに目をやる。

目を離していた間、試合は大きく動いていた・・・・

一夏は3基のビットを破壊し、４基目を回し蹴りで吹き飛ばしてセシリアの懐にとびこんだが・・・・

スカート状の部分から突起物が外れていた、

6基目のブルー・ティアーズ、それは今までのとは違うミサイルだった。

ヴァン！

ミサイルは一夏に命中した。

だが・・・・・・・

「――――――ふん」

黒煙が晴れたとき千冬姉さんは鼻をならした。

「機体に助けられたな、馬鹿者め」

黒煙の中から現れたのは初期化（フォーマット）と最適化（フィッテング）が完了した白式だった。

新しく形成された装甲はまだぼんやりと輝きを放っている。それは、

さっきまでの実体ダメージがすべて消えそれどころか洗練された形へと変化していた。

「ま、まさか・・・・・一次移行(ファーストシフト)！今まで初期設定だけの機体で戦っていたっていうの？」

まぁ、これでやっとこのＩＳは俺専用になったわけだ。

武器を呼び出す――――――

――――――近接特化ブレード『雪片弐型』

千冬が使っていたのと同じ武器・・・・

「ああ、まったく思い知らされるよ」

これから――――――

「俺は世界で最高の姉さんをもった」

「おれが家族を守る」

「・・・は?な、に言って――――」

「とりあえず千冬姉の名前を守るさ」

「だから、さっきからなにを・・・・ああもう、面倒ですわ!」

そう言った瞬間、ビットが飛んでくる。

(見える・・・!)

ギンッ――――!

横一閃。だが慣性で一夏の横を通り過ぎ爆ぜる。そして、再度セシリアに突撃していった。

「おおおおっ!」

手の中でエネルギーが増していくのがわかる、刹那、雪片の刀身が光を帯びより強い力を伝えていた。

(いける・・!)

懐に飛び込んだ一夏は下段から上段への逆袈裟払いを放つ。

それがセシリアにあたりそうになったとき――――――――――

『試合終了。勝者――――セシリア・オルコット』

こうして一夏は負けた。

第7話　白式ＶＳブルー・ティアーズ（後書き）

また、海斗が・・・・

うまく、戦闘シーンが書けない・・・・

感想やアドバイスがありましたらよろしくお願いします。

第8話　蒼き月ＶＳ蒼い雫（前書き）

今回はちょっと長めですがよろしくお願いします。

バトルが今回のメインです、至らぬ点がございましたらこめんとよろしくいねがいします。

第8話　蒼き月ＶＳ蒼い雫

「よくまぁ、あれだけ持ち上げてくれたもんだな、この大馬鹿者！」

一夏は今、絶賛説教中なわけで、

「まぁ、一夏もはじめての実戦だったわけだしもうその辺で・・・・」

俺は、おそるおそる聞いてみる。

「まぁ、今日はこの辺でいいか・・・」

すこしため息混じりに言うと、そのまま戻っていった。

「はぁ～、結局俺はなんで負けたんだ？」

そんな一夏の疑問に紅葉が答える。

「白式の武装の雪片弐型には『バリアー無効化攻撃』が備わっている、それによってＩＳの『絶対防御』を発動させて、いっきにシールドエネルギーを削ることができる。しかし、威力が強いかわりに自分のシールドエネルギーを攻撃に転化させるんだ。だからあの時、白式のシールドエネルギーが０になったんだ」

紅葉の説明を頷きながら聞いているのは箒ただ一人だけだった。当の本人は、

「へ、へぇぇぇ～」

「一夏、わかってないだろ」

箒のツッコミになにも言えない一夏。もちろん俺もあまりわかってない。

「さて、そろそろ俺は行くな」

「ああ、頑張ってこい」

俺はセシリアと対戦するためにピットに急ぎながらさっきの一夏とセシリアとの試合を思い出してみる。

セシリアは中近距離射撃型らしい、だから一夏の白式は相性が悪かった、しかし、逆に考えてみれば懐に飛び込みさえしたら攻撃は通るってことだ。

「まぁ、俺はＩＳのことはあまり知らないしな」

俺や一夏は千冬姉さんにＩＳ関係のことについて一切関わらせないようにしてきた。

俺がＩＳを動かしたのは、１ヶ月前に２０分間だけだ。対してセシリアは３００時間はいってるだろう、

ここまでの経験の差がありながら、さっきの試合では一夏がもう少しのとこまで追いつめていた。

セシリアは完全に一夏をなめていたからあの結果だったんだろうが、しかし、次はいくら相手が素人でも手を抜いてはくれないだろう。

そうなった場合、俺が勝つ確率が低い。

「でも、そのほうが燃えるしね」

俺は、ピットに入り。右手を突き上げ、その手にあるブレスレット

に呼びかける。

「行くぞ！『蒼月（そうげつ）』！」

俺の体を光の粒子が包む、そして、それは姿を現す、蒼い装甲に黒のラインがはいったそれは、俺が手に入れた力、誰かを守る力。

「じゃあ、いってくる」

「ふん、せいぜい一夏（大馬鹿者）みたいなことにならんようにな、馬鹿者」

もっと別の呼び方はないのかよ!?・・・・・まぁ、千冬姉さんらしいな。

そう言ったのが終わるのと同時に俺はピットを飛び出した。

今、俺の前にはさっきの試合で破損した部分を修理してきたセシリアがいる。

「さぁ、これで決着にしようか」

「ええ、さっきみたいな失敗はしませんわよ」

「まぁ、できるなら手を抜いてくれるんなら、そっちがいいんだけどな」

俺は、近接ブレードの『蒼鬼』を呼び出す、セシリアも『スターライトｍｋ？』を呼び出している。

次の瞬間、俺はセシリアめがけて突っ込んだ。しかし、セシリアはなんなくかわし、ＢＴ兵器『ブルー・ティアーズ』で反撃してくる。その攻撃を躱そうとしたが全部は躱し切れなかった。

――――――ダメージ３０。シールドエネルギー残量５７０。実体ダメージレベル低。

（そう簡単に攻撃させてくれないか）

そう呟くと、またセシリアめがけて突進した。

「結城君、さっきから同じ行動ばっかりしてますね」

海斗に試合をみていた山田先生が不思議そうに言ってくる。

「あいつはなんらかの考えがあるんだろう。あの行動も意味が・・・・あるものだと信じていたい」

はぁ～とため息をつくと改めてモニターに目をやる。
ビットの攻撃を躱しながらセシリアに突撃していくが、ことごとく躱されて反撃を食らっている。
「なんで、あいつはほかの武器を使わないんだ？」
そんな一夏の問いに答えるのはもちろん紅葉である。
「海斗のＩＳ『蒼月』の武装『雷電』は威力が絶大な大量のエネルギーをつかうからないつもはできるだけつかわないようにしている。『雷砲』は威力はそこそこだが、複数の相手には有利のはずなんだけど――――」
紅葉が言うのと同時に、海斗が『雷砲』をセシリアに撃った・・・・はず。海斗が撃った弾丸はセシリアにかすりもしなかった。
「――――――まぁ、海斗は中遠距離ではかすらせることもできない、だから、つかわないんだ。」
「「「「なるほど」」」」
紅葉の説明に一同、頷く。
「でも・・・あの機体には決定的な弱点がある」
「じゃ、弱点？」
「あの『蒼月』は元々、欠陥機として処理されるはずだった機体なんだ。」

「け、欠陥機！？」

紅葉の告白に千冬以外のみんなは驚いている。

「あの機体は、燃費が悪く、どうしても装備があれ以上、開発できなくて結局、欠陥機として処理されそうなったとき、海斗が起動させたんだ。その後、どうにか燃費はマシになったんが、操縦者があれじゃ宝の持ち腐れなんだよね」

「つまり、弱点というのは・・・」

一夏がおそるおそる聞いてみると、

「ああ、海斗自身と燃費の悪さなんだよね」

ため息混じりのその言葉は半ばあきらめみたいなものが感じられた。

――――――――――シールドエネルギー残量６５。実体ダメージ中。

（そろそろ、やばいかもな）

さっきから何度もセシリアの懐に飛びこもうとするが何度やっても駄目だ。

（くそっ、せめて近くまでいけたら）

近距離からの砲撃。それさえ決まればこの試合は一気に逆転することができる。海斗はそういう確信があった。

「ちょこまかとちょこまかと！・・・・これで決めますわ」

セシリアはビット全部をつかって攻撃してきた。

飛んできたビットを2基を斬り、後の3基は回し蹴りで吹き飛ばす。

そして、俺は背中のスラスターを全開させた。

もうちょっとで攻撃範囲にはいるというときに最後のビットがこちらを向き、ミサイルを放ってくる。

「一夏と同じように攻撃は喰らうかよ！」

海斗はすぐ回避行動をとるとそのまま、刀を上から振り下ろそうと

――――――――

「あなたもまだまだ甘いですね」

そういうと、セシリアは近接用ショートブレードを展開させ、海斗に突き立ててそのまま海斗を地面にたたきつけた。

『勝者――――セシリア・オルコット！』

第8話　蒼き月ＶＳ蒼い雫（後書き）

今回は海斗メインだったのかな？

感想などあったらコメントよろしくい願いします。

第9話　束の間休息!?／海斗と織斑（前書き）

今回はなんかほのぼの・・・・・じゃないな

第9話　束の間休息!?／海斗と織斑

「というわけで、織斑君、クラス代表決定おめでとう～～」

ぱん、ぱんぱーん。

と、クラッカーが鳴り響く。

「なんでこんなことになってんの?」

一夏は意味が分からないみたいで、さっきからきょろきょろしている。

「なぁ、海斗」

「うん?なんだ?」

「俺ってさ負けたはずだよな」

「ああ、たしかに負けたな」

そんなこんな会話がさっきから続いている。理由は今日の一時間目にさかのぼる・・・・・

「織斑がクラス代表だ。異論はないな」

ＳＨＲで教壇に立っているのはこのクラス担任であり俺の義理の姉でもある。

「な、なんで！？」

一夏は驚いたように立ち上がり千冬姉さんに抗議している。まぁ、無理だろうけど・・・・・

「私が辞退してさしあげたのですわ」

そいったのは、いつもの腰に手を当てた格好をしているセシリアだった。

俺と一夏は先日このセシリアにＩＳでこてんぱんにされたのである。

「このセシリア・オルコットが相手だったので負けるのは当然ですわ、そこで、一夏さんにクラス代表を譲って差し上げたのですわ。実力を伸ばすには実戦が一番ですからね」

うん？今、セシリア一夏さんって呼ばなかったか？まぁ、どうでもいいか。

そんなことがあり、今『祝　織斑君代表決定おめでとうパーティー』が行われているわけで・・・・

「織斑君、セシリアさん一緒に写真撮らせてくれないかな」

そうやって来たのは、２年生の写真部部長の黛薫子だった。

さっきから一夏やセシリアに質問しているのだが、質問を返しても、

「あ、そこ適当、捏造しとくね」

と言い続けている。あれでいいのか・・・・。

なぜかセシリアは顔が赤かったが、気にする必要はないだろう。

パーティーはなんやかんやとその後、１０時まで続いた。

「案外、疲れたな～」

俺は部屋に戻り、ベットに腰かけた。

「そうか？私は楽しかったけど」

「いや、パーティーは楽しかったけど、別の意味で疲れた」

俺が言う別のものとは、パーティーの最中、ここぞとばかりに女子が質問攻めをしてきたので色々と疲れた。まぁ、昨日は千冬姉さんずっと説教されていたからな、それと比べればなんてことはないんだが。

紅葉とは結局あの事件のあと、一緒の部屋のままになった。もちろん一夏と箒も一緒の部屋だ。
部屋が用意できず、さらに山田先生のミスでこんな部屋割りとなったが今更変えなくてもいいという、箒と紅葉からのお願いだったので山田先生と千冬姉さんは承諾した。千冬姉さんの去り際に、

『変な気を起こすなよ馬鹿ども』

変な気とはなんなのかわからないが、まぁ、今はこうして紅葉と一緒に同居しているわけだが・・・・

紅葉とはここに来る前から一緒だったので別に気にしていない。

「そういえば・・・」

紅葉がふっと何かを思い出しように言ってきた。

「おまえと織斑姉弟はどんな関係なんだ?」

「あれ?言ってなかったけ?」

「あれは、たしか・・・・9年前だったか?」

俺は9年前、織斑家の前に倒れていたところを千冬姉さんに拾われた。なんで俺がそこに倒れていたのかはわからない・・・いや、覚

えてないといった方が正しいな、俺は千冬姉さんに拾われて、織斑家で過ごし始める前の記憶がない。覚えていたのは自分の名前くらいだった。俺がどこから来たのか、俺の両親がどんな人なのか知らない。ただ一つ、俺が千冬姉さんに拾われる以前から持っていたダイヤのネックレスは何故か大事にしている。何故かはわからない、ただ、大切な物だというのはわかる。そうやって、おれは中学１年まで一緒に育てられた。でも、中学１年の冬、俺は家を出て行った。その後、紅葉と出会って、この蒼月を手に入れた。そして、このＩＳ学園で一夏たちと再会したというわけだ。

「なんだか、複雑なんだね」

そんな会話していると、もう夜の１１時だということわかり二人とも深い眠りについた。

「ここが、ＩＳ学園か・・・・」

今は、まだ、一夏たちはパーティーをやっている最中。

ボストンバックを肩に背負った女子がそこにいた。

体型はやや細めで身長はやや低い。

「まってなさいよ、一夏!!」

女子はそう叫ぶといそいで走っていた。

深夜１２時。

漆黒の景色に似合わない、桜色の髪をした女の子が一人立っていた。

「３年ぶりかな・・・やっと、会えるね――――――

――――――――――海斗」

第9話　束の間休息!?／海斗と織斑（後書き）

どうでしたか。やっと、新キャラ出せそうだ・・・・

感想などコメントよろしくお願いします。

第１０話　紅葉の怖すぎる趣味／二人の転校生（前書き）

眠い・・・・・・

第１０話　紅葉の怖すぎる趣味／二人の転校生

「ふぅ～疲れたー」

「まったくだ」

今は、放課後。セシリアとの代表決定戦以降、海斗と一夏は一緒に箒とセシリア達とＩＳの特訓をしているのだが、その教え方がおかいいのだ。

「ズカッ！ドカン！という感じだ」

「防御の時は、右半身の斜め上前方５度傾けて。回避の時は・・・」

という感じなのだ。とにかくわかりにくい、だが、本人の前で言えるわけがなく、今も特訓は続いている。

「今日はとくに色々あったからな」

授業の時、急降下からの急停止ができなく、地面に突っ込んでしまい、その時できた穴というよりはクレーターを埋めなくてはいけなかったのでかなり疲れた。

「でも、ＩＳには大分なれたな」

「ああ、そうだな」

これだけが唯一特訓の成果である。

「俺はここで、またな」

「ああ、またな」

一夏はそういうと、走っていてしまった。

「にしても、すごい設備だなここ・・・・・」

改めたみるとその凄さがわかる、国立なだけあって設備はなかなかなものである。

「あ、お～い紅葉。なにやってんだ～」

海斗見た先には一人で歩いている紅葉がいた。

「海斗か、なにかようか？」

「いや、紅葉をみかけたから」

「なんだそういうことか」

「なぁ、なにうやってんだ？」

「ああ、これか？」

紅葉は今大きなバックを持ってる、かなり重たそうだ。

「生活用品でも入ってんのか？」

「いや、この中には私のお気に入りがはいっている」

「お気に入り!?」

お気に入りという言葉を聞いた海斗は顔が真っ青になっていく、

「お気に入りって、まさか!!」

ふふふっという不敵な笑みを浮かべた紅葉は、

「そうだ!私の銃のコレクションだ」

あまりにも堂々と発言した紅葉に呆れることもできない海斗。

「おまえ・・・そんなもの持ってきていいのか」

「何をいってるのかね海斗君。ここＩＳ学園はどこの国や組織にも属さないところだぞ、故に銃を持ち込んでも問題ない!」

（あれは、そういうことか）

紅葉は放課後、妙に急ぎ足で教室を出て行った事を思い出した。

ＩＳ学園に来る前は、いろんな所を転々としていたが紅葉のこの趣味により何度も逃げ回った記憶がある。

「で、それはどこに置くつもりだ」

「もちろん、お・へ・や」

「いやいや、あぶないだろう。だいたいなんでこんなとこまでそれを持ってくるんだよ」

「え、それはいつでも海斗を撃てるように――って冗談だってば」

海斗が放つ殺気に素早く反応し、弁解する紅葉。

「じゃあ、本当の理由はなんだよ」

「ほ、本当の理由は、その・・・」

顔を赤らめてもじもじしている紅葉。

（本当の理由なんて言えるわけないだろう。だって・・・）

海斗に群がる他の女子どもを蹴散らすためだなんて。

銃で蹴散らすとはなんとも恐ろしいことなのだがそのことを知る由もない海斗は、

「まぁ、いいか。でも、普段は隠しておけよ後々めんどくさそうだから」

そう言い終わったかと思うと、

「そうだ。今度、射撃のコツ教えてくんない？いくらなんでも今のままじゃ、恥ずかしいから。頼む、お前、射撃得意だったろ」

海斗はＩＳはもちろん、祭りの射的でさえ一発も当らないほど苦手なのだ。

もちろん、断る理由もないので、

「いいよ、さすがにあれじゃ、こっちも恥ずかしいから」

「まじか、サンキュー」

「それじゃ、一緒に帰ろうぜ」

「あ、そのかばん持って行ってやるよ」

「重たいけど大丈夫？」

「平気平気、俺は、男だぞ」

その後、海斗が寮についたのはそれから1時間たった後だった。

「織斑君、結城君。聞いた？転校生の話」

朝のＳＨＲが始まる前、そんな話題が飛び込んできた。

「なんでも2人もいるみたいで、しかも、二人とも代表候補生なんだって」

なんで今頃、転入してくるのかは疑問だが、代表候補生というのはすごいな。

「私の存在を危ぶんでの転入かしら」

いつものごとく上から目線のセシリア。だが、代表決定戦以降すこし棘は無くなった。

「一人は中国の代表候補生で、もう一人は日本の代表候補生だって」

「うん？なんで今頃、日本の代表候補生が転入してくるんだ？」

「私、よくはわからないんだよね」

「でも、クラス代表戦は大丈夫だよ。専用機持ちがいるのは1組と4組だけだから」

「その情報古いよ」

「この、凰　鈴音が代表になったからね」

クラスの入り口で堂々と立っていたその子に一夏は、

「鈴？鈴のか？なにやってんだすごく似合ってないぞ」

「な、何言ってんのよあんたは」

「ぷっ。」

「海斗…なにわらっているのかな」

「ふん、鈴のこと以外なにがあるのかな」

「海斗あんたね――――」

ゴツッ！

そんな会話は千冬姉さんのげんこつで妨げられ、渋々、鈴はクラスに帰った。

「今日は転校生を紹介します」

山田先生がドアに向かって合図すると、

ガラッ！

ドアから入ってきたのはきれいな桜色の髪をした美しい女子だった。

「桜野　遥っていいます1年間よろしくお願いします」

「え？は、遥？」

そこにいたは、3年ぶりに再会した幼馴染だった。

第１０話　紅葉の怖すぎる趣味／二人の転校生（後書き）

紅葉が怖すぎるだろあれ。

第11話　鈴と一夏（前書き）

今回は長めですので最後までよろしくおねがいします。

第11話　鈴と一夏

「は、遥がなんでここに・・・」

驚きの色を隠せない海斗。それもそうである、彼女は小学生のときから一緒だった幼馴染なのだ。

「なんでって・・・」

言われた本人は、困ったような顔でこっちを見ている。

「静かにしろ、授業を始めるぞ」

千冬姉さんは騒がしかった教室を一喝し、いつものように授業を始める。

「へぇ～。遥、日本の代表候補生なんだ」

海斗と遥は食堂で昼食を食べている。ちなみに、海斗のメニューは

焼き魚定食だ。ちなみに、海斗は手先が不器用なので魚の骨に苦戦している。

「でも、もう3年近くになるのか・・・・」

海斗が織斑家を飛び出してからもうそんな年月がたつのだ。

「でも、海斗がテレビに出てるときはびっくりしたよ」

海斗も一夏同様、男でＩＳを動かせることがわかり、連日テレビを騒がせていた。

ドンッ！

「一夏さん、この方と、つ、付き合ってらしゃるの？」

声がした方向を見ると、そこには、一夏と鈴に箒とセシリアがすごい勢いで何かを言っていた。

「一夏も大変だな」

だが、海斗は他人事なのでほっとくことにする。どうせ、後に地獄を見るのは一夏なのだから。

「でも、遥はいつ、代表候補生になったんだ？」

「海斗がいなくなって、１年ぐらい後かな・・・・」

「そうなんだ。いや～、俺がいない間、皆が驚くほど変わっていて驚いたよ」

これは、本当のことだった。海斗が飛び出して行ってる間、一夏はすごく大人びたし、箒や鈴も見違えているみたいに綺麗になっていた。それは、もちろん・・・

「遥も綺麗になったしな」

「え?か、海斗何言って」

海斗のいきなりの発言に顔を赤らめてしまい、顔をそむけてしまう。

「・・・・そろそろ、いいか?」

この空気に耐えられないと言わんばかりに、紅葉が言ってくる。

「海斗、そろそろこの子と関係を紹介してもらいたいだけど」

「あぁ、ごめんごめん。」

海斗は両手を顔の前で合わせてあやまっている。

「遥とは、小学校から中学まで一緒だったんだ。つまり、幼馴染だ」

次に、遥に紅葉を紹介し始める。

「紅葉は俺が飛び出しったあと、色々あって一緒に旅してたんだ」

「一緒に・・・?」

なぜか、遥の声に怒りが混じっていた。

「まぁ、これからまたよろしくな遥」

「あ、うん！」

「でね、海斗、話があ――――」

「あ、やべぇ。もうこんな時間じゃねえか、たしか、次って実技だったよな」

うん、そうだよという答えを聞いた直後、一夏とともに去って行った。

「今日はこの辺にしておきましょう」

「そうだな」

今、織斑一夏は第3アリーナで特訓していた。

「はぁ、はぁ」

「いつも鍛えてないからそんなことになるのだ」

箒の心無い言葉も今の一夏にはどうでもよかった。

今日は、はっきり言って地獄だった。いつも一緒に訓練をしている海斗が今日に限って、

『悪いな。今日は、別の用事がはいってんだ』

と言って、特訓という名の地獄を回避しやがった。おかげさまで、『打鉄』を装備した箒と、『ブルー・ティアーズ』を展開させたセシリアと同時に戦うはめになった。

「ふぅ～」

そう言って腰を下ろす。場所はアリーナの更衣室。

「一夏おつかれ。はいっ、スポーツドリンクとタオル」

「おっ、サンキュー」
相変わらず、体のことばかりきにしている一夏は、運動の後に冷たいものを飲むのは嫌うので、あえてぬるめのものを渡す。

「やっぱさ、一夏。私がいないと寂しかった？」

「ああ、遊び友達が減るのは大なり小なり寂しいだろ」

ガクッっと少しずこけった鈴だったが、すぐ体勢を戻し、話を続けた。

「そういえば、あんたの部屋ってどうなってんのよ？」

鈴の質問に一夏はサラッと答える、

「１０２５室だけど・・・なんだ？」

「遊びに来てやろうとしているんじゃない」

「ま、今夜遊びに来るからあんた部屋にいなさいよ」

鈴はそういいながらアリーナの更衣室を後にした。

「そうじゃなくてこうだって」

海斗は今、紅葉による射撃の練習をしていた。一夏と別れた後、紅葉と一緒に別のアリーナで訓練しているのだ。

海斗の撃つ弾は相変わらず、的とは全く違う方向にとんでいった。

「これが、当てられないんじゃ、ＩＳの戦闘の時はもっと当たらないよ？」

「わかってる・・・・けど・・・」

海斗にしては弱気な返事だ。

「ふふふっ」

この二人の会話を端の方で見ているのは、今日転入してきたばかりの、桜野遥だ。彼女は暇という理由でこの練習を眺めていた。

「やっぱり、海斗は相変わらずだね。昔と今も変わらないな」

などとつぶやいている。

「ふぅ。今日はこの辺にしとくか」

「ああ、ありがとうな紅葉」

そういうと、紅葉が、

「私は、ちょっと寄るところがあるから先に帰っててくれ」

「わかった」

そんな、なにげない会話の疑問を遥が質問してくる。

「え？海斗って部屋一人部屋じゃないの？」

「うん、そうなんだ。色々とあって俺は紅葉と同じ部屋だ」

「あの子と一緒なんだ・・・・・」

ズーンという効果音が聞こえてくるような暗い表情になってしまう。

なにかあったのか？

二人はそういいながら寮まで帰って行った。

海斗と遥は海斗の部屋に急いでいた。時刻はそれなりに遅かった。
そのとき、

「最っっっ低。女の子と約束を覚えてないなんて、男の風上にも置けないやつ！犬に噛まれて死ね！」

という、声が聞こえたかと思うと、一夏の部屋から鈴が飛び出してきた。

「あ、鈴おまえどうし――――――」
しかし、鈴はそのままいってしまった。

「あいつどうしたんだ？」

「う～ん？なにかあったのかな」
それから先は二人は考えないようにし、部屋に急ぐ。

あれから2週たった今でも鈴の機嫌はなおらないというかあの後、一夏が鈴をもっと怒らしてしまった。

一夏が謝れば話が早いのだが・・・・
なにしろ、あんなことがあったからな・・・・・

「で、一夏、反省した?」

「へ?なにが?」

「だ、か、らっ!あたしを怒らせて申し訳なかったとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょが!」

「いや、・・・・・そういわれても、鈴が避けていたじゃねえか」

「あやまりなさいよ」

「だから、なんでだよ約束を覚えていたじゃねえか」

「約束も意味が違うのよ」

「あったまきた、じゃあこうしましょう次の代表決定戦で勝った方が、いうことをきかせられるというのはどう？」

「ああいいぜ、負けたら説明してもらうからな」

鈴はとたん顔を赤らめ、もじもじし始めた。

「せ、説明は、その・・・・」

そこまでしか聞き取れなかった。

「いやなら、やめてもいいぞ」

「だ、誰がやめるもんですか。あんたこそ、謝る練習しておきなさいよ」

「誰がやるか、馬鹿」

「馬鹿とはなによ馬鹿とは！この朴念仁！アホ！マヌケ！」

むかっ

「うるさい、貧乳」

あ、やば・・・・

ドガァァンッ！

その後、鈴のパンチによってクレーターができていた。

そんなことがあり、まだ仲直りできていない。

翌日、クラス代表戦１回戦　１組織斑一夏ＶＳ２組凰　鈴音だった。

第11話　鈴と一夏（後書き）

次は、バトルだ～～～。

第１２話　謎の乱入者（前書き）

今回は、一夏メインで・・・

第１２話　謎の乱入者

クラス対抗戦試合当日、噂の新入生どうしの対戦とあってアリーナは満席だった。

（にしても、よくこんなに集まったもんだな）

一夏の目線の先には、鈴とその専用ＩＳ『甲龍』がいた。『甲龍』は白式と同じで近接パワー型で、両肩のところにういている棘つき装甲（スパイク アーマー）がやたら自己主張している。

『それでは、両者指定された位置についてください』

アナウンスに促され一夏と鈴は位置についた。

「一夏。今謝るなら痛めつけるレベルを下げてやってもいいわよ」

「ふん、どうせ雀の涙だろ。全力でこい」

鈴は余裕の表情でこちらを見ている。鈴やセシリア達みたいな代表候補生は死なない程度に弄ぶことも可能だろう。だからといって、手を抜かれるのも嫌なのだ。

「ふん、なにがなんでも、謝ってもらうんだからね」

「そっちこそ、俺が勝ったらちゃんと説明してもらうからな」

２人はそれぞれ意気込みを述べたとこで、

「それでは、両者試合を始めてください」

ブザーが鳴り終わるのと同時に二人はぶつかり合う。一夏の『雪片弐型』と鈴の青龍刀というにはかけ離れたそれぶつけ合う。鈴はそれを自由自在に操って攻撃してくる。

（やばい、このままじゃ消耗戦になるだけだ。ここはいったん距離を取って――――）

「――――甘いっ！」

甲龍の肩のアーマーがスライドして開き、中心の球体が光ったと思ったとき、

「ぐあっ！」

目に見えない何かに殴られたような感覚があり、地面にたたきつけられていた。

「なんだあれは！？」

モニタールームで試合をみている箒がつぶやく。

「あれは、『衝撃砲』ですね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で発生する衝撃それ自体を砲弾として撃ちだす――――」

ブルー・ティアーズと同じ第3世代平気ですわと、セシリアが続けるが箒は聞いてはいない。

ちなみに、ここに海斗と遥はいない、海斗は試合が始まる10分ほど前に、階段から落ちて気絶した、遥はその付き添いだ。紅葉は一夏の試合を興味深そうに見ている。

（一夏――――）

一夏が攻撃を受けるたびに胸が痛い。セシリアのときより激しい戦闘にただ無事を願っていた。

「よくかわすじゃない。この『龍咆』は砲身も砲弾も見えないのが

特徴なのに」

たしかに、さっきから一切見えない。なんとか躱せてはいるが、いつかは負ける。あの、龍咆は角度などが無制限で撃てる。そして、操縦者の鈴はその能力を高いレベルで会得してる。

一夏は先週、千冬のいったことを思い出していた。

（いや、まだかつ勝機はある――――あれなら、鈴に大ダメージを与えらる）

一夏はなにかを確信したような顔になる。

「余裕の顔ね。でも、どこまで続くかしらね」

鈴は言い終わるタイミングで2本の青龍刀を連結した『双天牙月』で攻撃してくる。それを躱しながら、この1週間で会得した『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』のタイミングをうかがっている。

『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』は出しどころさえ間違わなければ一夏や海斗でさえ代表候補生とわたりあうことができる。

鈴が『龍咆』を射撃体勢にはいる前に加速体制にはいる、

「うおおおおつ！」

鈴に雪片の刃が届きそうというとき、

ズドオオオオンッ！！！

「！？」

ものすごい轟音が鳴り響いた。それは、アリーナの遮断シールドを貫通して入ってきたらしい。

「い、いったい何が起こっていて・・・・」

すると、プライベートチャンネルに鈴が飛んできた。

『一夏、試合は中止よ。早くピットに戻って！」

突然も出来事に一夏はよくわからない、

「戻れって・・・お前はどうすんだよ」

『私は、残ってあいつを足止めする』

「足止めって、お前はどうすんだよ」

「しかたないでしょ、あんたの方が弱いんだから」

その言葉に一夏は返す言葉もない。

「あぶねえ」

一夏は鈴を抱きかかえ、相手の攻撃を躱す。

「ビーム兵器か、しかも出力がセシリアのＩＳより上だ」

ハイパーセンサーの簡易解析を見終わると

「ば、馬鹿！おろしなさいよ」

「殴るな！――――来るぞ！」

うるさい鈴はさておき、煙の中から煙を晴らすかのようにビームを連射してくる。煙のなかから現れたのは、『全身装甲（フル・スキン）』のＩＳだった。

「お前・・・何者だ」

一夏の問いに乱入者は答えない。

『凰さん、織斑君。いますぐ戻ってきてくださ――――――」

「俺たちでやります」

山田先生が言い終わる前に、一夏が言った。

『でも――――』

「それに、今はほかの生徒の避難を優先させるべきです」

山田先生はそれ以上はなにも言わなかった。

「くっ」

一夏の斬撃や鈴の衝撃砲をことごとく躱す、さっきから同じ攻撃を繰り返しているが、かすりもしない。

「一夏の馬鹿！ちゃんと狙いなさいよね」

「狙ってるつーの！」

相手のスラスターの出力がすごく零距離からの攻撃もかわされてしまう。

（参ったな）

残りの、シールドエネルギーが６０を切った。『シールド無効化攻撃』はあと１回しか出せないだろう。

「なぁ、鈴」

「うん？なによ？」

「あいつの動きなんつうか・・・機械じみていないか？なんか・・こう・・あれ、本当に人が乗ってんのか？」」

「なにいってんのよＩＳは人が乗らなきゃ動かな――――」

鈴はそこで言葉を止めた、なぜなら、一夏の言うとおりさっきからあのＩＳの動きはおかしい、全く同じ動きを４回も繰り返している。いくらなんでも同じ行動を一寸の狂いもなくできるはずがない、しかし、今目の前にいる敵はそれをやってのけているのだ。

「じゃあ、仮にあれが無人機だとしだら勝てるの？」

鈴の問いかけに一夏は静かに頷く。

「じゃあ、あれが無人機だと仮定して攻めましょう」

そのとき、

「一夏ぁ！」

アリーナの中継室にいたのは、箒だった。

「男ならその程度の敵に勝てなくてなんとする」

箒の表情は怒っているようで焦ってるような表情だった。

「・・・・・・」

――――――――――――――――まずい！

「箒！逃げろ！！」

敵のＩＳは照準を箒に向ける、間に合わな――――その瞬間、

ドカッッ！！

敵ＩＳがいきなり吹っ飛んだ、一夏は上を見上げるとそこにいたのは、

蒼の装甲に黒のラインがはいったそれは月のように輝いているように見えた。

「すまん、遅れた」

そこには、蒼月を展開した海斗がいた。

「うんで、あいつはなんなんだ？」

海斗はは状況が分かってないらしい。

「説明は後だ――――鈴、やるぞ」

一夏の合図で鈴は衝撃砲を発射しようとしたとき、

「なんで、前に出てくんのよ」

「いいから、撃て！」

「わかったわよ、もう」

鈴はため息をつくと一夏に向かって思いっきり衝撃砲を放った。

「オオッッ！」

一夏は後ろに衝撃砲の弾丸が当たると加速した――――

――――――【零落白夜】使用可能。

ＩＳに始めて触れた時の一体感、そして、全身から湧きだす力を感じる。

（俺は・・・・・千冬姉を、箒を、鈴を、海斗を、皆を守る）

必殺の一撃はてきＩＳの右腕を切り落とした。

しかし、その反動で俺は左拳を受ける。さらに、零距離からビームを叩き込むつもりらしい。

『狙いは？』

『完璧ですわ』

ビットの一斉射撃をくらい敵のＩＳは地上に落ちた。

『さすがだな、セシリアならやってくれると思ってた』

『な・・と、当然ですわ！』

セシリアは顔を赤らめている・・・

「ふうっ。これでおわ――――」

――――敵のＩＳ再起動確認。警告！ロックされています。

「！？」

やばい！何も準備してない一夏は動くことさえ出来ない。

敵のＩＳの手からビームが撃たれる寸前、刹那、敵ＩＳはなにかによって撃ち抜かれた。

「何がおこって――――」

何がおきているのかわからない一夏たちの前にいたのは、白銀のＩＳだった。

「お、お前は――――」

海斗がそういうのと同じタイミングで、そのＩＳは手にもったライフルで海斗を撃ち抜いた。

第１２話　謎の乱入者（後書き）

今回は長かったですが、読んでくださってありがとうございました。

第１３話　白銀のＩＳＶＳ桃色の螺旋（前書き）

今回もバトルです。最後までよろしくお願いします。

第１３話　白銀のＩＳＶＳ桃色の螺旋

「お、お前は――――」
海斗が言うのと同じタイミングで、白銀のＩＳは手に持ったライフルで海斗を
撃ち抜いた――――――

「あれ？」

なにも起きない、海斗はに何が何だかわからない。たしかに撃たれたはずだった。だが、なにも起きない。白銀のＩＳから放たれたビームは海斗のギリギリ横をかすめただけだったのだ。
何がおっこたのか理解すると、すぐさま白銀のＩＳから距離をとった。

『なんなの？あいつ』

鈴がオープンチャンネルで話しかけてくる。海斗はあいつが何者なのかは知らないがあれにあったことならある。

『わからない・・・だが、敵だということはわかる』

一夏が鈴の問いに答える。たしかにこの状況で話をしてる場合ではないことはわかる。

「おまえ、なんでここにいる・・・・目的はなんだ？」

海斗は白銀のＩＳに向かって話しかけているが相手が答える素振りは見えない。とにかく、今は先生の部隊が来るまでこいつをどうす

るかを考えなくてはいけない。
相手の顔はバイザー型ハイパーセンサーで隠れて見えない。

「答えないか・・・ならこの際関係ねぇ！」
海斗は近接武装『蒼鬼』を展開させ、白銀に斬りかかるが、白銀のＩＳは難なく躱し、ビームサーベルを呼び出し海斗に応戦する。

蒼色の光と白銀の光が激しくぶつかる。海斗は『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』で一気に距離を縮める、

「これでもくらえ」
海斗はプラズマ集束砲『雷電』と電磁レール砲『雷砲』を同時に展開させる。『雷電』と『雷砲』の４門同時に撃ちだすこれは、シールドエネルギーを使う代わりに爆発的な攻撃力を生みだす。『蒼月』最大攻撃力をほこるそれを、零距離で放つ。白銀のＩＳはアリーナの壁に激突したが、すぐに起き上がりライフルで海斗を狙う、

だが、そのライフルはすでに撃ち抜かれていた。

「は、遥！！」

桜色をしたＩＳ『ローザスパイラル』を身にまとい、スナイパーライフルを展開させている。

「ふぅ～。どうにか間に合ったね」

白銀のＩＳはその場からの離脱をしようとしたが、すぐに海斗や遥、セシリアに囲まれてしまう。

「ここからは逃がしませんわ」

セシリアの攻撃をかわしつつ、ビットをビームサーベルで撃ち落としながら、上空に向かって『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』をする。

「逃がさないよ」

遥は展開させている、スナイパーライフルで白銀のＩＳを撃ち落とした。

その瞬間、白銀のＩＳがまばゆい光に包まれた。

「まさか、一次移行（ファーストシフト）！？」

光が収まるとそこにいたのは、さらに、輝きを増したＩＳがいた。
輝きを増したＩＳは『瞬時加速（イグニッション・ブースト）』でセシリアに接近すると、ビームサーベルを叩き込む。

「きゃっ！」

「セ、セシリア！」

白銀のＩＳは攻撃の手を緩めることなくさらに遥に攻撃を――――

「甘いっ！」

すぐさま近接専用武器『春風』で応戦する。『春風』はナイフみたいな形状で2本装備されている。
白銀のＩＳはすぐさま距離を取り、ビームライフルを放つが、遥は左腕のエネルギーシールドで防ぐ。
白銀のＩＳはさらに攻撃をしようとしたが、なぜか攻撃止め、アリーナから飛び去った。

「あ、待て！」

「深追いはいけないよ海斗」

すぐさま後を追いかけようとする海斗を遥が止めた。

「今は、先生たちの指示に従おう」

遥はそういうとアリーナに降りていった。

「痛てぇ」

一夏は今、保健室にいた。さっきの襲撃事件のあと全身打撲と診断された。ここ1週間は地獄だそうだ・・・痛てぇ。

「あ、一夏今いい？」

そこにいたのは鈴だった。鈴は俺よりは軽傷だったようで、今はぴんぴんしている。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

気まずい。ここ数週間ろくに口もきいてなかったから余計に気まずい。

「鈴、そのなんだ・・・・悪かった。色々とすまん」

とにかく謝った。内容はどうあれ一夏が悪いので謝る。鈴は面食らった顔でみている。

「まぁ、私も・・・その・・・ムキになってたし・・・ごめん」

どうやら許してくれるようだ。

「あの、一夏。約束のこ――――――」

「おーい、一夏。どうだ体の調子は？」
そこには、海斗が保健室に入ってくるところだった。
（だぁぁぁ、なんでこいつは毎回こういうときにくるのよ！）
小学校のときもそうだが、いつも海斗はこういう時ばっかりくる。
まさに、悪魔である。

「げぇっ、鈴なんでこんなところに」

「それはこっちのセリフなのよ」

「はっ！まさか・・・・・ごめんな鈴、いいところ邪魔しちゃって」

顔が赤くなり、あわてて訂正しようとしている。

「じゃっ、邪魔者は消えますか・・・・・鈴、がんば」

小さくガッツポーズし保健室を後にした。

「あ、鈴、何か言いかけてなかったか？」

「い、いやなんでもないから・・・ははは」
そういうと、鈴はでていってしまった。

「いや～。疲れた疲れた」

俺は部屋に着くなりベットにダイブした。

「にしても色々ありすぎて、なんか頭が混乱してきた」

海斗はたいして怪我はしていない。どちらかというと一夏のほうが重傷なのだ。

「一夏は鈴と仲直りできたかな」

そんなことを考えているうちに睡魔が襲ってくる。そのまま俺は眠りについた。

「日向、お前はこいつを知ってるのか？」

千冬と紅葉は今、モニタールームでさっきのＩＳ襲撃事件の映像を見ていた。

「はい。以前のＩＳ研究所襲撃事件の際、奪われたＩＳに間違いありません」

「そうか・・・・」

千冬はそういうとモニターに目を移す。

そこには、あの白銀のＩＳが映し出されていた。

第１３話　白銀のＩＳＶＳ桃色の螺旋（後書き）

やっと、１巻内容が終わりました。長かった・・・

次も読んでくださいね。

それじゃ、さようなら～～～

第１４話　喧嘩はいけません（前書き）

今回は日常？回です。

第１４話　喧嘩はいけません

「海斗、今日という今日は許さないからね」

「おお、いいぜ。こっちこそお前との決着つけたかったとこだ」

謎のＩＳの乱入で中止になったクラス代表戦から数日がたった。謎のＩＳと交戦した、一夏と鈴はもちろん、海斗、遥、セシリアは政府や色々なところの取り調べなどがあり、ここ数日大変な日々が続いていたがこのところは大分落ち着きを取り戻しつつあった。

「今日も平和だな」

「あれのどこが平和だというのか」

箒のツッコミには全く反応しない一夏。今目の前では海斗と鈴が喧嘩をしている。一夏や遥は小学生のときから一緒なのでもう見慣れているのだが、セシリアや箒は止めさせようとあたふたしている。

「いつものことだよ、海斗と鈴が喧嘩するのは」

一夏は止める気はなく、ただ二人を眺めているだけだ。一夏は昔、二人の喧嘩を仲裁しようとしたとき大変な目にあったのでもうほっとくことにしている。

「あれは、喧嘩というのでしょうか？」

セシリアが呆れて言っている理由は、海斗たちの喧嘩の仕方にある。毎回どっちかが喧嘩の原因をつくっているのだが、喧嘩のレベルが違うのだ。

海斗は今、どこから取り出したのか木刀で鈴を攻撃している。鈴はというと木刀を簡単に避けている。いつもこの喧嘩は――――

「うるさいぞ、誰だ、こんなにさわいでるのは！」

誰かの仲裁で終わる（その大半は千冬なのだが）。

「この年で喧嘩とは・・・・恥ずかしくないのか」

千冬の説教をうけている海斗と鈴は正座で聞かされている・・・・・・そんな光景を見て喧嘩だけはしないでおこうと心に決めた一夏だった。

「またこのようなことがある場合は反省文は覚悟しろよ」

千冬はそういうと職員室に帰って行った。

海斗たちはというと・・・・・・

「こんなことになったのも、全部、あんたのせいだからね」

「なんで俺のせいなんだよ」

という具合にまた喧嘩をはじめそうな勢いだ。

「また喧嘩したらまた、織斑先生に怒られるよ」

遥の一言に二人はピッタ！という効果音がついてもおかしくない速さで止まる。

「今日はこれぐらいにしておきましょうか」

「ああ、そうだな」

さっきまでの勢いはどこにやら・・・・・。

「さっきの続きなんだけど・・・・」

遥が言いにくそうに続ける。

「ああ、今度の週末買い物に行こうって話か」

ついさっきまでこの話をやってたのだが、

『買い物！行く。行くわよね一夏！』

『ああ、久振りに行ってもいいかな』

『鈴はどうせ一夏と一緒にいたいだ――――』

ドカッ！

『痛てぇ～。何すんだよ鈴』

『あんたが余計なことを言おうとしたからでしょうが』

『本当のことだろうが』

『あんたねぇ～」

とういう具合に喧嘩が始まったので話が中断していた。

「俺は、別にいいぜやることないしな」

「私もいいですわよ。日本で買い物をしたいと思っていましたので」

「私もいいぞ」

「じゃ、決定だね」

うれしそうに喜ぶ遥。

「紅葉は行くのか」

海斗はさっきから会話に参加していない紅葉に聞いてみる。

「行くに決まっているだろ」

「じゃ、決定だね」

こうして海斗たちは週末、それぞれの思惑を胸に買い物をすることになった。

「では、報告をはじめます」
黒いスーツをきた女はそういうと話をはじめた。
「今回は謎のアンノウンの存在や『例』のやつらの妨害により失敗いたしました」
「まぁ、今回は様子見だったし、収穫もあったからいいわ。」
話を言い終わると、女は踵を返していってしまう。
「また、失敗か・・・スコール」
スコールと呼ばれた女は背後にいる金髪の女性をみる
「あら、ごめんなさい。案外むずかしいみたいなの」
スコールはとぼけたように言う。
「まぁ、2年間も行方をくらませていたのをようやく見つけたんだ焦らずやれ。それで失敗してもらっても困る」
「でも、時間がないんでしょう?あなたちは9年間も追っているだもんね」
「まぁ、あなたたちが提示した条件がいいからいいけど」
女は部屋からでていこうとする直前、

「おまえらは『蒼い月』を甘く見ないほうがいい」

スコールにそう告げると、部屋をでていった。

「甘くは見てはいないけど、しょせんは子供、付け入る隙はいくらでもあるわ」

そういうと、夜の空に輝く月に不敵な笑みを浮かべた。

「調子はどうだ?」

まわりは機械とコンクリートに埋め尽くされた空間に立っている、それを見て女はいう。女は先ほどスコールと話をしていたときとは雰囲気がちがっている。

「はい、問題はありません。後は『例』のものがあれば起動できます」

それを聞いた女は安心したような表情になる。

女の目に映っていたのは、黒い装甲をしたＩＳがあった。

「これさえあれば世界が変わる・・・・・この『終焉（ディマイズ）』さえあればな」

第１４話　喧嘩はいけません（後書き）

日常ではないなこの喧嘩は・・・・・。

第１５話　やればできる・・・・たぶん！（前書き）

今回から新章スタートです。

最後までおねがいします。

第１５話　やればできる・・・・たぶん！

ここは、とある公園、そこに俺はいる。人一人いる気配はない。そこにいるのは俺と美しいオレンジ色の髪をした少女。少女は楽しそうに俺と喋っている、そして、俺も楽しそうにその子と喋っている。

「海斗といるのは楽しいな」

子供と思えない妖艶な笑みを浮かべて少女はそう俺に言ってくる。

「僕も《　》といると楽しいな」

その子は俺といると楽しいと言ってくる。

「私は海斗のこと好きだよ」

俺はそれになんかあたふたしている。さらに少女は、

「海斗のこと大好き」

少女はさらに追い打ちをかけくる。

「大好きだよ・・・・・・海斗！」

「夢か・・・・」

最近よく見るファンシーな夢、ここ最近この夢ばっかりみる。綺麗な少女が俺に「好きだよ」と言ってくる夢。あんまりに見るもんだから誰かに相談しようと思ったが、あまりにも恥ずかしいのでいまだ誰にも言えてない。

「もう、こんな時間か」

時計に目をやるともう8時をすぎていた。今日は日曜なので学校は休みだ。今日はみんなで買い物出かけるということなのだが、

「紅葉は・・・・・さすがに起きているか」

隣のベット・・・・つまり紅葉のベットはもぬけの殻だ。

「朝食を食べるか」

海斗は着替えると食堂に向った。

海斗は遅い朝食をとりながら今日の予定を確認する。１０時にゲートに集合でそのまま町にくりだすというのだが、

「大人数で行くのは久しぶりだな」

海斗はただでさえ買い物がすきではなかったため、あまりこういうことには慣れていない。

「海斗おはよう」

海斗に話しかけてきたのは、まだ眠たそうな一夏だった。

「どうした。やけに眠たそうだな」

「ああ、夜、寝れなかったんだ」

まだ、眠たいそうな目をこすりながら一夏は朝食を食べ始める。ちなみに一夏は焼き魚定食で俺は朝から丼をたべている。

「そういえば、なんで女性陣はあんなに張り切ってるんだ？」

「俺にもそればかりはわからん」

昨日の夜、紅葉が夜遅くまで一人でなにかやっていたのかは知らないが買い物ってそこまで張り切らなければいけないのか？
そんな疑問を頭のなかで浮かべながら朝食を食べ終わっている。

「集合時間にはまだ時間があるから何かやって暇でもつぶすか」

「じゃあ、俺も行くかな」
いつのまにか食べ終わっておる一夏と一緒に海斗は食堂を後にした。

「いや～。町に行くのは久振りだな」

今、海斗たちがいるのは町に行くための電車なかにいる。一夏の前に箒、横にセシリアと鈴、海斗の前に遥と紅葉といった席順である。

「そうだね、海斗ってあまり買い物とか好きじゃなかったもんね」

遥はなつかしそうな表情をしている。海斗が買い物を好きじゃない理由は、

『服とか何を買っていいのかわからない』

『待つのが面倒』

『お金がない・・・・・』

あきらかに一番最後のが一番の理由だろうが・・・・まぁ、そのことは気にすせず話を続ける遥や紅葉。さっきからなぜか紅葉と遥は海斗の話ばっかりしている。

「私は、小学生のときから一緒に買い物とか遊んでたりしてたよ」

「それなら、私は、一緒にお風呂入った」

紅葉の発言に遥だけじゃなく、一夏たちまでみている、

「馬鹿！あれはお前が勝手に入ってきただけだろうが」

「でも、そのあと一緒に入ったということには変わらないよね」
あのときは大変だった、俺が風呂に入っているといきなり風呂に入ってこようとするのだ。そのときは必死に止めたが、結局、そのまま一緒に入っていた・・・・・・・・思い出すだけで恥ずかしい。

ゾクッ！

（はっ！殺気）

きずいたときには、後ろに阿修羅を従えた遥がいた。

「カイト、ドウイウコトカナ？」

「いや、待て。誤解なんだ。誤解――――」

「あのときの海斗は・・・・ふふっ」

「紅葉！なんで話をややこしくしてるんだよ」
確実にやばい空気の遥を抑えつつ、紅葉にツッコミをいれる。

「どういうことか説明してね海斗」

「ま、待て、遥。話を聞けばわかるから、だから、待って――――――」

電車の中は海斗の悲鳴が響きわたった。

「ひどい目にあった・・・」

「まぁ・・・どんまい」

一夏の応援がまた海斗の心の傷をついてくる。海斗たちは町を歩きながらため息を漏らす。今、女子は女子で買い物をしてくるということなので今は別行動をしているのだが、さっきの電車はまさに地獄だった。

「遥は怒らせるし・・・今日、俺ついてないかも」

あまりの落ち込みようなので一夏はあることを提案してみる。

「遥にプレゼントをして機嫌直してもらったらどうだ」

「プレゼントね・・・」

海斗は昔からこういうものに疎い。実際プレゼントを買うときは、一夏や鈴、弾などと一緒に行った。

「そうだな。あいつには早く機嫌を直してもらいたからな」

「じゃあ、決まりだな」

そういって、一夏と海斗はプレゼントを買いにこうとしたとき、

「あれって・・・・そんなわけないよな」

一夏はいきなり立ち止まった、海斗の目線の先をみると、

「海斗？なにみてんだ」

「いや、何故か知ってる・・・人がいたから」

「一夏、ちょっと待ってくれないか」

海斗はそういうと一夏をおいてそのまま走り去っていく。

「あ、待て。海斗！」

一夏は走り去っていく海斗を見失わないように追いかけていく。

「どこだ?.たしかにさっきはここに・・・・・」

海斗は先ほど見た顔を知っている人が場所を見わたす、どこにもいない。いるのは普通に一般客だけだ。

「あと、探してないところと言えば・・・・・」

裏路地があるが、あそこにいるとは思えない。だが・・・・・

「探す価値はあるか・・・」

海斗は裏路地を見てみるが誰もいな――――

「もう逃げられないぞ」

声の方を見ると女の子が大きな黒ずくめの大人たちに詰め寄られている。

「おとなしく、観念し――――」

ドサッ！

黒ずくめの男はそのまま動かなかった。

「おい！こんな女の子を大の大人が大勢で・・・・恥ずかしくないのか？」

「貴様はだれだ？」

「おまえらに名乗るとでも？」

そういうと、海斗は女の子を自分の後ろに移動させると、いつでも戦闘ができるように構える。

相手はなんらかの武術でも取得しているのだろう、雰囲気から違う。

（くそっ！この状況どうするか。いきおいよく飛び出したけど・・・・どうする）

「こうなったら・・・」

海斗は女の子の手を取り、

「走るのみ」

海斗は思いっきって横道から飛び出していく。

「あ、待て！！」

黒ずくめの男たちは、意表を突かれたのか少し遅れて走り始める。

「はぁ、はぁ、やっと追いついた。お～い、海――――――――――――――あれ？」

海斗は一夏の声が聞こえていないようでそのまま走り去ってしまう。

「案外、速いんだな。あんたら」

公園まで追いつめられた海斗は、息を切らさず走ってくる黒ずくめの男に冗談交じりで話しかけている。

（さて・・・この状況はどうしたもんかね）

最悪の状況。自分より体の大きい大人が４人。まず、勝てない。だからといってここで諦めるわけもない。

黒ずくめの男たちは、すでに戦闘態勢に入っている。

「仕方がないか！」

海斗が言い終わるのと同時に、男が攻撃を仕掛けてきた。１人目は攻撃を躱して、顔面にパンチをおみまいする。だが、続けざまの２人目を躱すことができずにふっとばされてしまう。

（やべぇな）

海斗が心の中でそうつぶやくと、同時に男のパンチが――――――

ドガッ！

男はそのまま地面に倒れてしまい動かない。

「まったく。せっかくの休みが台無しじゃないのよ」

そこにいたのは、鈴とセシリア、遥と紅葉だった。

「いやぁ～。助かった。俺一人じゃどうしようにもなくて」

海斗たちは鈴たちが呼んだ警察に男たちを引き渡したあと公園にとどまっていた。

死ぬかと思った。たぶん、あそこで鈴たちが来なかったら今頃・・・・・・

いや・・・・・・考えるのはよそう。

「あ、大丈夫だった？」

海斗はおもいだしたように女の子に話しかける。女の子今にも泣きだしそうである。女の子はよく見たら海斗たちとさほど年齢は変わらないように見えた。

「あの・・・・名前なんて言うの？」

「俺は結城海――――――」

あれ？この子、さっきの見かけた・・・・・・・

ズキッ！

突然頭が痛くなる・・・・

（なんだ、突然、頭が・・・・・）

「――――――――海斗」

名前を言われた瞬間、頭の痛みがなくなる。

（なんだろう?この感じ・・・）

なつかしいようなこの感じ・・・・

「――――海斗。やっと・・・会えた・・・・」

意識を戻すと女のこは突然泣き出してしまっている。

ギュッ！

突然女の子が海斗に抱きついてきた。

「え！?」

「愛してるよ、海斗」

突然の告白に世界が止まった気がした。

第１５話　やればできる・・・・たぶん！（後書き）

今回は長かった・・・・。

第１６話　少女と海斗（前書き）

やっと、新章！今回もオリジナルです。

最後までよろしくお願いします。

第１６話　少女と海斗

時刻は昼、黒ずくめの男たちとの一件を終えた海斗たちはＩＳ学園に報告しにに戻ったところである。

「で・・・お前らが遭遇した男たちの事はわかったが・・・・・・なぜ、ここにこいつがいる？」

千冬は頭は頭を抱えて大きなため息をもらす、千冬の目線の先には・・・・

「ここが、海斗の通っている学校？」

「ああ、そうだよ」

「そうなんだ・・・・・やっぱり海斗がいるところはいいところだね」

「はは、そうだね」

さっきからこんな会話ばっかりなのだ。少女は海斗にずっと抱き着いている。抱きつかれている本人は困ったような顔でおどおどしている。

「結城、一つ聞くが、こいつの名前は？」

「それが・・・わからないんですよ」

「わからないとはどういうことだ？」

「俺に聞かれても・・・・・」

本当に知らないような顔だったのでそれ以上に追及はしないが、その後の少女驚いたような顔をする、

「え・・・・・そっか、海斗は私といたときの記憶がないんだったね・・・・・・」

驚いた顔から一変、とてつもなくさびしそうな顔になる。いまにも泣き出しそうな顔をしている少女をみて千冬と海斗は一旦は焦るが、逸れた話を元に戻す。

「なぜ・・・なぜ、お前が海斗の記憶のことを知っている?」

「それは・・・・・・」

少女は言葉に詰まる。千冬は少女の気持ちを察したのか、それ以上話を続けなかった。

「それはそうと、結城。こいつをここに連れてきたのはいいが・・・・・この後は、どうするつもりだ?」

「あ・・・・・・・」

海斗のことだからそんなことは気にせず連れてきたのだろう、すごい慌てている。

「そうだった・・・これからどうしよう・・・」

「はぁ～、そいつのことはこちらでなんとかするからお前はもうかえっていいぞ」

「あ、はい」

海斗は出て行こうとするが、すぐさま問題にぶちあったた。海斗から少女が離れないのだ、海斗がいくら離そうとしても少しも離れてくれない。

「ちょ・・・織斑先生手伝って！」

千冬が一緒になって離そうとするのでさすがに少女はちょっと名残惜いように離れる。し

「そういうえば・・・君の名前ってまだ聞いてなかったね」

「え～、また自己紹介から～？」

「またって・・・・・」

海斗にはまったく記憶がないことだが・・・・

ズキッ！

（くそっ、また、頭が・・・）

さっきこの子に会った時に感じた頭の痛みがまた、海斗を襲う。し

かも、今回はさっきよりも痛みが強い。

そんなことは知らずに少女はやれやれといった感じに自己紹介をはじめる。

「私の名前は、ケイ――――」

ドサッ！

「え・・・・？」

「おい！大丈夫か？・・・・・意識がない・・・」

千冬はすぐさま海斗を抱きかかえると、保健室に向かう・・・・。

「まだ、目が覚めないのか・・・・」

青空が広がっていた空は漆黒の闇に染まっていた。海斗が倒れてからもう3日が経過していた。今だ目を覚ます気配さえ感じさせない海斗。なぜ倒れたのか、なぜ意識が戻らないのかどの医者に見せてもわからなかった。ただ一つわかるのはあの日から千冬が面倒をみている、この少女。限られた人しか知らない海斗が自分に拾われる以前の記憶がない事を知っており、なおかつそれ以前の海斗に会っているという。海斗が倒れた日から千冬と少女は海斗のところに毎日のように通っている。千冬はこの少女が海斗の記憶がなくなった理由をしっていると思って訊いてみたがそのたび、どこか暗い表情をするのだ。

「こんな時にだが・・・おまえは海斗にどこであった?」

「・・・・・」

少女は答えない。千冬はさらに強く質問する。

「早く答えろ!お前は海斗とどういう関係だった?」

千冬に圧倒されて、少女は、

「わかった・・・・」

素直に話す。海斗との思い出を・・・・

「海斗と会ったのは、今から9年前、小さな公園だった。私はある理由から大きな組織に追われていた。私は、組織の目を逃れるため小さな町に潜伏していた。そこで、海斗に出会った。最初のうちは無視していたけど、何度も会っている内ににちょっとずつ海斗のことが気になっていった。そして、気がついたときには海斗のことが好きになっていた。でも。あるとき組織にそこがばれて海斗がさらわれてしまったの、たぶんそのとき記憶を消されたと思う。これが海斗と私の関係・・・」

少女はそこまでいうと再び黙ってしまう。この話を聞いた千冬はある疑問が浮かぶ、

（本当に、それだけの関係か?こいつはまだなにか隠しているのか?）

たったそれだけであそこまでなるのか?だが、当の本人が黙っているのでそれすらわからない。

千冬は窓に目を向ける。そこには漆黒の世界が広がっている。

「嫌な空だな・・・」

千冬は感じていた、これからくる波乱の予感を・・・・・。

第１６話　少女と海斗（後書き）

主人公いきなり倒れちゃった・・・・

感想などがありましたらコメントよろしくお願いします。

第１７話　出会い／白銀再び（前書き）

今回は過去の話です。戦闘もちょっと・・・・・

第17話　出会い／白銀再び

俺は、とある小さな町に住んでいる。なにも変哲のない町、住宅が並んでいるそこはいつもは人はちらほらいるだけで普段はあまり人を見かけない。夕方、俺はいつものように家を出て公園にくる。この時間は人が少ない、いつも俺はその時間にその公園に行く。誰一人いないそこは俺にとって秘密基地みたいな感覚だった。俺のまわりには友達は少なく、つい最近みんな引っ越してしまった。だが、その日は違った。いつも俺しかいないその公園に一人の少女がいる、その少女は美しく、そのまわりだけ違う世界のような気がした。

「ねぇ、なにやってるの？」

俺は少女尋ねる。だが、少女は答えない。

「一人なの？」

俺なんか見向きもしない少女。でも、俺はさらに質問を重ねる。

「ねぇ、友達になってよ」

初めて少女はこちらの問いかけに答える。少女は驚いたような顔をしている。

「友達・・・・・？」

「うん！友達。僕さ友達みんな引っ越して誰もいないんだ。君一人でしょ」

「そうだけど・・・」

少女はどこか暗い表情で答える。

「なら僕と友達になってよ」

俺の言葉に一瞬、驚いたような顔になるがまた、暗い表情に戻る。

「なんで、あなたの友達にならなければいけないの？」

「だって、寂しそうだったから」

「！？・・・私がいつ、寂しそうに・・・」

「さっき」

少女は何も言えない。この子供はなにを言っているのかわらない。寂しいということとはどういうことか、いつも一人だから寂しいなど感じたことがなかった・・・はずだ。

「だから、僕と友達になってよ」

「なんで、私なんかと・・・」

何か引っかかる、この子の言葉になにか惹かれるものがある。なんだろう？こんな感覚は初めてだ。

「なんでって、だって、僕が友達になりたいからかな」

とても簡単な理由。友達になりたい、ただそれだけのことなのだ。

でも、その言葉に少女は強いなにかを感じていた。生まれてきてからずっと友達がいない自分を友達にしてくれるという彼の言葉はどんな言葉より嬉しかった。

「わかった・・・友達になってもいいよ」

「ホント!?やった～」

彼は無邪気な笑顔を見せている、その姿にちょっとだけ少女はドキッとしてしまう。

「そういえば、名前言ってなかったね・・・・僕は結城海っていうんだ」

「君の名前は?」

「私の名前は・・・・・・ケイト・マリア」

少女はそういうと、満面の笑みで海斗を見つめる。

「これからよろしくね、海斗」

「こちらこそよろしくマリア」

これが、海斗とマリアの最初の出会いである。

「くっ・・・ここまでとは・・」

セシリアはＢＴ兵器のブルー・ティアーズを駆使しながら、先ほど学園に侵入してきたＩＳと交戦中である。

『セシリア、上！』

遥がオープンチャンネルで声を張り上げている。

「くっ・・」

完全には避けきれずに、右肩にビームライフルの銃弾が当たる。

「この前といい、なんなんですのこいつ？」

セシリアの目線の先には、先日クラス代表戦の時、襲撃してきた白銀のＩＳがいた。

「もらった！」

遥は『春風』を展開させ、瞬間加速（イグニッション・ブースト）で一気に白銀のＩＳとの距離を縮めるが、

「なっ！！」

白銀のＩＳの後ろの装甲から弾丸が発射される。遥はいきなりのことでよけれず、くらってしまう。

「あのＩＳ、どこからでも弾丸を発射できるんですの？」

代表候補生２人相手でも全く歯がたたない。シールドエネルギーは残りわずかである。

授業中いきなり乱入してきたそいつは、圧倒的な強さで２人を圧倒している。

「うおおおおおお」

一夏の雪片と相手のビームサーベルが激しくぶつかる。白銀のＩＳは一夏の雪片を躱しながら、徐々に一夏のシールドエネルギーを減らしていく。全身に装備している砲身で死角がないこのＩＳは攻撃を当てることさえ難しい。

さらに、一夏にダメ出しの広範囲攻撃を行う。一夏だけではなくセシリア、遥も攻撃をくらってしまう。

白銀のＩＳはさらに一夏たちに追撃を――――――

『は～い。そこまで！Ｓ、今すぐ戻ってきて頂戴』

オープンチャンネルからいきなり知らない声が聞こえてくる。

『了解』

Ｓと呼ばれた少女は、一夏たちに背を向け、飛び去って行く。

一夏達は何がおっこったのかわからなかったが、とにかく助かったことだけはわかる。

「なんだったんだ、あいつ？」

そんな、一夏の問いかけに誰も答えが浮かばなかった。

「また、こいつか・・・・」

千冬はモニタールームで今日襲ってきたＩＳも映像をみている。ついこの前に、襲ってきたばかりなのにまた、ここを襲うということは

――――

「ここに、やつらの目的のものがあるのか？」

千冬の頭に浮かぶ一人の少女。ケイト・マリアという名の少女。彼女が来てからというもの、海斗は倒れたり、謎のＩＳの襲撃など・・・あらゆる事件がおっこている。

（マリアはこの件に必ず絡んでいる）

なぜか、そう確信している。理由はないのだが・・・・

「まったく、やっかいなことを持ち込んでくれたな・・・・」

千冬のため息が部屋中にこだましした。

第17話　出会い／白銀再び（後書き）

唐突に戦闘が始まるって・・・・・

感想がありましたらどんどんコメントよろしくお願いします。

第１８話　寝坊助の起床（前書き）

この辺のネタが切れかかってる・・・・

第１８話　寝坊助の起床

「うおおおおお」

一夏は雪片弐型のバリア無効化攻撃で攻撃するが、遥にあっさり躱され、スナイパーライフルの一撃をくらう。遥は瞬間加速（イグニッション・ブースト）で距離を縮めて、

「これで、終わり」

近接武器の『春風』でとどめの一撃でシールドエネルギーがなくなった。

「やっぱ、遥は強いな。さすが代表候補生！」

白式を待機形態にした一夏は、模擬戦を観戦していた箒たちのところに向かいながらそんなことを呟く。

「でも、相変わらず、勝てないわねぇ・・・あんた」

「うっ・・・・」

鈴の心無い一言にちょっと落ち込む一夏。あの、ＩＳの襲撃事件ことがあった後、千冬やほかの先生たちはなにかと忙しい。専用機もちである一夏たちはいつでもあんな事態に対応できるように、一夏の特訓も兼ねて模擬戦をやっていたのだ。

「さて・・・そろそろ時間じゃない？」

「ああ、たしか海斗のお見舞いに行くんだったな」

海斗が倒れてから5日がたっていた。海斗は未だ目を覚まさず、今はＩＳ学園の病院に入院中である。ＩＳ学園の病院といってもＩＳ学園の中にあるのではなく、町の中にあるため、行くときはＩＳ学園を一度でなければいけない。今回は、千冬からＯＫはもらっている。

「そろそろ、行きますか・・・」

一夏は先に更衣室に行ってしまう。続いて鈴、セシリア、箒、遥と更衣室し向う。紅葉はこの頃、授業が終わるとさっさと帰ってしまう。誰とも話さず自分の部屋に閉じこもってしまうのだ。海斗が倒れたということが相当ショックだったのだろう。そんな紅葉をすこしでも元気を取り戻してもらうため、千冬から海斗のお見舞いにいけと言われたのだ。もちろん、一夏はもちろん、鈴や箒、セシリア、遥も心配している。誰もが海斗のことを心配している。海斗が倒れて以来、クラスの雰囲気まで重たくなってしまった。

一夏たちは電車に乗り込むと、重い空気を放つ紅葉の影響で、一夏たちまで重くなってしまう。

（おい、誰かどうにかしてくれ、この空気）

一夏のアイコンタクトもむなしく誰もこの空気を変えれない。そん

な空気のまま、病院まで来てしまう。

「え～と、海斗の部屋は・・・・・ここね」

鈴が海斗の病室に先に入り、一夏たちも続いて入るが、病室に入るなりその光景にみんなが驚いてしまう。

そこには、先日一夏たちの目の前で海斗に大好きといって告白したあの少女がいたからだ。

「・・・・なんで、おまえがいんの？」

思わず一夏が質問すると、

「そんなの・・・海斗の看病に決まってるじゃない」

あまりにも堂々という少女・・・・なんていうか、ここまで堂々だと逆に清々しい気分である。

「ところで・・・海斗は？」

話が逸れかけていたのを遥がギリギリで元に戻す。

「ああ、それなら――――」

「あ、なんだ、みんな来てたのか」

いきなり後ろから話しかけられて一夏たちはびっくりする。その声の主の方を向くとそこには・・・・・

「海斗！！」
そこには、意識がなく眠ったままのはずの海斗がいた。

あの、ＩＳの襲撃事件の後、千冬は政府への対応などで疲れきっていた。海斗の意識も戻らない、２度のＩＳ襲撃事件などいろいろと悩みを抱えている千冬にとってこれ以上の厄介ごとを増やしたくないのだが仕事という名の厄介ごとは時間がたつにつれて増えていく。心から疲れている千冬は職員室の椅子に座る。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・織斑先生大変です。というかいい知らせです」

息をぜぇぜぇ言わせながら山田先生が走ってきた。

「なにか、あったのか？」

千冬は、顔をしかめながらしぶしぶ聞くことにする。これ以上厄介事は増やさないでくれと祈りながら。

「結城君が・・・・・結城君が目を覚ましたそうです」

「な・・・・それは本当か!?」

「さっき、病院のほうから連絡が・・・・」

千冬はホッすると、ある考えが浮かんでくる・・・・

(明日、あいつらに話てやるか、相当落ち込んでいたからな)

次の日、海斗が目を覚ましたとは言わず、お見舞いに行けとだけと告げる千冬だった。

「何故、あそこで退却させた?」

「だって、あそこには私たちの目当てのものが無かったでしょう？」

今は深夜、外の景色は電球さえついていない闇が広がっていた。

「だが、時間がない。やつはもうすでに『蒼き月』に接触している。こうしてる間にも事態は着々と進行中なのだ。そのことはわかってもらいたい」

「なんで、あなたたちが『蒼き月』をそこまで敵視しているのかはわからないけど、まぁ、いいわ。あそこでSに退かせたのは、これからのことを考慮してよ。ふふっ、心配しなくても『蒼き月』のことと『例』のことは確実に成功させてみせるわ」

そう言い終わると、スコールは作り笑いして、

「じゃあね、アルフレッド」

そういうと、スコールは部屋を出ていく。アルフレッドと呼ばれた女は夜空に浮かぶ月を見上げて笑みを浮かべる。そこで、電話のアラームが鳴り響く。

「私だ、そうか・・・『蒼き月』がついに・・・・わかった引き続き潜入してくれ。頼んだぞ『H』」

そういうと、電話を切り、そのまま部屋を出ていく。

「Sの調子はどう？」

まわりを機械だらけの部屋でスコールはちょっと不安げに尋ねる、

「前回の時は、不安定な状態でしたが今回は問題ありません」

「そう・・・」

スコールは自分の目の前にあるコンピューターに目を向ける。そこにはＳと呼ばれる少女と白銀のＩＳ『銀の艦隊（シルバーフリート）』が映し出されていた。

第１８話　寝坊助の起床（後書き）

やっと、主人公が・・・・

感想・アドバイスがありましたら、コメントよろしくお願いします。

第１９話　仲がいいことは良いことである（前書き）

今回も頑張ろう。

タイトルが適当すぎる・・・・

第19話　仲がいいことは良いことである

海斗が倒れた日から、6日が経過していた。海斗は意識を取り戻し、順調に回復に向かっていた。

「ふぁ～、暇だな」

海斗は意識が戻ってからも、ちょっとの間入院しているのだ。普通の日は、皆は学校があるから海斗本人はかなり暇なのである。

「結城さん。調子はどうですか？」

「あ、佐水奈さん。もう、すっかり元気です」

この人は佐水奈波留（さみなはる）、俺の担当の看護師だ。金髪の髪の綺麗な女の人だ。前に一度、ハーフなのか聞いてみたら本人曰く、父も母も根っからの日本人だと言っていた。あきらかに髪の色が日本人じゃないんだが・・・・まぁ、そのことは別に俺は毎日のように検査ばかっりである意味疲れ切っている。

（疲れている原因は他にもあるのだが・・・・たとえば）

「海斗～。おはよう」

こいつが主な原因だ・・・・。

ケイト・マリア。突然俺の前に現れて、好きだよ、愛しているとか言ってきて、実は俺の昔のことを知っているという謎の人物だ。俺は意識が戻ったときこのマリアの記憶だけ思い出した。なぜ俺は記憶がなかったのかは今だ不明である。

先日、一夏たちが来たとき、紅葉や遥と色々もめたりして大変だった。

「いつもありがとうな」

「私は、海斗といれるだけで、幸せだから・・・」

毎回こんな感じである。今も佐水奈さんがいるのに・・・・こっちが恥ずかしい。その佐水奈さんも笑みを浮かべて出て行ってしまった。・・・・・・ちくしょう・・。

「・・・・うん？どうしたマリア」

ふとっマリアの方を振り返ると、ほっぺをブスッと膨らましていた。

「海斗、私がいるのに看護師の方をずっと・・・・・」

「う・・・」

正直、リアクションに困る。そんな顔されたら俺何もできないじゃないか。

「い・・いや、違う。これは・・・その・・・」

「ふふふっ」

「な・・・なんで笑んだよ」

「だって、あまりにも可愛かったから・・・・ふふふっ」

「かわ・・かわいい・・・へ！？」

驚きのあまり、声が裏返ってしまった。無邪気に笑うマリアに俺はちょっとドキッとなる。見た目はとてつもなく美人のマリアがこちらに向かって満面の笑みをしっているのをみているとなんだか落ち着くというか、懐かしい気分がしてくる。はきっりとした記憶ではないが、俺は昔マリアでどこかの公園で会っている、だから懐かし

い気分になるのかな・・・・。

「マリア」「海斗」

うわぁぁぁ、やっちまった。これってあれじゃん、テレビでみるお見合いとかいうやつじゃないのか。ますます雰囲気が・・・マリアもマリアですごい顔が赤い、普段あんなに言ってるのに・・・・。病室中に恥ずかしすぎる雰囲気が流れている。

（やばい、なんとかしないとあいつらが――――）

ガラッ！

「海斗。お見舞いにきた・・・よ？」

そこにいたのは、遥と紅葉だった。

「なに・・・やってるの？・・・海斗？」

なんでこんな場面で来るのこの人たち・・・・。

「久しぶりに、あったと思ったら女の子といちゃいちゃと・・・・・」

「あの・・・紅葉さん？なにをしってらしゃるんですか？」

紅葉は海斗の質問に答える前に、ポケットから何故かハンドガンを

取り出す、

「死ね」

紅葉が引き――――――――――

バカァァァン!!

「なんだ!?」

「これは・・・・・」

――――――――緊急放送、今、建物火災が発生してます。建物の中にいる人はすぐに避難してください。

「火事だと!?・・・・・でもさっきの音って・・・」

海斗はすぐ病室を出ようとするが紅葉と遥に止められてしまう。

「海斗、どこに行く気なの?」

「なに言ってんだ。これはただの火事じゃねえだろ」

「でも、それは海斗が突っ込むべきとこではじゃない」

「だが・・・」

「ここは、私が見てくるから、わかった?海斗」

「くっ・・・・」

遥や紅葉の言い分もわかる。先日まで、４日も目を覚まさなかったやつがこんなことに首をつっこむべきではない。

「わかった・・・」

海斗は素直に遥の言うことに従う。遥は病室を飛び出して、爆発音がした方向に走り出す。

『第１中央病院にて、火災発生。ＩＳ学園の出動要請』

千冬がその報をきいたのは、書類を終えた時だった、

「今すぐ、打鉄・ラファールの出動許可をとれ、政府には緊急事態

だと伝えておけ」
千冬は出動要請の対応でいそがしい、せっかく書類が終わったというのに・・・・

（それにしても、第１中央病院というと、海斗たちがいるところか・・・）

外には出さないが内心ものすごい不安がこみあげてくる。
「山田先生、打鉄やラファールはまだ時間がかかるか？」
「はい。あと３０分はかかるかと」
「専用機持ちは今どこにいる」
「織斑君、オルコットさん、凰さんは今町にいるみたいです。桜野さんは第１中央病院の中です」
「では、そのメンバーに先に向かってもらう」
山田先生はすぐに１年の専用機持ちに連絡する。生憎、２，３年の専用機持ちは出払っている。

「織斑先生！これ！」

山田先生はそういうとディスプレイに映し出す。

「また、こいつか・・・・」

先日、事件を起こしたばかりの白銀のＩＳ『銀の艦隊（シルバーフリート）』がそこにいた。

第１９話　仲がいいことは良いことである（後書き）

何回襲うんだよ白銀のＩＳ！

自分でも驚くほど登場してますよねシルバーフリート

オリジナルキャラ設定　その2（前書き）

キャラ設定2回目です。

オリジナルキャラ設定　その2

名前　桜野　遥

身長　１６９ｃｍ

好きな食べ物　イチゴ、桜餅

嫌いな食べ物　辛い物

趣味　お菓子作り、

髪は桜色で、長さは短い。海斗と一夏とは小学生のときからの幼馴染。今は日本の代表候補生。

海斗の記憶がないことを知る数少ない人物。小学生のときクラスメイトにいじめられていたがそのとき海斗にたすけてもらったときから海斗に好意を抱いている。

海斗が織斑家を出ていく原因を引き起こしたのは自分だと思っており、中学2年のとき海斗を守れるぐらい強くなりたいという思いから日本の代表候補生になった。突然現れたマリアや紅葉にライバル心を燃やしているが、本人曰く、2人に比べまだ海斗と接する時間が短いため出遅れているらしい。

趣味がお菓子作りなだけあって料理や家事は得意だが、裁縫が苦手。

鈴と海斗の喧嘩を楽しんだり、海斗のためならお金を惜しまず使おうとするなど普通の人とはまた違った感覚の持ち主である。

専用ＩＳ　ローザスパイラル

待機状態　桜の花びらを模したアームレット（腕の部分につける腕輪）

世代　第３世代

外見は桜色の装甲で、スナイパーライフルによる遠距離攻撃や春風での近接攻撃など様々な状況で対応できる。機動力、防御力ともに優れており、さらに燃費がいい。下の武装以外に、エネルギーシールドなどがある。

武装

・スナイパーライフル『デュアルブラスト』
ローザスパイラルの遠距離武器で遠距離でも高い威力をほこる。

・近接武器『春風』
ローザスパイラルの近接武器。小さな刀みたいな形状をしており、２つ装備されている。

・フューゼレイド
ローザスパイラルの要の可変型独立兵器であり。背中部分２つと腰の部分４つに装備されており、攻撃、機動に切り替えが可能。腰の部分はミサイル、レーザー兵器として使用でき、背中部分はエネルギーソードへ切り替えができ、ビットとして使用できる。
６つ全部を機動の方にまわすと『瞬間加速（イグニッションブースト）』に匹敵するほどのスピードがだせる。

オリジナルキャラ設定　その２（後書き）

紅葉の設定を書かなきゃな・・・・・

感想などがあったら、コメントお願いします。

第２０話　ＶＳシルバーフリート（前書き）

今回は長めです。

近頃、この辺のネタが切れてきている

第２０話　ＶＳシルバーフリート

「重い・・・誰か手伝わない？」

「男ならその程度、なんともないだろ」

「一夏は男なんだからあんたが持つべき」

「一夏さん、女にそのような重たいものを持てというのですか？」

一夏たちは学校が休みということを利用して、町に買い物にきていた。買い物と言っても海斗へのお見舞いの品を買いにきたのだが・・・

「これって、お見舞いの品なんだよな・・・」

高級フルーツセットに小龍包、饅頭って・・・とてもじゃないけどお見舞いの品ではない。

「とにかく、さっさと紅葉たちと合流するわよ！」

ここに来る前、遥と紅葉は先に海斗の病院に行っている。先日、行ったときは紅葉、遥の暴走でとんでもないことになった。

「とにかく、急ごう。また変なことになる前に・・・・」

「そうね」

あの時の、紅葉の顔を思い出して一瞬、背筋凍った。もうあんなものはこりごりだ。

一夏が急ごうと走りだそうとし――――――――

ドカァァァァン！！！

ものすごい轟音が町全体に響き渡る。

「な、なにが起こって！？」

代表候補生である、鈴とセシリアは爆発の原因を探すしているが、一夏と箒はポカンとしている。

『織斑君、オルッコトさん、凰さん。今、ＩＳ学園に緊急出動要請がありました。いますぐ第１中央病院に向かってください。緊急事態ですのでＩＳの使用を許可します」

いきなりの山田先生の通信に一夏たちは驚くが、緊迫した声で告げている山田先生はいつものちょっとドジな山田先生ではなく、一夏は緊張を隠せない。なによりＩＳの使用許可が下りるといことは相当なことなのだ。

「先生、それで私たちは何をすればよろしいのですか？」

『オルコットさんたちは患者の救出です』

「わかしました」

そういうと、セシリアは通信を切る。

「何があったのだ？」

一人だけ状況を理解できない箒。
「今、緊急でＩＳ学園に出動命令がでた」
「やっぱりさっきのか？」
「ええ、そうでしょうね。少なからずただの火災ではないわね。なんせ、私たちに応援を頼むぐらいだもの」
たしかにＩＳを使用するほどの火事・・・そして、さっきの音、確実にただ事ではない。
一夏はＩＳを展開すると、箒にこの場を任せ飛び立った。

山田先生の連絡を受けた遥は病院の屋上に向かう。さっきの揺れからして何かしら起こっている。

「あのＩＳは！」

屋上に上がると、そこにいたのは・・・・

「また・・・・あったね・・・・」

すぐさまＩＳを展開させ、白銀のＩＳと対峙する。

「あなたは何者なの？目的はなに？なぜ、こんなことをするの？」

「・・・・・・・・」

応えない、遥の問いに一切答えない。顔は相変わらずハイパーセンサーで隠れて見えない。

「まぁ、答えないなら・・・・落とすだけだけどね」

遥はスナイパーライフル『デュアルブラスト』を白銀のＩＳめがけて放つ。白銀のＩＳは横に移動し、それを躱すが・・・・

「もらった！」

遥は腰の部分に装備されている、可変型独立兵器『フューゼレイド』のレーザー兵器で攻撃するが、すぐにエネルギーシールドで防がれてしまう。白銀のＩＳは『瞬次加速（イグニッションブースト）』で接近する、

「くっ・・」

遥はそのままエネルギーシールドで相手のビームサーベルを受け止めるが、相手の方がパワーが上のようで、じりじりと押され始める。そして、白銀のＩＳの装甲から弾丸が発射され、白い光が遥を包む、ボロボロになったローザスパイラルが落ちていくそれを白銀のＩＳはさらにライフルで追撃をかける。

（や、やばい。あれをくらったら間違いなくだめ・・・）

バァァァン！

白銀のＩＳはレール砲の攻撃を受けて、吹き飛ばされる。
そこには、ＩＳ蒼月を展開させた海斗がいる。海斗は遥を受け止め、遥を安全なところに降ろす。

「てめぇ・・何度も何度も・・・いったい何が目的だ」

「・・・・・・・・」

「お前は、何者なんだ？」

「・・・・・Ｓ」

「Ｓ？」

Ｓと名乗った少女は淡々とした口調で続ける。

「私の任務は『蒼い月』の破壊・・・」

「『蒼い月』の破壊だと・・・」

Ｓが言った『蒼い月』とは蒼月だろう。でも、なぜあいつは蒼月を狙うのかはわからない。

「あなたとは戦いたくはないの、だから今すぐ、『蒼い月』を渡し

て・・・・」
Sは条件を提示してきたが海斗はそんな要求を聞きはしなかった。
（こいつ・・どこかで・・・）
何か引っかかる、どこか懐かしい。マリアの時とはまた違う懐かしさ。
「お前、俺に会ったことがあるのか？」
「それは、言えないんだ・・・・・・・・・・・『くう』」
「なんで・・・その名前を？・・・・・まさか！？」
Sはバイザー型ハイパーセンサーの前を開けると、そこには
「久しぶり、くう・・」
「なんで、お前が・・・・なんでなんだよ、アキ・・・」
そこにいたのは――――――――
『お話はそこまでだ』
話を遮るように女の声がオープンチャンネルから聞こえる。海斗のハイパーセンサーが灰色の装甲のＩＳを捉えていた。
「誰だ、お前」
海斗は女を睨みつけながら言う。

「アルフレッド・バージュだ『蒼い月』」

アルフレッドと名乗った女は、次に悪魔のような笑みを浮かべ、

「あなたのお友達は面白いわね。勝てないのに突っ込んでくるなんて・・・・」

「お前・・・・、みんなに何をした！」

「ただ、死なない程度にたたきのめしただけよ・・・・あ、でも早くしないとやばいかもね」

「てめぇ！！」

海斗は怒りをあらわにしている、下からその様子を伺っていた遥でさえそんな海斗に恐怖を覚える。

海斗のあんな顔はじめてみるからだ。

「てめぇだけは絶対、殺す！」

怒りがこもった声にアルフレッドは、

「あなたでは友達の仇は討てないわよ」

海斗はそんな話を無視して、ただ、突っ込み、蒼鬼で斬りかかるが、

「ふん・・・まだ、甘いな」

その攻撃をすぐに躱し、荷電粒子砲を放つ、海斗はその勢いで道路にたたきつけられる。

「ぐはぁ！」

ものすごい衝撃で肺の空気が吐き出され、頭が真っ白なりかけるがすぐ意識をはっきりさせる。

「終わりだ『蒼い月』」

アルフレッドは海斗に体勢さえ変える暇さえ与えず荷電粒子砲を放つ、

「やばっ・・・」

ドカァァァン！！

だが、海斗は無事だった。理由がわからない何故無事なのか、あの距離で荷電粒子砲をくらって無事なわけがない。海斗は困惑しながらも、前を見ると、そこには、

「やっぱり、裏切ったか・・・・S。いや・・・藍染時雨（あいぞめしぐれ）」

「アキ・・・なんで・・・」

アキは弱弱しい声で、

「やっぱり、くうと戦えないよ」

荷電粒子砲の直撃で背中の装甲は破損しており、そこからは真紅の血が流れている。

「ははははは。笑えるな、これはいい」

アルフレッドの笑い声が響く、

「お前だけは、絶対殺す」

その瞬間、蒼月が蒼い光に包まれる。。、

――――――――単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）『蒼天月華』発動。

第２０話　ＶＳシルバーフリート（後書き）

急展開だねこれ・・・・・・バトルは難しいな、やっぱり。

第２１話　蒼の覚醒（前書き）

海斗が久振りのバトルです～～。

第２１話　蒼の覚醒

「なんなのあれ・・・」

マリアと一緒に病院の外に避難していた紅葉が空中で蒼く輝いていそれを見て言う。蒼月はその装甲と高出力推進翼から蒼い粒子が漏れ出していた。

「綺麗・・・・」

マリアの一言がよくわかる。蒼い光に包まれている蒼月はどこか神秘的で、まるで、、

「蒼い月・・・」

「それが、『蒼い月』の単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）・・・・」

アルフレッドの前には神秘的な輝きを放つ蒼月がいた。

「・・・・・・」

海斗は無言のまま、アルフレッドに瞬次加速（イグニションブースト）で一気に近づき、蒼鬼を横一閃に振る。アルフレッドは蒼月の速さに反応が遅れ防御さえ出来ずに吹っ飛ばされる。海斗は追い打ちをかけるようにアルフレッドを掴み、零距離で雷電と雷砲を同時に放つ、

「な・・・・」

黒煙でアルフレッドを見失うが、ハイパーセンサーで発見すると、海斗は蒼月のスラスターに蒼い粒子を集約させそのままアルフレッドに蒼鬼を前に出しながら加速する。アルフレッドは横に瞬次加速（イグニッションブースト）しながら、荷電粒子砲を海斗めがけ放つが、海斗はそれを後ろに瞬次加速（イグニッションブースト）して躱す。

「急に動きがよくなった・・・・」

さっきとは全く別人の動きをしている海斗にアルフレッドは驚きの色を隠せない。
無言のままアルフレッドをみる海斗の目は冷たく、そこにはアルフレッドしか映っていない。
大切な物を傷つけられた怒りのなのか、それとも、大切な物を奪われる恐怖なのかはわからない。ただ、さっきまでの海斗の目とは違い、ただひたすら真っ直ぐアルフレッドを睨みつけている。

「『蒼い月』はやはりすごいな・・・・やっぱり、ここで落とすべきか・・・」

アルフレッドはそういうと瞬次加速（イグニッションブースト）で海斗に一気に近づき、腕の部分に装備されている多兵装兵器のビームサーベルで海斗を地面に叩きつけ、荷電粒子砲を続けざまに放つ。

「ぐっ！」

ものすごい衝撃と激痛が海斗の腹の部分に伝わり、意識が飛びそうになるが自分で顔を殴り意識をはっきり保つ。赤い血が海斗の腹部から流れているが、海斗はそんなことを気にせず瞬次加速（イグニッションブースト）で接近戦に持ちこもうとするが、荷電粒子砲の連射で近づくことさえできず、海斗は雷砲で対抗する。

「おい『蒼い月』！その程度か、所詮は子供だな。なにも考えずに行動して自滅する・・・まさに、君にピッタリじゃないか」

アルフレッドの笑い声がオープンチャンネルで響いてくる。そんな笑い声を聞いた海斗は無視する。わざと挑発しているだけだ、わざわざ安い挑発にのる必要性はない。

「そろそろ・・・・」

アルフレッドは左手の荷電粒子砲を構え、

「落ちろ！！」

瞬次加速（イグニッションブースト）で近づきながら砲撃する。なんとか躱すも、ビームサーベルの一撃をくらい、

「これで・・・・終わりだ」

荷電粒子砲が海斗に直撃する直前、何者かが荷電粒子砲を防いでいた。

「ふん・・・まだ動けたのか・・・」

「あなたたちに、くうはやらせない！」

アキはそういうと、ビームライフルを放つがすぐに躱される。
「裏切り者が・・・・」
アルフレッドはそういうと瞬次加速（イグニッションブースト）で一気に距離を詰めるが、
「甘い！」
前の装甲から弾丸が発射されアルフレッドに直撃し、そこに、海斗が蒼鬼を上から振り下ろす。
アルフレッドはそのまま地面に叩きつけられるが、すぐに体勢を立て直し海斗たちを睨む、
「S・・・貴様、裏切ったこと後悔するなよ・・・・」
「くうを敵に回すならこっちの方がマシ・・・」
「『蒼い月』！お前は私が落とす・・・・」
アルフレッドはそう言い残して去っていく。
ドサッ
海斗はそのままその場に倒れた。

「ここは・・・・」

見慣れない白い天井、そして匂い。横を見ると窓から漆黒の闇が覗いている。

「気がついたか・・・・」

「千冬姉さん・・・」

そこにはいつもと変わらない表情の千冬姉さんがいた。

「まったく、とんでもないことをしでかしたな」

「なにかしたんですか？」

「ああ、お前たちの戦闘で、病院は半壊、町は一部が破壊された、こちらとしてはいい迷惑だ」

ものすごいことになってるな・・・・・・

「あ、他のみんなは！？」

「一夏、鈴、セシリアはそこまで重くないが軽傷で済んだ。マリア、紅葉は無傷だった。遥は重傷だが命に別状はない」

「よ、よかった～」

みんな無事なんだ・・・・

「そうだ、アキは・・・時雨は!?」

「そのことだが・・・今も手術中だ。とにかく、出血がひどい、助かるかどうかはわからないそうだ」

「・・・・・・・・」

海斗の表情が暗くなるのを見た千冬は慌て、

「今回もお前のせいではない。だから、気にはするな、いいな!」

「・・・うん・・」

海斗は小さく頷く。

「海斗、質問なんだが・・・・藍染は敵なのかそれとも味方なのか？」

「わからない・・・ただ、俺を守ってくれた・・・これは事実だから」

海斗はそういうと、窓をみながら思い出していた・・・・

海斗を変えたあの事件、海斗のトラウマを・・・・

第２１話　蒼の覚醒（後書き）

２巻の内容は、もうちょっと後になると思います。

感想をガンガン（あったら）コメントよろしくお願いします。

第２２話　天才と海斗（前書き）

今回は遂にあの人登場！

第２２話　天才と海斗

夜、千冬は海斗たちが起こした市街地戦闘の報告書を提出し、職員室に戻ってきたところだった。

「ふう～、まったく・・・あいつらは何回事件をおこせば気が済むんだ？」

クラス代表対抗戦でのアンノウンとの戦闘、授業中に謎のＩＳの乱入など、最近は頻繁に起こっており、そのたび千冬たちは報告書を提出しなければいけないのだ。しかも、今回はこの学園を襲った張本人が入院中ということでとにかく忙しかった。そろそろ帰ろうと思い椅子から立ちあがったとき、職員室の電話がなったので千冬は仕方なくその電話に出ることにする。

（ＦＡＸか・・・だが、こんな時間にだれが？）

こんな夜遅くに誰が？という考えたが送られたＦＡＸを見た瞬間、千冬は表情が引き攣った。

「なんで、こんな時に・・・・」

千冬は大きなため息を漏らした。

「結城、織斑、篠ノ之、日向、桜野の５人は今すぐ職員室に来い」

朝のＨＲが終わったときに千冬に呼びさせれた５人は職員室に向っていた。

「にしても・・・千冬姉さんが朝から呼び出しとは、俺たち何か悪い事でもしたか？」

「千冬姉のことだからげんこつは覚悟しないといけないかな」

「いや、げんこつだけじゃ・・・・もしかしら、外周１０週かもしれないな」

「いや、まだ怒られると決まったわけじゃ・・・・」

こんなことを話しながら廊下を歩いていく海斗たち。千冬から朝からの呼び出しということで４人とも緊張していた（主に恐怖）。海斗たちはようやく退院して、２日目のことなのだから心配で、心臓がいつもよりも早く動いているのがわかる。

「失礼します」

海斗たちは一礼し、職員室に入る。

「来たか・・・早速だが、これを読め」

千冬から、一枚のＦＡＸを受け取る。

「え～と、なになに・・・・『みんな～久しぶり、皆のアイドル篠ノ之束さんだよ～。束さんは今、ＩＳ学園にいます、今日までに捕まえないと、大変なことになるよ！それと、束さんを捕まえられた人には束さんからご褒美があります～。ちなみに、束さんを捕まえられないと、なんと、かっくんは束さんのものになります・・・・・そういうことで、束さんを探してみてね！かっく～ん、愛してる～～～』・・・・・・」

読み終わるのと同時に、海斗はＦＡＸを握り潰した。

「ということで、今からお前らには、この学園のどこかにいる束を捜索してもらう」

一瞬で海斗たちの空気が重くなる、特に海斗は身の危険を感じとったのか顔が真っ青になっている。

「束さんがここに・・・・・」

海斗は昔から束から気に入られていている（海斗にとって恐怖なのだが）。

「とにかく、急がないと大変なことになる。急げ！どんな手を使っても構わん！」

千冬の指令を受けると、真っ先に海斗が職員室から飛び出し走り去っていった。

「なぁ、一夏」

「なんだ、紅葉？」

猛スピードで走る海斗を追いかけながら紅葉は前から疑問に思っていたことを口にする。

「なんで、海斗はあそこまで束さんを嫌うんだ？」

「それは・・・・昔、色々なことがあったからだな・・・・」

「ああ、あのことか・・・・」

箒と一夏の２人ともどこか嫌そうな表情で、顔が引きつっている。

「それは、私も知らないな。私が束さんと会う前のことだからね」

遥も知らない様子なので、もう一度、一夏と箒に目をやる。

「わかったから・・・だから、その銃はおろして！」

紅葉いつのまにか銃を取出し、一夏に向けていた。

「たしか、あれは・・・・・海斗が家にきてから、半年ぐらいだったかな？」

海斗と束の関係・・・・

「昔、束さんが小さいころいじめを受けていたんだ、そいつらは千冬姉がいない時に限って襲ってきていた。その時、毎回のように海斗がその奴らを追い払っていたんだ・・・・そこからかな、束さんが海斗のこと気に入ったの・・・でも」

「「でも？」」

一夏は言いにくそうに二人に告げる。

「それから、束さんは海斗の隙あれば布団に潜ったりしていた、最初は海斗も嫌がってなかったが、だんだんとエスカレートしていき、最終的に中学１年の夏にいきなり家に来て１ヶ月間、海斗を連れ去ったりしていたから、海斗は束さんがちょっと苦手なんだよ」

「「・・・・・・・・・」」

衝撃告白。遥はあのときの謎が解けたような顔をしている。紅葉も似たような顔をしている。

「とにかく、今は束さん捜索が先だ」

海斗の後を追って、一夏たちはＩＳ学園の中を走る、走る、走る！

「はぁ、はぁ、はぁ、やっと見つけた・・・」

海斗がいるのは、ＩＳが収納されている倉庫。

「かっくん～、会いたかったよ～」

いきなり抱き着いてくる束に反応できずに、そのまま押し倒される。

「久しぶりだね、かっくん！束さん、かっくんに会えなくって寂しかったよ～」

「いきなり、抱き着くなよ！」

なかなか離れない束を引きはがそうとがんばるがビクッともしない。

「で、今更だけど・・・何しに来た？」

「それは、決まっているよ」

束は大きな笑みを浮かべ、胸を張り、高らかに宣言した。

「もちろん、かっくんを私の者にするため」

その答えに海斗はその場に崩れ落ちた。

第２２話　天才と海斗（後書き）

海斗はモテルねぇ～、

自分でいうのもなんだが、

羨ましい！！

第２３話　天才を捕まえろ！！（前書き）

今回は束と紅葉たちの鬼ごっこ？です。

第２３話　天才を捕まえろ！！

「もう・・・・海斗はどこにいるのかな？」

「わからないが、あいつは束さんのことには敏感だからな、居場所がわかったんだろ」

こんな会話をしながら廊下を全力疾走しているのは、一夏、箒、遥、紅葉だ。職員室からいきなり飛び出して行った海斗とこの学園のどこかにいる篠ノ之束を捜索中なのである。

「いったい、どこにいるんだ？海斗といい、束さんといい」

ＩＳ学園の端から端まで探すのはとにかく骨が折れる、このＩＳ学園はとにかく広い、広すぎる。いくら探しても見つかる気配がない。ちょっと諦めかけてしまうが、

「このまま、束さんをほっといたら、大変なことに・・・・・・・・」

考えるだけでも寒気がする。

（昔、嫌というほど味わったからな。まぁ、海斗ほどじゃないけど）

一夏も束の餌食にされていたわけだが、海斗は一夏たちよりもっとすごいことをされていた記憶が一夏にはある。それも、見ていられないほどの・・・。

「いや、思い出すのは止めよう」

あんな光景を思い出したくもないと叫びながら一夏は探し続ける。
そのとき、一夏の目の前に一枚の紙が落ちてきた。

「なんだ、これ？」

一応、内容を――――

「紅葉、遥、箒ちょっと来てくれ」
手紙を読む前に何か嫌な予感がする一夏は一応、３人を近くに呼ぶ。

「一夏、どうした？・・・・・一夏これって・・・」

「ああ、束さんからだ」

「え～と、内容は、『やっほ～、みんな探している？束さんは今、どこにいるでしょう。早く見つけてね！ちなみに、かっくんは束さんが頂いた！』・・・・」

「これって、結構、やばいんじゃ・・・」

「だな、海斗が束さんに・・・だとしたら、海斗が――」

「「危ない！！！」」
紅葉と遥はそう叫ぶと、一目散に走っていく、かなり、速いんだが・・・。
とにかく、海斗を助けに行かなければいけないのは明白だった。

「はぁ、はぁ、やっと、見つけた」

息を切らしながら、紅葉は一気に階段を上っていく。なぜ階段を上っているのかというのかと、さっき変な人が海斗を背負って屋上にいるのをたまたま発見した生徒がいたからだ。

「ようやく、追いつけましたね。束さん」

「あ、ひさぶりだね、もーちゃん」

無邪気な笑顔を紅葉に向けてくる、その視線はちょっと痛い。一夏と遥と箒は少し遅れって屋上に上がってくる。

「やぁ、みんな久振りだね」

「いや、そんなことはどうでもいいから、おろしてくれ～～」

海斗はなんか、アームロボットてきなものに掴まれて空中に浮かんでいる。

「もう、見つかったのか・・・・」

「さぁ、束さん！観念して、海斗をはなしてください！」

「え～」

「え～、じゃないから、離してよ頼むよ！」
海斗は拝むように頼んでいる、

「しかたないな～」

離してくれたが、海斗はそのまま地面に顔から落ちてしまう。

「束さん、何の用があってここまで来たんですか？」

「あ、忘れてた」

忘れるなよ、という海斗のツッコミを無視して、束は続ける。

「つい、かっくんのことに夢中で・・・」

「何が、ついだ。まったく、こっちの身にもなれよ！」

「まぁ、まぁ」
怒りが爆発しそうな海斗を遥がなだめる。

「ここに、来た理由はね・・・もーちゃんの専用機を届けにきたのだ！」

「え？」

一瞬で、皆の空気が変わる。束さんが専用機ってどういうこと？一夏たちもいまいち状況がのめてないらしい。

「もーちゃんは専用機がなかったからね。それに、束さんを見つけられたご褒美！」

「私の専用機・・・？」

「今は、倉庫にあるからね」

海斗は先ほどの場面を思い出す、たしかに倉庫にいたけど・・・・

「なんでまた急に？」

「ふふふ、それは秘密」

「気になる～～～」

ものすごい気になるのだが、まぁ、今はいいか。

「じゃあ、束さんはこれで・・・」

「海斗は置いていく！」

「たすかった・・・」

どさくさに紛れて海斗を連れ出そうとしている束さんを紅葉が止める。

「じゃ、またね。かっくん～、愛してる～～」

そういうと、いつの間にか束さんはどこかに消えていた。

「いったいなんだったんだ？」

海斗にとって、とてつもなく悲惨な時間が終わった。

夜の病院、面会謝絶と書かれたドアを開ける。

「藍染・・・話がある」

千冬がそういうと、藍染時雨は小さく頷く。

「そうか・・・・では、最初に、死んだはずのお前がなぜあいつらと一緒にいたのか教えてもらおう」

「わかりました」

夜も遅い病院は、とても静かでその小さな声さえ部屋に響いていた。

「どういうこと！」

スコールは目の前にいる、アルフレッドに怒りを露わにしていた。

「あなた、なんで、Sが裏切るような行動をとった！」

アルフレッドはそんなスコールは気にも留めず、

「どうせ、いつか裏切っていたさ。その時期が早まっただけだろう、気にすることはない」

「シルバーフリートはどうするの？」

冷静を取り戻したスコールは、静かな口調で尋ねる。

「大丈夫だ、代わりの者も用意している。ついでに、裏切り者には死んでもらうが・・・」

冷たい目で睨め合う2人だが、

「そう、それならよかったわ」

そう言い捨てると、スコールは部屋をでていった。

アルフレッドはポケットから端末を取出し、

「私だ、例の件だが、裏切り者がでたからな人手が足りないすぐにもう1人よこしてほしい。わかった」

端末の電源を切ると、アルフレッドは暗闇でもわかるような笑みを浮かべ、

「今度こそ、終わりだ。『蒼い月』」

狩人というべき顔になったアルフレッドは深夜の街を不気味な笑みで見つめていた。

第２３話　天才を捕まえろ！！（後書き）

もう、ちょっとオリジナルの話を続けます。

２巻の内容はもうちょっと後です。

第２４話　海斗のトラウマ（前書き）

今回は一夏メインです。

第２４話　海斗のトラウマ

「平和だな～」

「そうだな～」

海斗と一夏はＩＳ学園の屋上で日向ぼっこを楽しんでいる。今日は、いつもとなくのんびりしているかというと、

「日向ぼっこいいでしょ～、おりむー、ゆうみー」

海斗たちの隣にいる、のほほんさんこと布仏本音のせいである。昼休み、今日はいつもの女子どもがいないので何をしようかと廊下を歩いている時にばったり会い、そのまま今に至る。

「こうしてると、なんか今までのことが嘘みたいだな～」

つい最近まで、色々なことが海斗たちに起こっている。一夏と海斗がＩＳを起動させたり、イギリスの代表候補生に対戦申し込まれたり、鈴と遥、マリアと再会したり、謎のＩＳに襲われたり、いきなり倒れて何日も寝たきりだったり、束さんがいきなり来たり、とにかく色々なことがあった。とにかくこの短い間にいろんなことがありすぎて頭が痛くなってくる。

「まぁ、よくこんな短期間で立て続けに事件が起こったな～」

「そうだな～」

一夏の質問に間延びした返事で返す海斗だが、表には出さないが海斗がここ数日どれだけ苦しかったか一夏にも分かった。それは、白銀のＩＳ『銀の艦隊（シルバーフリート）』の搭乗者、藍染時雨のことだ。海斗のトラウ

マであり、海斗が織斑家を飛び出した原因でもある。３年前のあの日、俺たちの運命を変えたあの事件――――

３年前の秋、俺たちは中学１年だった。海斗や鈴、遥に弾、それに時雨、よくこのメンバーでつるんで遊んでいた。ＩＳが発表になってから数年たって、千冬姉はＩＳの関係で忙しかったけど、海斗や皆がいたから寂しくはなかった。いつまでも、みんなで笑って、このままみんな一緒にいられると思っていた、あの事件が起こるまでは・・・・・・

第２回モンド・グロッソ当日、俺は何者かにより、誘拐された。暗い倉庫に閉じ込められていた俺を助けてくれたのは、モンド・グロッソ決勝を棄権して駆けつけてくれた、千冬姉だった。幸い、俺は無傷だった。その後、あることが俺たちに聞かされる、それは海斗たちも事件にあったという知らせだった。俺と千冬姉がその事件現場に到着した時には海斗と全焼した建物だけが残っていた。その後、海斗に事件のことを聞かされた時はさすがに千冬姉までもが唖然としていた。その日、俺と海斗はいつもとは違い、別々で学校に行ったいた、その途中で俺は誘拐された、当然のように海斗も連れ去ろうとししたらしいが、失敗した。なぜなら海斗は１人じゃなかった、時雨と一緒だった。そのまま、海斗と時雨は逃げたらしいがさすがに振り払えず、小さな建物まで追いつめられたらしい、そして、そいつらは海斗たちが逃げられないように火を放ち、そのまま海斗た

ちを殺そうとしたらしい。海斗はぎりぎりで脱出したらしいが、その時は海斗は気絶しており記憶が曖昧で時雨がどうなったのかはわからないが、火が収まった後も時雨は姿を見せなかった、1ヶ月間も捜索が行われたが、時雨は発見できず、結局焼け跡から発見された時雨の持ち物だけだった。その後、千冬姉は俺の監禁場所をつきとめてくれたドイツ軍への見返りとして、1年間ドイツに渡り、海斗は時雨のことで精神が不安定になり、その後、置手紙とともに忽然と行方がわからなくなった。遥も2年のとき転校して、鈴までも2年の終わりに中国に帰ってしまい、俺は一気に、5人もの身近な人がいなくなり、俺も一時期精神が安定しなかったが、弾や他の皆が励ましてくれたおかげでなんとか頑張れた。

それから、2年後、IS学園で海斗、千冬姉と箒、鈴や遥に再会して、また皆で笑いながら過ごせると思っていた。

謎の火災が発生したあの時、俺たちは火災の原因である第一中央病院に向かっていた。

「第1中央病院って、たしか・・・・海斗のいる病院よね？」

ISを展開させた鈴は目的地に向かいながら、そんなことを話していた。

「そうだな、紅葉たちも無事だといいんだが・・」

「それでは、速く急ぎましょ――――」

そのとき、セシリアにビームが直撃し、地面に叩きつけられる。

「な、セシリア！！」

「私は大丈夫ですわ・・・・とにかく、今は一夏さんたちは急いで・・」

『残念ながら、あなたたちを先に通すわけにはいかないのよね』

そこには、灰色の装甲のＩＳを纏った女がいた。その女は、冷徹な笑みを浮かべながらこちらを見て、

『だから・・・落ちて！』

灰色のＩＳは瞬間加速（イグニッションブースト）で近づき、ビームサーベルで鈴を吹き飛ばし、そのまま一夏に向かって、荷電粒子砲を放つ。突然のことに反応が追いつけない、

さらに、一夏、鈴、セシリアに向かって、荷電粒子砲を出鱈目に撃ってくる、

「くっ」

灰色のＩＳは後ろにあるリング型の非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）のビットを切り離す、ビットの先に灰色の光が集約し、一斉に一夏に向けて放つ、

一夏は零落白夜を発動し、ビットから放たれたビームを切り裂く、

「これでも・・・喰らえぇぇぇぇ！！」

しかし、女は一夏の攻撃を難なくかわすと、一夏の腹に回し蹴りをおみまいし、一夏が怯んだすきに近距離で荷電粒子砲を発射する。

「ぐはぁ！」

一夏は激痛に耐えながらも、もう一回雪片を握りなおし、女を睨む、

「ふ～ん、まだ戦う気があるのか・・・」

バァァァン！！

突然、大きな轟音が響き渡る、

「な、なんだ？」

「もう、はじまったか・・・それじゃ、せいぜいそこから友達がおとされるとこでも見ていなさい」

「どういう意味だ・・・」

女は、そのままの意味だと言うとその場から、飛び去っていく・・・

「くそったれ・・・」

一夏はそのまま、意識を失った。

「お～い、一夏！授業始まるぞ！！」

目を開けると、そこには海斗がいた。

（夢か・・・・）

「日向ぼっこそこまで気持ち良かったのか？でも、次の授業は千冬姉さんだから気をつけろよ」

「あ、そうだった！てか、時間やばいんじゃ・・・」

「あ、急げ一夏！また怒られるぞ！」

二人は急いで廊下を走りながら、さっきの夢のことを思い出す

（今が幸せなら、それでいいよな）

そんな思いを胸に、教室に飛び込むように、入るが・・・

「遅い！！」

ゴツッ！！

今日も千冬の鉄拳が振り下ろされた。

第２４話　海斗のトラウマ（後書き）

まだまだ続くオリジナルの話・・・・。

第２５話　病院での攻防（前書き）

今回はちょっと長いですけど最後まで読んでください。

第２５話　病院での攻防

土曜、空は雲一つない青空だ。俺は今、千冬姉さんと車である場所にむかっていた。そこまで広くない車内、俺も千冬姉さんも無言でなにか重い空気が漂っている。それもそのはず、今俺たちが行こうとといるとことは町から離れたところにある政府の病院だ。政府の病院と言っても、一般も人でその病院のことは知らない、俺だってつい１時間前に聞かされたのだから。なぜ、そこが一般に知られないのかというと、そこの患者に問題がある。そこの患者にはある理由で政府の監視がつく、理由は単純、政府にとって表に出したくない人物・・・・犯罪者、まぁ、犯罪者と言っても世界規模で暗躍しているＩＳ関係者のことである。なぜ、俺がそんなとこに行くことになったのかというと、俺にある人物と会えというのだ。

「着いたぞ・・・」

千冬姉さんはそういうと車から降りる。車から降りた俺の目に飛び込んできたのは、

「意外と、普通だな・・・・」

ホントにどこにでもありそうな病院だ、政府の病院だからもうちょっといいところを想像していたが・・・・まぁそのことはどうでもいい、今はここに来た目的を果たそう。色々考えている内に千冬姉さんはいつの間にかいない。

「あれ?千冬姉さん?どこですか～?」

疑問符をたくさんつけながら探していると、

「海斗何をしている、こっちだ」

すでに、病院の入り口に立っている、これ以上はなれたらさすがに

いけないな・・・。
ちょっと小走りで千冬の後を追いかける。

「にしても・・・・中まで普通の病院だな、ここ・・・・・」

「お前はなにを想像してたんだ・・・」

「いや、広くてなんかこう・・・高級って感じ?」

「なぜ、疑問符がついている・・・・まぁ、それはおいといて、今からのことはわかっているな」

俺が今日ここに来た理由、アキ・・・・・藍染時雨と会うためだ。
彼女は白銀のＩＳでＩＳ学園に2回、第一中央病院1回、日本のＩＳ研究所1回と続けざまに襲撃している。そんな彼女に俺に会えという千冬姉さんは何を考えているのだろう、そもそも一市民である俺にそんな人を合わせていいのか・・・・

「千冬姉さん、ホントにいいの?会っても・・・・」

「政府への許可をとってある・・・それに、なんだかんだ言ってお前が一番会いたいのだろう」

「そうだけど・・・・・・・・いやっ、ちょっと待ってくれ、そんな目で見ないで!」

俺の反応を見るなり、変な目でこちらを見ている、なんか俺したか?

「まぁ、そんなことより、私は仕事があるので帰るが・・・3年ぶりだからな存分に再会を楽しんで来い」

夜には迎えに来るとだけ言い残し、帰って行った。

「まったく・・・」

俺はそんなことを言いながら、病室のドアを開けると、そこには時雨・・・アキがいた。

「お、お、久しぶりだな・・アキ」

「そ、そうだね・・・」

気まずい、ものすごく気まずい。まず、何を話したらいいのかわからないが、とにかく、マリアの時みたいのは勘弁だからな、

「「あのさ」」

二人の声は綺麗に重なる、やっちまった、完全に墓穴だった。なんか、あっちはあっちで顔が赤いような・・・まさに、デジャブだな・・これ・・・。

どうしよう・・・・・

もう、すでに空は青空から漆黒の夜空に変わっていた。あれから、まともに話せるようになったものの、まだどこか違う昔はこんな気まずくなかったはずだ。少なくとも中学の時はもっと・・・・・

「どうしたの、くう?」

「いや、なんでもないよ」

もう～、なんとかしないと、千冬姉さんが来るまでなんとか・・・・

「今・・・何か物音しなかった？」

「うん・・・」

「・・・・・・・・まさか・・・・もう・・・・」

「くう、どうかした？」

「い、いや、なんでも・・ない」

コツン、コツン・・・・

足音らしい音が大きくなっていく、自然に俺はいつでも動けるように身構えていた。

足音はもうすぐそこまで迫っていた、もしもの時に備え、ＩＳを準備する。

ガラッ！

勢いよく開いたドアの先にいたのは、

「あ、あんたは――――」

夜の病院の廊下を足音を立てずに、走っているのは黒服の男たちである。前にマリアを追いかけていたやつらだった。手にはマシンガンが握られている。黒服の男たちは藍染時雨と書かれた札を確認して、手に持ったマシンガンで部屋に一斉に射撃開始する。数秒間銃声が鳴り響く、男たちが射撃をやめたとき、まわりには空の薬莢だらけで、部屋はマシンガンの銃痕が生々しい。男たちは無言のアイコンタクトで中に入ると、そこには、

「は～い、ざんねん！誰もいませんでした～」

男たちは慌てて声のした方向に目を向けると、そこには佐水奈波留がいる。佐水奈は一番手前の男に反応させる暇を与えず、顎に一発強烈な右ストレートを入れる。男はそのまま崩れ落ちるが、そのまま顔面に蹴りをくらい気絶させられる。すぐに、マシンガンで反撃を――――

「一人ではないんだな、これが・・・」

佐水奈がすぐ横に飛ぶ、すると後ろには、ＩＳを展開した海斗が立っている。

「効かねえよ、そんなもん！」

マシンガンの攻撃をもろともせず、男たち2人の頭を掴み、床に叩

きつける。

「あと、2人！」

男たちは勝てないと判断したのか、窓から飛び降りようとしているが、

「私から逃げられるとでも、思うか？」

千冬は男たちにそれぞれわき腹に一発と、顔に蹴りを一発喰らわした。男は完全に伸びていた。

「お前は、何かあるごとに事件を持ち込むな・・・」

「すいません」

なぜ、おれが謝ってるんだ？むしろ俺頑張ったほうだろ・・・・。

「とにかく、話はこいつらを引き渡してからだ」

完全に伸びている男を見て可愛そうとさえ思えてくる。

「まぁ、結果オーライだね、くう！」
昔みたいにいきいきしているアキ、なんでこいつはこんな状況で楽しめるんだよ・・・・
ハァ～。

「そうか・・・失敗したか・・・まぁ、いいだろう。別段、脅威というわけではないからな」
アルフレッド・バージュはそんな報告を受ける、裏切り者S・・・・藍染時雨の抹殺の失敗。

「結城海斗、織斑一夏、日向紅葉、篠ノ之箒、セシリア・オルコット、凰鈴音、桜野遥、藍染時雨、ケイト・マリア、この9人は消さなければいけないな、そして・・・・この5人もか・・・」

「これも、すべて未来のため・・・・世界のために・・・」
アルフレッドは不気味な笑みを浮かべながら写真をみつめていた。
そこには、9人の写真ともう5人・・・金髪の少女が2人と銀髪、赤髪、青髪の少女達の写真があった。

「すみませんね、こんなことさせてしまって・・・」

「いいのよ・・・これも、あなたとの取引の一部じゃない・・・・」

満点の星空の下で、結城海斗と佐水奈波留の姿あった。

「ホントに助かりました。アンノウンが襲撃してきたときも、わざわざ、俺と遥だけでれるようにしてくれたり、病院が襲われた時、一夏たちを助けてくれたのもあんたたちでしょう？」

「察しがいいわね」

佐水奈は静かに微笑み、だがすぐに鋭い目線にかわる、

「くれぐれも、我々の『強化遺伝子体（ハイパージーン）』のことを頼みましたよ」

「わかってる・・・」

そういうと、佐水奈はどこかにいってしまった。

第２５話　病院での攻防（後書き）

次から、２巻内容に入ります

第２６話　一夏と海斗の休日／夢（前書き）

ようやく、２巻に入りました。

第２６話　一夏と海斗の休日／夢

「朝か・・・・」

紅葉はいつもよりちょっと早く起床した、いつもなら海斗が先に起きているのだが今日は紅葉の方が早いようだ。時刻は7時、カーテンを開けると朝日がまぶしい。

「なんでだーーーー！」

いきなり意味不明なツッコミをしながら海斗が起きた・・・いきなりのことなので紅葉は口を開けてポカンとしている。

「なんだ、夢か・・・俺はもうちょっといい夢はみれないのかよ・・・」

我に戻った海斗は、紅葉にきずくとおはようとあいさつしてくる。紅葉もそれに返す。

「ところで、どんな夢を見ていたんだ？」

「いや、体がライオンで頭が千冬姉さんが刀を持って追いかけてきたり・・・・他に変なやつらに追われたり、がけから突き飛ばされたり・・・・まぁ、色々だな・・・」

「カオスだな、その夢・・・・・」

たしかに、ツッコミどころ満載である。

「海斗、早く着替えて、食堂にいこう」

「ああ、そうだな。今から着替えるからまってててくれ」
海斗は着替え食堂に向かう、

「今日もうめぇな、ここの飯は」
ちなみに、海斗のメニューはいつものごとく魚定食である。

「海斗、よく飽きないな・・・」

「何言ってんだ、うまいもんは何回食っても飽きないだろうが」
真顔でそんなことを言われると反論ができない、まぁ、紅葉には人の食事に文句をつける気はないのでそのままにしておく。

「お、海斗おはよう」

「おはよう、一夏」

一夏はお盆を持ってそのまま右隣に座る。

「あれ、いつもの女子どもは？」

「みんな寝てんじゃんないの？」

昨日の夜、セシリア、鈴、箒は昨日、つまり土曜に騒ぎすぎて（一夏関係のことで）千冬姉さんから遅くまで、説教だったらしい。

「ところで、今日海斗、暇か？」

「暇だが・・・どうかしたのか？」

「ちょうど、よかった。今日、家の様子を見に行くついでに、弾のところに行くつもりなんだが・・・お前も来ないか？」

「そういうことなら、行くに決まってんだろう」

「じゃ、行くか」

「それじゃ」

「レッツ・・・・」

「「ゴー」」

「なんなの、このテンション・・・・」

海斗と一夏は、一人テンションについていけない紅葉をよそに盛り上がっていた。

「羨ましいね～、その楽園で2人は毎日、毎日・・」

「弾何考えているんだ？」

弾の呟きにたいして海斗がつっこむがスルーされる。

「で、お前ら2人はその女の園で、いい思いしてんだろ」

「してねぇよ」

「まぁ、鈴や遥が転校してきて助かったよ。話し相手少なかったしな」

「ああ、鈴と遥ねぇ・・・・・・」

弾は一夏と俺を交互にみる、なんなんだ？

「よっしゃ、俺の勝ち～」

「じゃ、弾、奢ってくれ」

「嫌だ！」

「嫌って・・・そもそもお前がゲーム弱すぎんだよ！」

弾は俺と一夏合わせて１０連敗である。

「そこは関係ないだろう」

「くっ・・・仕方がないな、今日はなしでいいだろう」

しかたなく、俺は引き下がることにする。そこで、ドアがいきなり切り破られ、

「お兄！さっきからお昼できたって――」

そこには、弾の妹の蘭がいた。

「な、一夏さん――」

俺は無視された・・・泣けてくる。この蘭も一夏の毒牙（無意識）におかされた一人である。

その後、弾お家で昼を食べるのだが、そのとき鈴が来年ＩＳ学園に受験するとか、弾が一夏に今月中に彼女をつくれだのいろいろとあった。

「疲れたな～」

夜、一夏と寮の廊下で別れた後、部屋のベットに直行だった。とにかく眠い・・・

海斗は疲れもあるのかすぐ眠りについた。

～海斗の夢～

「海斗、私から逃げられると思うなよー」

体がライオンの千冬姉さんが刀を持って追いかけてくる。

「海斗～、海斗～」

１００人ぐらいのマリアが走ってくる。

「海斗、どういうことかな？」

なにが!?とを言わせる前に遥が阿修羅を従え、なぜか空中に浮かんで追ってくる。

「くう、崖から人が落ちたらどうなるんだろうね・・・」

死ぬよ!!すると、アキは俺を押して落とそうとする。

「危ねぇ～」

危機一髪だった、だが次には・・・

「死」

「なんで、お前は一言だけなんだよ。しかも、なんで死なの？」

無言のまま、紅葉は銃口を俺の額に・・・・・・

「なんでだーーーー！」

いつものごとく、今日も海斗は元気だ。

「「転校生!?」」

いつものように教室に入った俺と一夏に意外な知らせが届いた。

「しかも、４人もこのクラスに!」

「なんでまた急に・・・」

この前、鈴と遥が来てから1ヶ月しか経ってない。

「さぁ、席に着け!ＨＲを始めるぞ」

その声とともに千冬姉さんと山田先生が入ってくる。しかし、なぜか顔が引きつっている。

「今日は転校生を紹介します・・・・」

なんで、そんなに暗いの?妙に暗い山田先生の合図で４人が入ってくる、だが、そのメンバーが・・・・

「来ちゃった・・」

「ま、マリア・・・」

なんで、マリアがいんの?なんで?

俺が困惑しているさなかマリアがこっちに来ようとしているのをその横の人が止める、

「だめだよマリア、自己紹介しなきゃ」

「あ、ごめんね、時雨」

うん？時雨って・・・・

「藍染時雨です、これからよろしくお願いします」

「ケイト・マリアですよろしくお願いします。海斗～愛してる～」

「あ、馬鹿！それ言ったら・・・」

今は、殺気が飛んでくる後ろを振り向く勇気さえない。

「誰かこれは夢だと言ってくれ・・・・・」

第２６話　一夏と海斗の休日／夢（後書き）

次から、やっとシャルたちが登場です！

第２７話　４人の転校生（前書き）

シャルの登場ですね・・・・！

第27話　4人の転校生

「転校生がまさか、この2人とは・・・・」

まさかの人物の登場に海斗は驚きを隠せない、さっきマリアが不用意に愛してる～なんて言ってしまったせいで教室中がざわざわしている。

「あれって、結城君の彼女？」

「ちょっと、でも日向さんや桜野さんはどうなるの？」

「もしかして、3股！？」

変な噂が流されそうな雰囲気漂っている、しかし、そんな雰囲気も千冬姉さんの一声で鎮静化する。

「静かになったな・・・それでは、自己紹介を再開してくれ」

「はい、シャルル・デュノアです、これからどうぞよろしくお願いします」

律儀にお辞儀するその子は、髪は濃い金髪で印象はまるで貴公子という感じなのだが、

「きゃー、3人目の男子！」

そう、男子なのだ。3人目の男子とうことあって女子はいつも以上に騒いでいる。

（普通は、クラスは分散させないのか？）

一気に４人、普通の高校だったら別のクラスだろ・・・・・まぁ、このクラス人数少ないし、千冬姉さんがいるしマリア、アキに関してはそれがいいだろう。でも、騒ぎすぎじゃないのかこのクラス・・・・

俺が何かと考えている内に女子を静かにさせていた。

「・・・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官！」

教官って・・・軍隊じゃないのにな。それに黒の眼帯、しかも、ガチの眼帯だ。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

なんか、難しいな名前・・・。そんな考えていると、

「！貴様が――――」

バシンッ！

一夏が平手打ちで殴られた。な、なんで？ドイツじゃこれが普通なのか？だとしたら俺はドイツには行きたくないな。そこで、ラウラ・ボーデヴィッヒだっけ？とにかくラウラは今度は俺を睨んできた、

「貴様――――！」

明らかに、一夏のときより強く睨んでいた。なんか俺したっけ?ラウラの平手打ちが俺に炸裂する瞬間、
俺は・・・・

「な・・・なにを・・」

「それは、こっちのセリフだ。いきなりなんで平手打ちなの?一夏のあれ絶対痛いよ。これが、ドイツの礼儀なのかね?」

自然と俺はラウラの手を掴んでいた。怒りが爆発しそうなんだが・・・紅葉いいか?

俺は目で紅葉にアイコンタクトするが、紅葉は頭の上で?印を作っている。

「ラウラ!いい加減にしろ・・・・HRはこれで終わりだ!」

千冬姉さんの一声でラウラは俺から離れるが、あの目、確実に俺と一夏に恨みがあるな・・・・

「また、面倒ことになりそうだな・・・」

「何が、面倒って?」

いきなり横から話かけられてびっくりするが、それがアキだとわかりホッとする。

「なんだ、アキかよ・・」

「なんだとは、なによ、折角また同じ学校なんだから、もっと喜んでよ！」

「喜べって言われても・・・・・・・」

そんな、冗談交じりの会話の最中に・・・

「かいと～～～～！」

「うわっ！」

いきなりマリアが抱き着いてきた。その勢いで、俺は転びそうになったが何とか持ちこたえる。

「やっと、海斗と同じ学校に通えるね！これからはずっと一緒だね」

「そ、そうだね」

とても、同じ年齢とは思えない笑顔にちょっと照れてしまう。だが・・・

「海斗・・・」

二人の阿修羅が後ろにいる。やばい！殺気さえ感じる・・・・。今の俺の構図を説明すると、前には、小悪魔（マリア）横には、悪魔（アキっていうか時雨）、で、後ろには・・・・

「か～い～と～！」

阿修羅と鬼が二人ほど（遥と紅葉）が立っている・・・・・これは

もう、

「地獄図？」

その日、紅葉と遥に事情を1日かけて説明した（知っている範囲で・・・・・）

「というわけで、部屋替えです」

「「はい！？」」

俺と紅葉は一瞬、山田先生の言ったことがわからなかった。

「ですから、日向さんの部屋の用意が出来ましたので、移動です」

「ちょっと待ってください、いきなりですね」

「ついさっき決まりましたから、それにいつまでも年頃の男女が同じ部屋というのは嫌でしょうし」

「嫌ではありません！別に気にしていません」

「いや、そう言われましても・・・」

紅葉・・・先生困ってるじゃないか、まったく。まぁ、俺はどっちでもいいんだけどな。紅葉とはもう長い付き合いだし・・・。

「ということは、俺は一夏とですか？」

「いえ、織斑君はデュノア君とです」

・・・・マジか、ということは俺は一人か・・・・喜んでいいのか、寂しいのか・・・。

「では、俺は一人ですか？」

「いえ、それは――――」

「くう～、いる～？失礼します！」

「失礼します～」

げっ・・・この声は・・・

「な、なんでお前たちがここにいる！藍染！ケイト・マリア！」

「なんでって・・・それは、私の部屋だからだよ」

「な・・・」

「はぁ？」

さすがの俺でもさっきの言葉には反応した。私の部屋だと・・・

「それが、ですね・・・マリアさんたちが来るのが急だったんで、部屋が用意できなくて・・・織斑先生が結城君の部屋にしろと・・・」

千冬姉さんなんてことしたんだ！よりによってこいつらかよ！どうせなら、もっと別の人が・・・・

「でも、ここは、結城君と藍染さんの部屋ですよね・・・・・マリアさんは今は・・・織斑先生のとこに・・・・」

「・・・・・・」

そういうことか、マリアは織斑先生のとこか可愛そうに・・・・

「え・・・とうことは・・・アキじゃなくて時雨は？」

「はい！もちろんこの部屋です！」

すごい悔しがってるマリア、うれしそうなアキ、そして、本日二度目のお怒りモードの紅葉がこの部屋でにらみ合ってるんだが・・・・・怖いな、ここ。

もう、逃げたい・・・・・。

第２７話　４人の転校生（後書き）

はじめに言います、すみません！シャルの登場とか言っておきながら一回しか喋ってない・・・・・すいませんでした。

第２８話　あ～んと一夏と海斗（前書き）

今回はほのぼのとした回です～。

第２８話　あ～んと一夏と海斗

暗い、とてつもなく暗い。まわりには闇しか広がってないかと思ってしまう。なにもないがとてつもなく広い。見えないのにわかる、ここは、普通の場所ではない。少ないくとも自分みたいのが来るべきではないところなんじゃないかとさえ思う。

『――――――はじめましてだな』

声の主は綺麗な黒髪で、全身黒のワンピースを身に纏っている少女、その少女は目の前に立っていた。

『――――――――お前が――――』

そこで、少女は言うのをやめる。そして、こちらを見つめながらこう言う。

『――――君となら、見れるかもしれないな――――――』

少女は、とてつもなく冷徹で、どこか、うれしそうな顔で、

『――――――終焉を――――――』

「どういうことだ・・・」

「どういうことだって、言われても・・・」

昼休み、一夏たちは揃って屋上にいた。

「なぜ、こんなにも集まっているのか聞いているのだ」

「なんでって、そりゃ、シャルルと時雨とマリアはこの学校来たばかりで、右も左もわからないだろうからみんなで一緒に食べようかなって」

「まぁ、そういうことですわ」

「そういうこと」

セシリアと鈴は嬉しそうに箒を見ている。事の始まりはさっきの授業で箒が一夏に今日は一緒に食事をしようと言われたことなのだが・・・

「まったく・・・気づけよ一夏・・」

呆れてかける言葉もない、一夏にしてみればただの食事の誘いだと思ったに違いない。

箒は弁当も用意しているというのに・・・・・・まぁ、セシリアと鈴も用意しているんだけども・・・

ちなみに、セシリアの弁当は前に食べたのだが・・・・・・うぷっ、思い出すのはやめよう。

「僕本当にここにいていいのかな?」

シャルルが困った顔で言ってくる、そりゃいずらいよなこの雰囲気・・・。

だが、俺も人の事言え無い状況なんだよな、なんでかというと・・・

「ね、おいしい?おいしよね!だってこの時雨さんが作ったんだからおいしいはずだよね」

「うん・・おいしいよ」

「海斗・・私のはどう?」

「遥のもおいしいよ」

「よ、よかった~。海斗の口に合わなかったらどうしようかと思っ

たよ」

この通り、俺もなぜか女子陣が作ってきた弁当を食べている。

「私のはどう？」

「・・・・・・お、おしいよ・・・」

「頑張った甲斐があった・・」

俺の前で、紅葉はとても喜んでいるが・・・実はセシリアほどではないが紅葉も料理が駄目なのだ。今日の料理もものすごくまずいが、おいしいと言わなければ大変なことになる。昔、一回まずいといったときは死にかけた・・・もう、あんな目なにはあいたくわない。ちなみに、マリアも作ったらしいのだが朝に千冬姉さんに自分の分全部食べらたらしく、それを食べるのは気が引けたのでマリアの弁当は遠慮しておいた。なんとなく、一夏たちの方に目を向けると、一夏が箸にから揚げを食べさせようとしている。そこにシャルルが、

「あ、これってもしかして日本ではカップルがする『はい、あーん』ってやつかな？仲睦まじいね」

なんてことを言う。その言葉で鈴とセシリアがすごい表情で、

「こいつらのどこが、仲いいのよ！」

「やり直しを要求します！」

だが、シャルルはそんな状況でも笑顔を絶やさない。そこでシャルルがセシリアたちにおかずを交換することを提案する。鈴が一夏のから揚げをさっさと食べてしまう。

「あ、わりい箒。今のでから揚げ、俺が口付けたのしか残ってない」

「べ、別にいいぞ。口がついていても・・」
その言葉に一夏はそうかとだけ言って、箒の口にから揚げを運ぶ。

「あ、あーん」

「い、いいものだな」

「だろ、このから揚げ」

「そっちではないのだが・・」

相変わらず一夏は鈍感だなと思いつつ、再び視線を前にもどすと・・
・

「何ですかな皆さん?」

そこには、目をキラキラさせたみんなが自分の弁当を差し出して、口を開けて「あ~ん」と言っている。
まさか、やれってのか?唐変木の一夏ならまだしも俺は恥ずかしいぞあれ。でも、やらなかったら死ぬだろうな・・・・・やるしかないのか・・・

「わかったから、いったん皆席に着いてくれ」

その言葉を聞くと、いままで机の上に乗っていた皆はあっさり席の戻る。

「じゃ、海斗・・・あーん」

最初はマリア、次に遥、アキ、紅葉の順だ。もちろん皆はおいしいそうに食べていたが、

「な・・・・まずい・・・」

紅葉だけ、うれしいのやら、悲しいのやらわからない複雑な表情だった。

空はもうすっかり暗くなった頃、職員室で山田麻耶は大声を上げていた。

「織斑先生！織斑先生！」

「ん？・・何か用か山田君？」

「用って・・・織斑先生こそなにぼーっとしてたんですか？」

「あ、ああ。ちょっと昔のことを思い出していてな」

「昔のことですか・・・」

昔のこと・・・大事な友達との思いで・・・・

「もう、あれから7年以上たつのか・・・・」

千冬の脳裏に浮かぶ一人の女性。黒髪で千冬にも劣らない体の持ち主だった友達、束とよく一緒にいた友達、

――――――藍染彩加、小学校のころから仲良しだった束とともに唯一無二の存在だった。

あの事件が起こるまでは・・・・そう、彩加が殺されるまでは・・・。

それから、束は変わり、研究に没頭した、彼女が生前言っていたＩＳ完成させた。

すべてはあの時から始まったのかもしれない。もし、ＩＳが無かったなら自分たちの未来はかわっていただろう。なにもなく平凡に暮らして居たに違いない。だからこそ、子供たちの未来は自分の手で守るのだと思っていたが、今はそんな力はない、今できることはせいぜい技術を教えることだけだ。

「まぁ、今年は問題児ばかりだけどな・・」

千冬はそいう言うと、職員室を出ていく。

『結城海斗及びケイト・マリア、『例』のことについての報告書』
――――――――結城海斗について、『例』のことについてはまだ記憶は戻っておらず、今のところ脅威ではないが、ケイト・マリアの接触で少し昔の記憶を取り戻しており、いつ記憶が戻ってもおかしくない状況です。ケイト・マリアについては目立った動きはなく、今のところ大丈夫だと思います。
ＩＳ学園に徐々にではありますが、『予言に選ばれた者』たちが集まりつつあります。
結城海斗、ケイト・マリア、日向紅葉、織斑一夏、篠ノ之箒、桜野遥、凰鈴音、セシリア・オルコット、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、藍染時雨、更識楯無、更識簪、サレナ・レート、
レイナ・サーシャ、ロロナ・アルベルトの以上１６名の監視は引き続き続行します。
それと、『終焉（ディマイズ）』の件ですがやはりアルフレッドが所持している模様です。
織斑千冬と篠ノ之束の件は未だ詳しい状況が掴めてなく、追って報告します。
報告は以上です。

第２８話　あ～んと一夏と海斗（後書き）

伏線張りまくりだな。

感想などあったらコメントよろしくお願いします。

第２９話　ラウラＶＳシャルル＆一夏／海斗の疑問（前書き）

これからの展開で悩み中・・・。

第２９話　ラウラＶＳシャルル＆一夏／海斗の疑問

「ええとね、一夏と海斗がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を理解していないからだよ」

シャルルが転校してきてから、５日が経って今は土曜だ。午後はアリーナは完全な自由時間なので俺と一夏はシャルルにＩＳのことについてレクチャーを受けている。

「一応わかってるつもりなんだけどな」

「特性って言われてもな～」

「知識として知ってるだけって感じなのかな。２人ともさっきの模擬戦、全然僕の間合い詰められなかったよね？」

「瞬次加速（イグニッションブースト）も読まれていたしな」

「常に一定の距離を保たれて、どうすることもできなかったからな」

レクチャーを受ける前、シャルルとの模擬戦を行ったのだが、俺も一夏も歯が立たなかった。

「一夏は武器が雪片だけだから、瞬時加速（イグニッションブースト）の使うタイミングは大事になってくるよ。海斗はもうちょっと射撃訓練をしなきゃね」

「これでも、よくなった方なんだよ・・・」

紅葉や遥の指導によって前より当たるようになったが、まだ確率は５割ぐらいだ。さっきのシャルルとの模擬戦でも一回も当らなかっ

た。それにしてもシャルルの説明は分かりやすい。俺や一夏が教えてもらっている自称コーチたちはそれはそれは酷い。擬音語や感覚、あまりにも細かすぎてわからない説明なのだ。一夏も同じことを思っているはずだ。

「まぁ、それにしてもやっぱ男子は良いな海斗。気を使わないでいいっていうか」

「あ、ああ・・・そうだな・・」

「どうかしたか海斗？」

「いや・・なんでもない」

俺が考え事をしていると、

「ねぇ、ちょっと、あれ・・・」

「ウソっ、ドイツの第3世代型だ」

「まだ、本国でのトライアル段階って聞いたけど・・・・・」

急にアリーナがざわつき始めた、俺と一夏は注目の的に視線を移した。

「・・・・・・」

そこにいたのは、転校生の1人、ラウラ・ボーデヴィッヒだった。

転校初日から、今日まで誰とも話そうともしない、というか最初に一夏に平手打ちをかましたのだからそうなって当たり前か・・・・。

まぁ、俺もあんなこと言ってしまのでどう接していいのかわからない。

「おい」

オープンチャンネルから飛んでくる声は間違いなくラウラだった。

「なんだよ・・・・」

一夏は一応言葉を返す。ラウラは言葉を続けながらフワリと飛翔しながら、言葉を続ける、

「貴様らも、専用機もちだそうだな。なら話は早い、私と戦え」

「嫌だね、こっちは戦う理由がない」

「俺もだ、なんでわざわざお前と戦わなければいけないんだよ」

俺と一夏は拒否したが、ラウラは飽くまでも戦うつもりらしく、いつでも動けるようにしておく。

「貴様らに戦う理由がなくても私にはある」

一方的だな・・・・

「はっ、関係ないな。こっちはやりたくないんだ他をあたりな」

俺は上から目線でラウラに言うが、

「貴様らがいなかったら、教官のモンドグロッソ2連覇は確実だったのだ・・・貴様らさえいなかったら・・・」

やっぱりそのことか・・・モンドグロッソの決勝戦当日に一夏は謎の連中に誘拐され、俺は・・・・・。そのせいで千冬姉さんは試合を放棄した、当然千冬姉さんは2連覇は果たせなかった。その後、千冬姉さんは状況提供をしてくれたドイツに1年だけ行っていた。ラウラはその間に千冬姉さんに知り合ったのだろう。

「貴様らがしかっりしてないせいで・・・教官はあんな状態に・・」

「なんのことだ?」

俺たちのせいで千冬姉さんに迷惑をかけていたのは分かるがラウラは何のことを言っている?

「貴様らの存在は認めない」

存在まで否定された・・・・

「また、今度な」

「ふん、ならば――――――戦わなければいけないようにしてやる」その瞬間、ラウラのISが戦闘態勢に移行する。刹那、右肩の大型の実弾砲が火を噴いた。

ガキンッ!

「こんなところでいきなり発射してくるなんて、ドイツの人は随分、沸点が低いんだね!」

「貴様・・・・」

横からシャルルがシールドで実弾を防ぎ、アサルトカノン『ガルム』

をラウラに向ける。

「フランスの第二世代型（アンティーク）ごときで・・・」

「未だ量産のめどが立たないドイツの第三世代型（ルーキ）より動けるだろうね」

二人の睨み合いが続く、それにしてもシャルルのコールは早かったな、さすがは代表候補生というところかな。

『そこの生徒なにをしている！クラスと出席番号を言え！』

突然スピーカから声が響く。騒ぎを聞いて駆け付けた先生だろう。

「・・・・ふん、今日は引こう」

ラウラはＩＳを解除するとどこに去ってしまう。きっと怒られるだろうな・・・・。

「一夏、大丈夫？」

「ああ、大丈夫・・」

その後、シャルルの提案により今日は上がることにしたが、

「じゃ、先に・・」

「今日も一緒に着替えないなのか・・」

シャルルは何故か俺たちと着替えない、まぁ、一夏のことだからそんなこと気にする様子もなく、

「それじゃ、また部屋でな」

そう言って、シャルルに手を振っている。

「一夏、すまん俺ちょっと用事思い出したから、さっきに帰るわ」

「そうか、またな」

用事というのはないが・・・理由は、シャルルのことについてだ、どうも引っかかる。

「シャルル！」

「うわぁ、なんだ・・・海斗かびっくりさせないでよ・・・」

シャルルは本当に驚いたようで、こっちに変な目線で見ている・・・

「何か用？」

「ちょっと、訊きたいことがあって・・・」

俺は今まで引っかかっていたことを素直に話してみる、

「シャルルって本当に・・・・・男なの？」

「！」

シャルルの顔は驚いているのか焦っているのかわからないような顔をしている。やっぱり俺の勘違いかな？

「な、なに言ってんの、ぼ、僕は男だよ！何言ってのさ」
「そうだよな・・・なに、いってんだろ・・俺・・」
俺はさすがにその場にいずらくその場を駆け足で去っていく。
「俺は馬鹿かな、は、はは、ははは」
夕暮れ、一人笑いながら、海斗は寮に向かって走る。
「はぁ～ようやく終わった」
一夏は海斗が出て行ったあと、山田先生から白式の正式な登録をするとかで、さっきまで一夏は書類を書いていた。一夏は寮の自分の部屋に戻り、ベットに直行する。
「あ・・・そうだ、たしかシャンプー切れていたよな・・」
シャワーの音がするので、シャルルが使っていることわかっている。

洗面所に入るがその時、

ガチャ。

洗面所のドアが開き、そこにいたのは・・・

「い、い、・・・ち・・・いち・・か・・・・？」

そこには、どう見ても、

「シャルル！？」

シャルルというか・・・・女子がいた・・・・。

第２９話　ラウラＶＳシャルル＆一夏／海斗の疑問（後書き）

この小説は一話が短いんでしょうか。一話２０００～３０００ぐらいで収めてるんですが、増やした方がいいと思いますか？ご意見をお待ちしております。

感想などありましたら、ガンガンコメントしてください。

第３０話　シャルルの秘密／ラウラと千冬（前書き）

今回は指摘があった、文字数を大幅に増やしております。

最後まで読んでいただくと幸いです。

第３０話　シャルルの秘密／ラウラと千冬

「一夏に言わなきゃいけないことを忘れた～」

俺はさっき寮に戻る途中で山田先生に伝言を頼まれていたことを寮に戻ってきてから思い出し、一夏の部屋に向かってる途中だった。さっき部屋をでるとき今日の夜はアキと一緒に食事をすると約束をしてしまったから長居はできないが、

「でも、シャルルにあんなこと聞いたから、気まずいな」

さっき、帰る途中のシャルルに、あんなことを聞いてしまったからな。

『シャルルって本当に・・・・男なの？』

普通そんなこと聞くやつはそうはいないだろ。（普通どころか、まずいないだろうけど）まぁ、根拠もなくそんなこと聞くことが間違だろ・・・。

考えるほど馬鹿らしくなるので、ここで一旦そのことを忘れる。あまりにも恥ずかしかったのか、自分でも驚く速さで走ってしまっていたらしくすぐに一夏の部屋の前に着いてしまった。

俺は２回ほどノックをして中に入る。中はちょっと薄暗かったが特に気にもせず、部屋に入る。奥に進むと、ベットに座る一夏と――

――――――――――

「・・・・お邪魔しました」

深くお辞儀をし、すぐさま部屋を出て――――――――

「ちょっと、待て！海斗、誤解なんだって～」

「で、ようするに・・・・・シャルルを襲ってたわけね」

「おい！今の話からどうやったらそうなるの！？」

まぁ、冗談はさておき（最初は素でそう思った）一夏の話を短く纏めると、実はシャルルは女で、たまたまシャンプーが切れていて、と届けようとしたら・・・裸のシャルルを見てしまったっと・・。

「というと・・・さっき俺が訊いたことは間違ってなかったのか」

「うん・・・それを聞いたときはドキッとしたよ・・・・」

そりゃそうだ、女ってこと隠しているのにばれたとなれば大変なだからな。

「そんなことより、なんでこんなことをしているんだ?」

「それは・・・・・・」

シャルルは口を閉ざす。それはそうだ、シャルルにもこんなことをする理由ぐらいあるだろう、それもとても言えるような理由ではないはずだ。

「・・・実家の方にそうしろって言われて・・・・・」

実家の方というと・・・デュノア社か・・・・デュノア社はヨーロッパのほうでは結構でかいＩＳの企業だと思うんだが・・・・シャルルはさらに続ける。

「そこの社長・・・僕の父親からの命令なんだ・・・・」

父親からの命令か・・・・・・だが、気のせいかシャルルの表情に違和感がある。

「いくら、父親だからって・・・なんでそんな?」

「僕は・・・愛人の子なんだ・・・」

愛人の子――――子供の俺たちにでさえわかる。愛人の子というのがどんな意味なのかわかる。

「引き取られたのが2年前、お母さんが亡くなったときにね、そのときデュノア社の部下が来て、そして色々な検査を受ける過程でＩＳの適正が高いことが分かり、非公式ながらＩＳのテストパイロットをすることになったんだよ」

愛想笑いをしてくるシャルルだが、その声は乾いていてちっとも笑っていない。さすがに俺も愛想笑いで返すわけにもいかず、黙り込んでしまう。ふっと横の一夏を見ると、怒りが込み上げてきたのか手に血管が浮き上がっていた。その後もシャルルは今の自分が置かれている状況、デュノア社が経営危機だということ、それで、広告と俺たちのＩＳのデータ、つまり蒼月と白式のデータを盗めと言われたらしい。そこまで聞いて限界に達したのか、

「いいのか、それで？」

「え・・・・？」

「いいのか？いいわけないだろう。親が何だっていうんだ。どうして親って理由だけで子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろ。そんなもんは！」

「い、一夏・・・・？」

シャルルは突然のことでどうしていいのかわからいなみたいだった。だが、一夏はさらに続ける。

「親が親ががいなければ子供は生まれない。それはそうだろうけど。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！生き方を選ぶ権利は誰にもあるだろう。それを親なんかに邪魔をされて言い訳ないだろう！」

俺は一夏が言いたいことが分かっているので何も言わない。俺も一

夏と同じだから、気持ちは痛いほどわかる。7年間一緒に過ごしてきたのだから。

「どうしたの、一夏変だよ？」

「あ、ああ・・・・つい熱くなってしまって」

「いいけど・・・本当にどうしたの？」

「俺は――――――俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「あ・・・・」

シャルルは黙ってしまう、おそらく俺たちのことは資料で知っていたのだろう『両親不在』の意味を理解したらしく、シャルルは申し訳なさそうに顔を伏せる。

「その・・・・ごめん」

「気にしなくていい。それに俺の家族は千冬姉と海斗だけだから、別に親に今更会いたいなんて――――――――」

そこで、一夏の言葉がつまる。理由はわかる、俺だ。

「海斗・・・ごめん」

「いいよ、たしかに俺の親がどんな人なのか気になるけど今更会いたいなんて思ってないから・・・・」

もう何年も親の顔を忘れている俺にとってもうどうでもいいことなのだ。

「え、どういうこと？」

シャルルは話についていけてないらしく、俺に意味を聞いてきた。

「俺は千冬姉さんに拾われる前の記憶がないんだ。だから、親の顔どころか、名前や顔、どこに住んでいたのかさえ知らないんだ」

「そ、そんなんだ・・・・」

シャルルはそれ以上追及せず、そのまま、顔を伏せてしまった。

「シャルルはこれからどうすんの？」

「男ってことがばれちゃったからね・・・・きっと代表候補生から外されて、よくて牢屋行きかな」

シャルルはそんなことを平然と話しているが、その笑顔が痛々しい。

俺も一夏も怒りが収まらい。

「・・・だったら、ここにいろ」

「え・・・？」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体にも帰属しない。本人の意味がない場合、それらの外的介入は原則的に許可されないものとする」

一夏がなんかのロボットみたいにすらすら読む、なんかすげぇな。

「一夏・・」

「ん、なんだ？」

「よく覚えていたね。特記項目って５５個もあるのによく覚えっていたね」

「一夏にしてはめずらしいな・・・」

「・・・勤勉なんだよ俺は」

「笑えないな・・」

「な、なんでそうなるんだよ」

「ふふっ、おもしろいね２人って・・・」

さっきまでの暗いシャルルではなく、そこにはいつもの笑顔が似合っているシャルルがいた。

「まぁ、困ったときは俺や海斗を頼れ」

「そうそう、いざってときには紅葉や鈴たちもいるしさ」

「２人とも・・・ありがとう！」

その後、俺は一夏に『大浴場がつかえるようになるらしい』ということを伝え自分の部屋に戻った、

が――――

「ただいま――――」

「・・・・今何時かな・・・・くう・・・」

俺は部屋に戻った後、アキにみっちり説教されました。

「それは、本当ですの？」

「嘘じゃないよね？」

月曜の朝、俺と一夏は廊下まで聞こえてきたその声に目をしばたたかせた。

「なんだ？」

「さあ？」

「分からん」

俺もシャルルも微妙な返答をしてしまう。

「本当だってばー。この噂、学園中で持ちきりなのよ？月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か結城君と付き合え――――」

「「俺たちがどうかしたか？」」

「「「きゃああっ！？」」」

「うわっ、なんだよいきなり」

話しかけるといきなり大声で叫ばれた、耳が痛い・・・。

「で、何の話だったの？俺の名前が出てたみたいけど・・・」

「さ、さぁ、どうでしたかね？」

「う、うん、そうだっけ？」

なんで、こんなにも狼狽えるんだこの2人。

「さあ！そろそろ、席に着かないといけませんから」
「そ、そうだね」
さっきまで集まっていた女子たちが一斉に自分の席に着く、蟻のみたいだな（悪い意味ではない）

「なんだったんだ？」
「さあ・・・？」
「知らねぇ」

（なぜ、このようなことに・・・）

朝、教室入るなりこの話を聞き、箒はがっくり肩を落としていた。
その理由は今流れている噂の内容だった。

『学年別トーナメントで優勝した人は織斑一夏か結城海斗と交際できる』というものだった。

（あれは、私と一夏だけの話だろっ！なぜ、海斗まで・・・）

その話は、箒が部屋替えの時、

『今度の学年別トーナメントで優勝したら、つ、付き合ってもらう』

なんて、廊下で一夏に宣言したのが間違いだった。あのとき絶対だれかに聞かれて、それが変化していまの噂になったんだろう。

「はぁ～」

それから、ＨＲで千冬に出席簿アタックを喰らうまで立ち直れなかった箒だった。

「ここのトイレってどうにかならないのかな？」

ＩＳ学園は基本、女子しかいない、だから俺たち男子がトイレに行くには基本端の方に行かなくてはいけないため、毎回苦労する。シャルルは大変なんだよな・・・いや、やっぱり考えないようにしよう。そうとは言ってもどうにかならんのかね・・・。時間は昼休み、俺はいつものメンバーで食事し、その後尿意に襲われトイレに走っていたわけだが、このままみんなのところに戻るのが面倒になってきたので、俺は木陰を見つけてそこに座る。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

木の陰でさっきは気づけなかったが、その声は間違いなく千冬姉さんだった。もう一人は――――――

「このような極東の地でなんの役目があるというのです」

もう一人はラウラだった。ラウラはいつもの冷徹な声ではなく、声を荒らげていた。

「お願いします教官。我がドイツでＩＳのご指導を！ここではあなたの能力の半分も生かされません！」

「ほう」

「それに、この学園の人間など教官が教えるにたる人間ではありません」

「なぜだ？」

「この学園の生徒はＩＳをファションとなにかと勘違いしている。その程度の認識の甘い生徒など教官が教えるべきでは――――」

「――――そこまでにしとけよ、小娘」

「っ・・・・！」

凄味のある千冬姉さんの声。さすがのラウラもたじろいでいる、その顔は恐怖で歪んでいた。言葉の続きが出てこない・・・。

「１５歳でもう選ばれた者気取りか・・・・見ない間に随分偉くなったもんだな」

「わ、私は・・・・」

声が震えている、恐怖・・・千冬姉さんが怖いというより、大切な人から嫌われるという恐怖だろう。少なくとも俺は怖い。あんな顔の千冬姉さんは初めて見る、少なくとも俺や一夏の前ではあそこまで怒ったことはなかった。

「もうそろそろ、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」

「・・・・・・・」

声色を変えた千冬姉さんにラウラは無言のまま走り去っていく。さ

て俺もそろそろ――――――

「おい、そこの男子ども！異常性癖は感心しないぞ」

異常性癖って、俺は完全に無罪だろ・・・・・あれ？男子どもってことは・・・・・

「て、なんでそうなるんだよ千冬ね――――――」

バシーン

「織斑先生・・・・」

もはや、も慣れている光景だったので、そのままスルーする。

「それ、走れ劣等生ども。こままじゃお前らは月末の学年別トーナメント初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」

「わかってるよ」

「そろそろ、行こうぜ一夏。このままじゃ本当に遅れちまう」

「ああそうだな」

俺と一夏はそのまま教室に走り始める。さっきの千冬姉さんの話とラウラの話、少なくとも俺や一夏に関係している。あの時、俺が弱かったばかっりに・・・・・。

今度こそこの手に入れた力で皆を守って見せる・・・・。

「見てろよ・・・今度こそ・・・」

俺は手首のブレスレットを握りしめながら、教室に向かって走る。

その後、案の定、授業に遅れてみっちり山田先生に説教され、さらに、千冬姉さんの出席簿アタックを喰らってしまう・・・・。

「皆を守る前に、自分に身を守らないとな・・・・・は、はは、ははは」

「相変わらず、束さんはすごいものを作るな・・・」

紅葉は数日前に束から受けっとったＩＳ『ゾントニトルス』・・・・太陽の雷か・・・・。

思わず笑みがこぼれそうになる、やっと自分も海斗と共に戦えるのだ、もう海斗だけが戦わないで済むと考えたら嬉しい。前にアンノウンが来た時も、病院が襲撃さえたときも、ＩＳの研究所が襲われ

た時も、いつも海斗や皆に守られてきた。自分には何もできない、無力な存在だった。だが、これがあれば海斗を・・・・。海斗と出会ったときのことを思い出す、自分が嫌で嫌でしょうがなかったときのことを思い出す。あのとき海斗が来なかったら・・・海斗と出会ってなければ今ここに自分はいない。だからこそ、海斗を少しでも支えることできればそれでいい。

「だから・・・次の学年別トーナメントは絶対優勝するぞ～！」

もはや、優勝＝海斗と付き合えるということになっている（紅葉の頭のなかだけ）だった。しかし、当の本人は全く知らないというのに・・・・。

「優勝したら・・海斗と・・・」

一人、部屋のベットの中でそんなことを寝ずに考えていた紅葉だった。

「はぁくしょん！今なんか寒気が・・・・」

第３０話　シャルルの秘密／ラウラと千冬（後書き）

初めてこの量を書きましたが大変でした。

誤字脱字などがありましたら、ご指摘おねがいします。

感想がありましたら、コメントよろしくお願いします。

第３１話　学年別トーナメント開幕（前書き）

今回はバトルです～。

最後までよろしくお願いします。

第３１話　学年別トーナメント開幕

「大丈夫だったか２人とも」

「あ、はい。大丈夫ですわ」

「大丈夫よ」

時間は放課後の保健室、部屋の中には俺と一夏とシャルル、遥がいる。

「それにしても、ひどいやられようだな」

俺は素直に感想を述べる。その言葉を２人は聞き逃さなかったみたいで、

「別にあそこで助けなかったら、勝っていたわよ」

「そ、そうですわ」

「お前らなあ・・・。はぁ、まあいい、怪我がたいしたことなくてよかったぜ」

一夏が呆れたように言ってくる。ラウラにボロボロにやられていたのにな・・・。俺たちが第３アリーナでラウラが鈴とセシリアと模擬戦しているという話を聞いて、向かったときにはすでに、セシリアと鈴はＩＳのダメージレベルが限界を超えており、そのことに逆上した一夏が『零落白夜（れいらくびゃくや）』でアリーナのシールドを切断、そのままラウラから鈴とセシリアを助け出し、そのまま、シャルル、俺

とラウラと交戦しようとしたとき、千冬姉さんが間に割って入り、そこで一応決着した。その後、鈴とセシリアを保健室に運び今に至る。

「こんなもん、怪我のうちに入らな――――いたたたっ！」

「そもそも、こう横になっていること自体無意味――――つううっ！」

痛いのなら無理しなければいいのに・・・。馬鹿だな・・。

「馬鹿とは何よ！2人とも」

「そうですわよ一夏さんと海斗さんの方こそ馬鹿ですわ」

一夏も同じことを思ったらしく、俺と同じように2人に罵声を浴びせられる。だが、何故俺の考えまでもバレたんだ？一夏じゃあるまいし・・・。

「あんたも一夏と同じで思考読みやすいのよ・・・」

またも思考を読まれた。にしてもそんなに分かりやすかったとは・・・。次からは気を付けよう。

「で、なんでお前らはラウラと戦うことになったんだ？」

「な、なんでって・・・そりゃあ・・」

なんで、顔が赤いんだこの2人・・・。そこまで、考えたところでシャルルが、

「2人は好きなひ――――――」

「うわぁー、デュノアは余計なこと言わない！」

「そうですわ、私たちはその・・・そう、女のプライドを傷つけられたからですわ」

「それって、一夏の――――――」

「あああっ！やっぱり一言多い！」

「そ、そうですわ。まったくです。おほほほ」

怪我人がよく動くな、痛くないんだろうか？俺が行動するより早く一夏が鈴とセシリアの肩を指でつつくと、

「「ぴぐっ！」」

痛かったんだろう、2人は変な声を発してしまった。相変わらずあの2人の一夏を睨む目は怖いな・・。

「そういえば、一夏は学年別トーナメントは誰と組むんだ？」

俺はついさっき山田先生に言われた、学年別トーナメントの変更について思い出したので一夏に尋ねる。

「俺はシャルルと組むぞ」

そうだよな、シャルルが他の女子と組むと、バレるかも知れないからな。鈴とセシリアはムウッとした顔になる。あの2人のＩＳはダメージレベルがＣを超えており、とても学年別トーナメントに参加

できる状況ではない。

「海斗は誰と組むんだ？」

一夏は当然のように聞いてくる・・。うっ、遥の目線が気になるが・・・。

「俺はアキとだぞ」

「・・・・・・」

「なに、その顔！」

一夏、鈴がニヤニヤしながらこっちを見てくる・・なんなんだこいつら？

「そういえば、なんで海斗さんは時雨さんのことを『アキ』と呼んでいっらしいますの？」

セシリアの質問に一夏が答える、

「それは――」

俺は一夏の口を思いっきり手で塞ぐ。危ない危ない、あれは言っちゃいけないというか、言わないで恥ずかしい。

「それは、海斗が時雨って字を”あきさめ”って読んだからそこからアキってことになったの」

「鈴、あとで覚えてろよ・・・」

「事実でしょうが、事実！」

昔の俺は（今も十分馬鹿）馬鹿だったとは言え、あきさめはないだろう、あきさめは！！マジで恥ずかしい・・。

「あ、セシリア大丈夫？」

「大丈夫だった？」

「噂をすればだな・・・」

そこには、全員分の飲み物をもったアキとマリアだった。皆はそれぞれペットボトルを受け取る。

「何の話してたの？」

「ああ、海斗がなんで時雨のことをアキと呼んでいるのかって、話だったの」

なんか、吹っ切れたなもう・・・。

「そういえば、時雨さんも海斗さんもこと『くう』と呼んでいますわよね？」

「理由が知りたいの？」

セシリアは頷く、いつもは聞く気が無いマリアや他の皆まで聞いている。そこまで聞きたいのかな？

「それは・・・」

「「「「「「「それは!?」」」」」」」

皆の声が重なる。

「髪の色が空色だから」

「それだけ・・?」

「それ以外はないよ」

みんな期待はずれな答えが返ってきたみたいでキョトンとしている。
いや、どんな答えを想像していたんだこいつら。

「では、2人は付き合ってらしたんですか?」

「え・・・・」

なんでそうなるの!と言いたいがこれには思わず言葉が出ない。いや、もちろんそんなわけないのだが・・・。横目で周りを見ると、

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

遥とマリアがこちらを睨みつけるように見ている。

「ち、違うよ、そんなんじゃないよ・・・」

「そうですの?私はてっきり・・・」

アキが否定してくれたおかげでセシリアは引き下がるが・・・

「ということだから、その目で俺を見るのをやめろ2人とも!」

「ふ~んだ」

「そうだよね、海斗は浮気しないもんね」

「いや、浮気って・・・・」

もう、その後は、大量の女子が詰め寄せてそこを一夏と俺、シャルルで静めたりして大変だった・・・大変だった。

６月も最終周に入り、ＩＳ学園は学年別トーナメント一色に変わる。しかし、すごい。モニターに映る人をみて、俺は正直そんな感想しか思い浮かばない。あれから一夏と打倒ラウラを目指して、日々アキと一夏、シャルルと特訓を重ねていた。今日は絶対に勝つ、もちろん一夏にもだ。ちなみに、俺はアキ、一夏はシャルル、遥は箒、となったみたいで、唯一紅葉だけ誰と組んだのかはわからない。というか、組損ねたらしい。抽選だろうな・・・。

「お、対戦相手が決まったみたいだよ」

俺と一夏はシャルルの声でモニターに目を移す。そこには、

『１年の部　１回戦第１試合　織斑一夏、シャルル・デュノアＶＳ桜野遥、篠ノ之箒。第２試合　結城海斗、藍染時雨ＶＳラウラ・ボーデヴィッヒ、日向紅葉』

映し出された情報に俺は目を疑う。だが、そこにはまぎれもなくラウラの相手が俺だということを映し出しだしていた。

「いきなり、ラウラかよ・・・しかも、紅葉とか・・」

「俺は、箒と遥だぜ、はぁ～」

俺も一夏も声をそろえてため息を漏らす。

「まぁ、一夏、勝てよ」

「ああ、お前こそ」

一夏はそこまで言うとシャルルと共にピットに出て行ってしまった。

「それにしても、いきなりか・・・」

「くう、対策はしたんだから全力で行こう！」

「ああ、そうだな」

俺はそいうと、モニターに目を移す、そこには一夏、シャルル、箒、遥を映し出していた。

「いきなり、お前らとはな・・・・でも、手加減はしないぜ、箒」

『ああ、こちらも全力行く！』

『3・・2・・1・・・開始！』

場内に鳴り響く試合の開始を告げるアナウンス。そのアナウンスが終わると同時に一夏と箒は飛び出す。雪片と打鉄の近接ブレードが火花を散らしながらぶつかり合う。一夏は力任せに雪片を振りぬく、箒はそのまま飛ばされるがすぐ体勢を立て直す。

「箒、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。それより、遥はシャルルを頼む。私は一夏を」

「うん・・わかった」

そういうと、箒は再び一夏のところに向かう。

「くっ・・・」

一夏は箒の攻撃を雪片で受け止め、ブレードを弾く。なんども打ち

合いながら、一夏はスラスターの出力を上げる。徐々に箒は一夏に押されていく、

「この・・・！」

箒が上に大きく刀を振り上げたとき、一夏は雪片で素早く箒の刀を持っている手を狙って、雪片を振る。

「な・・・」

箒は大きく体勢を崩す、そこに一夏は雪片を上から下に振りぬく。箒はそのまま地面に叩きつけられる。一夏は地面に叩きつけられた箒にさらに追撃しようとする、刹那、一夏にビームが直撃する。

『一夏！』

シャルルがオープンチャンネルを飛ばしてくる。

『ごめん一夏、遥さんを足止めできない！』

「そういうことなら・・・作戦がある・・」

『作戦？』

『なるほど・・・じゃあ、それで行こう一夏』

シャルルは一夏から作戦を聞くと、箒に向かって接近する。

『ふん、今度の相手はシャルルか・・・』

『一夏じゃなくてごめんね』

『な・・・バカにするな！』

箒の刀を呼び出した『ブレッド・スライサー』で受け止め、左手で『レイン・オブ・サタディ』を放つ、

「ちっ・・」

シャルルの戦い方は『砂漠の逃げ水（ミラージュ・デ・デザート）』というらしく、斬り合っていたかと思うといきなり銃に持ち替えての近接射撃、間合いを離せば剣に変更して近接格闘。押しても引いても一定の距離を保ち、攻防ともに高いレベル安定した構えを突破することは容易ではない。

「片方をさきに潰す作戦か・・」

遥は箒の方を見ながら、ポツリとつぶやく。

「くっ・・・随分余裕だな」

一夏はさっきからずっと遥との距離を詰めえようとするが、遥のまわりを飛んでいるフューゼレイドで邪魔される。レーザー、ミサイルを交互に撃ってくる、それに加えエネルギーソードの斬撃。一夏はそれらを躱すのが精一杯でなかなか距離が縮められない。

「随分、避けるのうまいね一夏」

「それは・・・どうも・・」

こんな冗談を交わしながらも攻撃の手を緩めない遥に徐々に押され始める一夏。前からのレーザーの攻撃、下からのミサイルの攻撃、そして、後ろと上からエネルギソードの攻撃でシールドエネルギーが半分を切る、

「そろそろ・・・終わりにしよう！」

遥はビームライフルの『デュアルブラスト』の照準を一夏に合わせる。

一夏はすぐ回避行動に移ろうとするが、まわりのビットで邪魔される。

「やばっ――――」

「お待たせ！」

ガキンッ！

重たい音を響かせながらシャルルの盾が遥のライフルから放たれたビームを止めていた。

「シャルル・・・助かったぜ、ありがとう」

「どういたしまして」

「箒は？」

「お休み中」

横を見るとアリーナの端でシルードエネルギー０の箒が悔しいそうに膝をついていた。

「一夏、二人で同時に行くよ」

「おう！」

シャルルはショットガンとマシンガンを遥に向けて放つ、すぐさまミサイルが飛んでくるがそれは難なくかわす。

「もらった！」

遥の背後に回った一夏は雪片を横一文字に振る、遥は避けきれずもろに雪片を喰らう。その隙にシャルルは遥との距離を一気に縮める。

「この距離なら・・・外さない！」

シャルルの盾の装甲がはじけ飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。六十九口径パイルバンカー『灰色（グレー・スケール）の鱗殻。通称――――――

「『盾殺し（シールド・ピアース）』・・・！」

遥はすぐさま、春風を展開させ応戦しようとする、

「「おおおおおっ！」」

二人の声が重なる。シャルルは左手拳をきつく握りしめ、叩き込むように突き出す。

ズカッ！！！

「くっ・・」

遥の腹部にパイルバンカーの一撃を叩き込まれる。ＩＳのシールドエネルギーが集中して絶対防御発動して防ぐものの、そのエネルギー残量をごそっり奪われる。

そして、もう3発連続で撃ちこむ、遥はアリーナの壁に激突する。

『試合終了　勝者織斑一夏&シャルル・デュノア』

試合終了を告げるアナウンスが会場内に響き渡った。

「やったな、一夏！」

俺は試合が終わると、すぐさま一夏たちにところへと来ていた。

「ああ、ギリギリだったけどな」

一夏はかなり疲れたのだろう、ＩＳを解除するとそのままその場に座り込んでしまった。

「次は俺たちか・・・」

次の第二試合は俺たちとラウラ達だ。ラウラとは色々あったからなちょうどいい、俺は立ち上がり試合の準備をはじめる。

「海斗・・・勝てよ！」

「ああ、あの生意気な野郎に一泡ふかしてやる」

俺は蒼月を展開させ、ピットの射出カタパルトＩＳを進ませる。俺

は胸のところにかけているネックレスを握る。昔からこうすると力が湧いてくる、やれる、そう感じさせてくれる。

――――――――――力が欲しいか――――――――――

「！？」

なんだ、さっき声が聞こえたような・・・・気のせいか・・・。

気を取り直して、目の前のアリーナを見つめる、絶対に勝ってやる。

改めて集中する。そして、

「結城海斗、行きます！」

そういうと蒼月がカタパルトの上を勢いよく滑り、接合された部分が外れ、そのまま外に飛び出した。

『もう少しだ・・・あと少しで俺は・・・海斗！早く俺を解放してくれ！』

第３１話　学年別トーナメント開幕（後書き）

次は紅葉と時雨（アキ）の設定を書きます。

オリジナルキャラ設定　その３（前書き）

今回は時雨の設定です。今回は短いです。

オリジナルキャラ設定　その3

名前　藍染時雨

身長　１６５ｃｍ

好きな食べ物　辛い物

嫌いな食べ物　キノコ類

趣味　読書

髪の色は黒色で、長さはショート。海斗たちとは小学生の時からの幼馴染。姉は千冬や束と仲が良くよく時雨自身も一夏と海斗と遊んでたりしていた。海斗とは仲が良くお互いあだ名（くう、アキ）で呼ぶほど。中学の時、ある事件に巻き込まれ死亡したと思われていた（これが原因で海斗は精神が不安定になる）が、実は生きており事件を度々起こしていた、ＩＳの研究所でシルバーフリートを奪う際たまたま居合わせた海斗と再会した（その際海斗は時雨の顔を見ていない）。その後第一中央病院襲撃事件の際、海斗と戦えないという理由で組織を抜けた。その後はＩＳ学園に入学する。海斗に好意を抱いているが、そのことでたまに一夏や鈴などの幼馴染メンバーにからかわれている（半ば公式カップル認定されていた）

マリアとは仲が良く、よく一緒にいるが、恋のライバルとしては認識してはいない。

家事全般ができ、料理の腕は一夏並らしいだが、レシピが少ない。

本を読むときは伊達メガネを使用しているが、視力は結構良い。

スリルを楽しむ傾向あり、命の危険などが迫ってもなにかと楽しそうにしていることがある。お酒に極端に弱く、嗅ぐだけで酔ってし

まい、酔ってしまったら千冬でさえ手が付けられないほどである。

専用ＩＳ　シルバーフリート

待機形態　ブレスレット

世代　第４世代

外見は銀色の装甲で、スナイパーライフルとビームサーベルでの遠距離、近距離に対応できる。特徴は全身の装甲からエネルギー弾を発射することができる。蒼月と共に開発された機体で、蒼月が一撃の攻撃力を高めた機体ならシルバーフリートは連射による攻撃を高めた機体である。

武装

・スナイパーライフル『サンライト』

シルバーフリートの遠距離武器で、攻撃力はあまり高くはないが連射が可能。

・ビームサーベル『銀姫』

シルバーフリートの近接武器。刀の柄の部分からビームが出ている刀剣。

・セイクリッドレイ

シルバーフリートの装甲に装備されている武装で、装甲のどこからも発射が可能。換装、装填が必要なくほぼ無限に撃てるが、射程距離が短い。

オリジナルキャラ設定　その３（後書き）

次もキャラ設定です。

オリジナルキャラ設定　その４（前書き）

今回は紅葉のキャラ設定です。

オリジナルキャラ設定　その４

名前　日向紅葉

身長　１６７ｃｍ

好きな食べ物　甘いもの

嫌いな食べ物　納豆　チーズ

趣味　神社巡り　銃を集めること

髪の色は綺麗な黄金色のミディアム。海斗とは海斗が織斑家を飛び出してからの２年間で出会ってらしい、出身地、海斗と出会う以前のことについては不明。ＩＳのことに詳しく、蒼月、シルバーフリートの開発に携わるなどその能力は高い。また、束とは師匠と弟子の関係であり束が心を許している人物でもある。

明るい性格で友達もできやすいが、決して弱みを見せない（海斗でさえ）だが、専用機を持たないことにコンプレックスを抱いており、束に専用機をもらった際は「これで海斗を守れる」というなど守るということに強い憧れを抱いている。

根っこからの天然であり、海斗曰く冗談をそのまま受け取ってしまうので冗談が言えないときがあるらしいが頭はかなり良い。また、海斗と一緒に旅をしていた時趣味の神社巡りをやっていた。真剣に神頼みをやったり、幽霊やサンタクロースを信じるなど意外とピュアな一面を持つ。

自室に銃のコレクションを持ちこむなど他の人には理解できないことをすることが多い（銃を持ちこんだ理由は海斗に群がる女を蹴散らすため）料理は全く駄目で海斗と一夏からはセシリアと同じレベ

ルだと言われている。かわいいぬいぐるみなどに目がないらしい。
射撃が得意で海斗からはプロ並みだと絶賛されている。

専用ＩＳ　ゾントニトルス

待機形態　金色のスカーフ

世代　第４世代

束が直接設計、開発した機体で蒼月の戦闘データもとに開発した対蒼月の機体でもあり、そのスペックは既存のＩＳを凌駕している。また、燃費の悪さが改善され、蒼月が無しえなかった高出力の武装を多数搭載することに成功した。全体の装甲が金色で、腰の部分には高エネルギー長射程ビーム砲、肩の部分には超高速レール砲、背中部分にはレーザーソードが２本装備されており、蒼月の特徴の一撃の攻撃力の高さとシルバーフリートの特徴の連続射撃とを兼ね備えた機体でもある。装甲はヤタノカガミと呼ばれる特殊な装甲であり、ビーム系統の攻撃は跳ね返されるが、実弾に弱い。

武装

・高エネルギービームライフル『ヴァジュラ』
シルバーフリートの『サンライト』の改良版で威力が向上している。

・レーザーソード『スサノウ』
背中の部分に2本装備されたレーザーソードで、大型ながら片手で振り回すことができ、二刀流や連結形態がある。実体剣としても使用可能。

・高エネルギー長射程ビーム砲『アマテラス』
腰の部分に装備されているゾントニトルスの中で最高の威力をほこる武器。蒼月の雷電を基に開発された装備で燃費の悪さが改善されている代わりに武装自体が巨大化してしまった。普段は2つ折りで収納されている。さらに、先の方に槍型ビームソードが装備されている。

・超高速レール砲『イザナギ』
肩の部分に装備されている。基本の構造は雷砲と同じだがサイズが雷砲と比べると軽量化されている。

オリジナルキャラ設定　その４（後書き）

紅葉の機体はインパルスとアカツキを組み合わせてみました。

次回は遂に海斗ＶＳラウラです。紅葉のＩＳにも注目！

では、さようなら～。

第３２話　海斗ＶＳラウラ／黒の目覚め（前書き）

今回はちょっと長いですが最後まで読んでもらったら幸いです。

第３２話　海斗ＶＳラウラ／黒の目覚め

「１回戦から当たるとは、待つ手間が省けたというものだ」

「そうだな、面倒くさいけど」

俺はラウラに素直な感想を述べた。はっきり言って面倒くさい、なんで１回戦からなんだよ、普通こいうものは決勝とかで当たるだろ・・・しかし、あっちはやる気満々だな、しゃねえな・・・、

「一夏には悪いけど、俺が先にお前を倒す」

「ふん、できるならな」

場内に試合開始を告げるアナウンスが流れ終わるのと同時に俺はラウラに瞬時加速（イグニッションブースト）で接近する。しかし、俺はいとも簡単に動きを封じられる。ラウラのＩＳシュヴァルツェア・レーゲンの第３世代兵器、慣性停止能力（ＡＩＣ）はその名の通り、慣性つまり簡単に言えば動きを止めることができる、セシリアと鈴もこの兵器でやられた。しかし、思ったより厄介だなこれ、全然抜け出せない・・・やばいんじゃないのこれ？

『敵ＩＳ大型レール砲の安全装置解除を確認。初弾装填――――警告！ロックオンを確認――――警告！』

ＩＳのハイパーセンサーが警告を発する。いや・・・焦る必要なんかない、俺は１人ではないんだから。

「後ろががら空きだよ？」

「！？」

ラウラが振り向くとそこにはスナイパーライフル『サンライト』を構えているアキがいる、刹那、アキが撃つのと同時にラウラはＡＩＣを解除し、横に避ける。自由になった俺は一旦体勢を立て直すため、ラウラから距離を置く。

「厄介だなあれ・・・」

「そうだね、まずはあれを何とかしないと」

鈴とセシリアの話よりよっぽど厄介な代物だな、真正面からの攻撃は駄目だ、なら常に後ろからの攻撃をやるしかないが・・・無理だな２対１ならまだしも今は２対２だ、ラウラの実力からして常に後ろを取り続けるということはおそらく無理だろう。ならやることは１つ・・・

「片方を先に潰すぞ」

さっきの試合で一夏たちがやった作戦だ。今の俺たちでラウラのＡＩＣを破るには２人でやる必要があるだろう、なら先に１人を倒す方が得策だろう。だが、この作戦には欠点がある。それは、紅葉のＩＳゾントニトルスだ。未だ実戦を経験してないとはいえあの束さんが直々に作ったＩＳだ、２人がかりでやってもどうか・・・。でも、隙がないわけではない、それは実戦経験の差だ。付け入る隙はそこしかない。

「アキ、ラウラを頼む」

「うん、わかった」

俺はラウラをアキに任せ、俺は紅葉の方を向く、

「紅葉、こうして戦うのは初めてだが、手は抜かないからな」

『ああ、こちらも負けられない理由があるからな』

負けられない理由というのは知らないが、やるからには手を抜けない。紅葉の言い終わるのと同時に俺は瞬時加速（イグニッションブースト）で紅葉に接近し、蒼鬼を横一文字に振りぬく、

「甘い！」

紅葉は腰の部分に装備されている高エネルギー長射程ビーム砲『アマテラス』の先についている槍型のビームソードで海斗の蒼鬼を受け止める。

――――警告！敵ＩＳの武装からエネルギー反応感知――――

「しまっ！」

バァァァンッ！

「ふぅ～、あぶねぇな！あんなもん喰らったらひとたまりもないな」

俺はさっきまでいたところを見ると、そこにはクレーターができている。ありえない攻撃力・・・やっぱ一筋縄でいかなそうだな。

「どうした、その程度か？」

海斗が紅葉と戦闘をしているとき時雨はラウラと対峙しているが、

ラウラのＡＩＣによって接近戦が難しいため遠距離で攻めている時雨だがラウラの巧みな操縦で中々攻撃が通らない。時雨のＩＳシルバーフリートは中距離～近距離で初めてその力を発揮する、だが、接近できないとなると力の半分も出せないのだ。セイクリッドレイは射程距離が短いため今の距離では使えない。時雨は再びサンライトを構え、ラウラに出鱈目に撃ちまくる。

「ふん！その程度で――――」

ラウラは時雨を一瞥すると、右手を前に出しＡＩＣをを展開する。時雨が放ったビームはラウラの目の前でその動きは止まるが、

「じゃあ、これはどう？」

ラウラが声のした方向向くのと同時に時雨はサンライトの引き金を引く、

「くっ・・・」

2～4発のビームを喰らうラウラだが、あまりダメージは無い様だった。しかし、時雨にとっては大きい成果があった、

（あの、やりかたならラウラにダメージをあたえられる）

ラウラと数秒間睨みあった後、2人は同時に叫ぶ

「「あなたを（貴様を）倒す！」」

そう言った後、二人は一気に距離を――――

ドカァァァンッ！

「なんだ？」

二人が動き出す前に2人の間に何かが叩きつけられた。

「くそっ！強い・・」

土煙の中から出てきたのは、シールドエネルギーを半分まで減らされている海斗だった。

「大丈夫、くう？」

「ああ、なんとか・・・でも、あそこまでとはな」

ゾントニトルスの装甲、ヤタノカガミと呼ばれるものらしいが嫌なことにビーム系統の攻撃が全て跳ね返されるという、俺の蒼月は武装全部がビーム系統なので歯が立たない。だが、近接戦でもアマテラスの先に装備されている槍型のビームソードと大型レーザーソードのスサノウで交互に攻撃をしてくる。まさに、絶体絶命ってやつだな。しかし、やっぱすごいのはこれが初めての実戦なのにそれを

使いこなしている紅葉だ。

「どうすっかな・・・」

考えている内に、いつの間にかラウラはワイヤーブレードとプラズマ手刀で攻撃を仕掛けてくる、俺は後ろに下がりながらワイヤーブレードを躱す。しかし、全部は避けきらず腕の装甲にワイヤーブレードが絡みついてしまう、

「そろそろ・・・終わりだ！」

ラウラは大型レール砲の照準をこちらに合わせる。やばいこのままじゃやられる・・・・。でも、ここまで攻撃を封じられたら・・・・ちくしょう、やっと力を手に入れらと思ったらこれかよ・・・・弱いな俺。

――――――力が欲しいか――――――

なんだ、頭の中に声が、

――――――なら、俺を出せよ、俺ならあいつらを倒せるぜ――――――

誰だ、お前は何者だ？なぜ、俺の頭の中に・・・・

――――――俺はお前だ、海斗――――――

なんで、俺の名前を・・・・

――――――ああ、そうか。こうやって話すのは初めてだったな、

俺はお前の陰だ。お前と俺は二人で一人の存在だ、決して交わることは許されない存在――――――

陰？二人で一つ？なんのことだ。

――あいつを倒したいんだろ？なら俺が倒してやる、だから俺を解放してくれ――

解放・・・・どうやって？

――――――簡単だ、認めるんだ・・・思い出し誓うんだ、自分の闇を、お前の存在理由を、そして、――

――――――お前が破壊者だということを――――――

「終わりだ！」

ラウラは大型レール砲をこちらに向けてはな――――――

「甘いんだよ」

「！？」

ラウラが大型レール砲を発射しようとしたとき、ラウラをワイヤーブレードごと引っ張り、そのままの勢いでラウラの顔面を思いっきり殴り飛ばす。ラウラはまさかの反撃に反応することができずにそのまま吹っ飛んでしまう。

「貴様・・・・！」

なんとか、体勢を整える、その目の前に海斗が蒼鬼を上に振り上げている、

「し、しまっ・・・」

「落ちろ・・・」

そのまま、地面に叩きつけられる、肺の空気が一気に外に吐き出され今に倒れそうだが、ギリギリのとこで意識を保つ。しかし、再び前を見るが・・・、

「な、貴様・・・誰だ？」

「誰って、俺は結城海斗だけど？」

「な、何を言っているお前・・・」

ラウラは意味が分からなかった目の前にいる少年は確かにさっきまでの結城海斗だろうが、だが、明らかに違うものがある。さっきまでは空の色に近い青色の髪で黒い瞳、全体的に戦う者という雰囲気はなかった。

だが今は、漆黒の髪で真紅の瞳、そして、さっきまでの雰囲気までとは違い、目の前の“敵”を倒すという感情のみ伝わってくる、軍

人であるラウラでさえ恐怖を覚えるほどだ。“海斗”はゆくっり首を回し、あたりを見回し、

「やっと、出てこれた～。気持ちい～！」

「はぁ！？」

まさかの言葉に唖然とするラウラだったが、すぐさま戦闘態勢に戻る、

「でも、出てきていきなり戦闘とは・・・まぁ、わかって出てきたんだから文句は言えねぇな」

“海斗”は蒼鬼を構える、その凛とした感じはまさしく、

「武士ってか俺？」

自分で言うなよと気持ちをラウラ、紅葉、時雨は押し殺しながらじっと“海斗”を見つめる。

「あ、あれは・・・！」

教師だけが入ることが許されている観察室。そこに千冬と真耶の姿はあった。千冬は海斗がラウラを殴り飛ばした時から顔が険しいものなっている。

「山田先生、今すぐオープンチャンネルを開けるか？」

「あ、はい。でもなんでですか？」

「いや、気になることがあってな」

真耶は理由を知りたかったが、千冬の表情を見る限りそれは無理だと思い、急いでオープンチャンネルを飛ばす、

『ボーデヴィッヒ、藍染、日向、一時戦闘を中断してくれ！』

いきなりのことで真耶や紅葉たちは驚く、

『え、どういうことですか教官？』

『そうだぜ、千冬、折角出てこれたのによなんで止めるんだよ』

『貴様は海斗なのか？』

『俺は海斗に決まってんだろ、千冬』

「そ、そうか・・・」

「あの・・織斑先生？」

全然話についていけてない真耶がビクビクしながら言う、

「すまない、勝手なこと言ってすまんが、ちょっと間だけだ」

「は、はぁ」

あまりにも真剣でそして険しい表情で言ってくるので引き下がることにする、

『お前がもし生徒に危険を及ばすようだったら私はこの試合を中止するぞ、いいな』

『いきなりなんだよ・・・わかってるよ、俺はそこんとこは区別がつくよ千冬』

『ふん、いいだろう。では試合を再会しろ』

そこで千冬はオープンチャンネルを閉じる。そして、再びモニターに目を移した。

「ちょっと、邪魔が入ったが再会といこうか！」

“海斗”はラウラに向けて、蒼鬼を再び構える、

「ふん、貴様などすぐに終わらせてくれる！」

そいうと、二人は空中で激突し、ラウラのプラズマ手刀と“海斗”の蒼鬼が激しくぶつかり火花を散らす。

「まぁ、あっちは任せて私は・・・」

時雨は改めて紅葉の方を見る、さすが束さんだい物を作ったなものだと思う。機動力、攻撃力、防御力全てにおいて今の既存ＩＳを上回っている。はっきり言って勝てる気はしないがでも今はやるしかない。

時雨は瞬時加速（イグニッションブースト）で接近し、セイクリッドレイを紅葉めがけて放つ、

「くっ・・・」

至近距離からの連続攻撃、これが時雨のＩＳシルバーフリートも最大の特徴だ。蒼月と相対する機体、それこそシルバーフリートである。それも、セイクリッドレイはビーム系統の兵器ではない、エネルギー弾であるそれは確実にゾントニトルスのシールドエネルギーを奪っていく。

「ちょこまかちょこまかと！」

紅葉は時雨から距離をとり、アマテラスを放つが、時雨は難なく躱す。

「当たらなかったら、意味ないよ！」

「いや、時雨に撃ったんじゃないよ」

そして、いきなりオープンチャンネルで“海斗”の檄が飛んでくる。

『なにしてんだよ時雨！もうちょっとで当たるところだったぞ』

「え・・」

「そういうこと、私は最初から時雨めがけて撃ってないから」

（すごいな、あの戦闘の中で私を海斗と一直線上に誘導するなんて・・・）

油断できない、もし下手していたら“海斗”に当たっていたかもしれない。

「なら・・・！」

時雨はスラスターを全開で紅葉に接近する、紅葉は接近させまいとアマテラスを構えるが、

「間に合わない・・・なら！」

紅葉は肩の超高速レール砲の『イザナギ』を展開させ、至近距離で放つ、

「な・・・・」

そして、その攻撃で態勢が崩れ、そこに連結形態のスサノウを叩き込まれ、時雨のシルードエネルギーが0になった。

「時雨!くそ!」

「ふん、残念だったな」

ラウラのワイヤーブレードを蒼鬼で防ぎながら、“海斗”は呟く。1対1でも苦戦しているというのに1対2というのはさすがにきつい。

「ふん、残念?ふざけんな、お前なんか俺一人で十分だ」

“海斗”はラウラにむかってスラスター全開で突っ込む、

「ふん、馬鹿の一つ覚えか?」

「何言ってんの？」

“海斗”はラウラに向かって蒼鬼を投げた。

「何かと思えば・・やはり馬鹿――――――」

「こっちだ・・馬鹿！」

「しまっ、瞬時加速（イグニッションブースト）か！」

“海斗”はラウラの横に移動すると、雷電と雷砲を同時に放つ。強烈な威力でその場からラウラは吹っ飛びそのまま壁に激突する。

グラッ・・・

「やばい・・・意識が・・・意識が薄れて・・・」

いきなり意識が朦朧とし、視界がぼやけてくる、

「後ろががら空きだよ！」

「え・・・」

次は“海斗”が紅葉のアマテラスの砲撃をもろに喰らってしまい、シールドエネルギーが０になる。

『試合終了！勝者ラウラ・ボーデヴィッヒ、日向紅葉』

試合終了のアナウンスが流れると同時に、海斗は意識を失った。

「う・・ここは」

もう常連になりつつある保健室で俺は目が覚めた。頭が痛く、なんか体がだるい。

「気がついた？」

横にいるのは心配そうな顔でこちらを覗いているマリア、アキだった。

「俺は・・・何してたんだ？」

確か試合の途中で紅葉に吹っ飛ばされて・・・それから、変な声がして、そこからの記憶が無い。そういえば試合はどうなったんだ？

「試合はどうなったんだ？」

「負けちゃった・・」

「そうか・・」

結局その後の話だと2回戦はラウラ達と一夏達だったらしいが、試合の途中でラウラのＩＳが暴走したが、一夏達の活躍で破壊されたらしい、よく見ると向こう側のベットでラウラが寝ている。

「しかし、なんで俺は倒れたんだ？」

「あ、それは・・・・」

『俺と急に入れ替わったから体がもたなかったんだろよ』

「ああ、そうことか・・・ってあれ？」

『にしても大変だな、千冬も後始末大変だろうしな』

「な、なんでお前が・・・・」

『うん？それりゃいるさ、俺はお前なんだから』

「いや、そいう問題じゃ・・」

『気にするな、普段はでないから俺は』

「だから、そいう問題じゃないって」

「あの。2人ともその辺にして話の続きを・・・」

「うん？今の会話が聞こえるのか？」

「うん、そうだけど」

ああ、頭が混乱してきた、試合の途中で意識失って、目が覚めたらここにいてそして変なやつがいる状況・・・・・

「な、なんじゃこりゃ～」

ゴツンッ！

「保健室では静かにしろ」

千冬姉さんに思いきっり叩かれたというか殴られた・・・。

「もう体は良いのか？」

「もう大丈夫です、それに元々大きな怪我したわけじゃないし」

「そうか・・・」

千冬姉さんはそういうとすこしだけだがホッとした顔になる。また、心配かけちゃったな・・・・。

『心配しなくてもいいよ千冬、俺たちは大丈夫だから』

ゴツンッ！

「な、なんで？」

「呼び捨てにするな、ここでは織斑先生と呼べ、いいな！」

『はいはい、わかったよ・・・だから、こいつの頭は殴らないでね

？』

「ふん、わかればいい」

俺はとても理不尽な理由で殴れている気がする・・・・。

「てか、お前名前は？」

『名前なんてあるわけねぇだろ、あるとしたら海斗だよ』

「名前がないんじゃ呼びにくいな・・・・・じゃあ、黒斗ってのはどうだ？」

『どうだって聞かれても、てか、海斗だから黒斗って・・・まぁ、いいんじゃないの？」

「じゃあ、黒斗で決定！」

こんな会話がこれから１０分ほど続いた。

「ＶＴシステム、正式名称ヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンドグロッソの部門受賞者（ヴァルキリー）のトレースするシステムか・・・・また、厄介な物を仕込だものね」

暗い部屋の中、一人の女性が立っている。綺麗な緑色の髪の女性で身長は標準ぐらいだ、

「いくら『予言に選ばれた子』たちであっても、所詮は子供よ、やりすぎなんじゃない？」

女性はモニターに映し出された映像を見ながら言う、そこには、一夏やラウラといった人たちの映像が映し出されている。

「しかし、油断はできん『予言に選ばれた子』は早めの内に始末しておく、これもすべて私たちの未来のためだ。しかし・・・・こんなにも早く『破壊者』が現れるとは・・・・・早急に始末しなくてはいけないそれは分かっているな」

「ええ、分かってるわ」

そこのモニターに映し出されていたのは、海斗と黒斗の姿だった・・・。

第３２話　海斗ＶＳラウラ／黒の目覚め（後書き）

次回は3巻内容に入りたいと思っておりますので、よろしくお願いします。

感想などがありましたらコメントよろしくい願いします。

第３３話　海斗の強さ（前書き）

今回は２巻の最後あたりです～。

駄文ですがよろしくお願いします。

第３３話　海斗の強さ

「一つ注意しておくぞ、あいつらに会うことが合ったら心を強くもて。あれは未熟者のくせに妙に女を刺激するのだ。油断すると惚れるぞ」

教官はそいうと満面な笑みを浮かべる。なんだろう、モヤモヤする。どこか照れくさそうで、そして嬉しそうだった。――――今ならわかるあれはヤキモチだったのだ。それでつい、あんなことを聞いてしまった。

「教官も惚れているのですか？」

「弟に惚れるか、馬鹿め」

ニヤリとした表情で言われ私はまた落ち着かなくなる。教官をこんな顔にする男が――――羨ましい。

そして、出会って、戦って、理解した。

強さとは何なのか・・・。

その答えは無数にあるだろう。

けれどその答えの一つに強烈に出会ってしまった。

『俺は強くない、でも、それでも強いというなら、それは、強くなりたいから強いのさ』

だから、あいつは強いのか・・・。

『だから、お前も守ってやるよ。ラウラ・ボーデヴィッヒ』

そう言われて、私の心臓の鼓動が速くなる。ああ、そういうことか・・・たしかにこれは、惚れそうだ。

「もう、夜か・・」

ラウラはもうすかっり暗くなった外を見ながら言う。さっき千冬からの言葉を思い出してみる、

『お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒだ。これから3年間ここ

で過ごすのだ、その後も時間はある、たっぷり悩めよ小娘』

たまらなく嬉しかった。自分が誰だという質問に答えられなかったラウラにとって千冬からの励ましは心の底から嬉しかった。そこで、ラウラは向かい側にいる男が目に止まる。その男は髪は空色の髪をしており、目は日本人らしい黒い瞳だ。

「お、ラウラお前は体の方大丈夫だったか？」

いきなり話しかけられ一瞬驚くが「大丈夫だ」と答えた。そして、自分の中で引っかかっていることを聞いてみる。

「お前は・・・お前は何でそんなに強いんだ？」

試合でどんな状況でもあきらめない、それはあの織斑一夏と同じものだ。

「なんでって入れてもな・・・・そもそも、俺は強くないし・・」

一夏と同じ答えにラウラはちょっと笑いそうになるが、心の中だけにとどめる。

「俺ははっきり言って弱いよ。一夏みたいに心が強いわけでもないし、千冬姉さんみたいに皆を守れるわけでもないしね。でも、だからこそ皆を守れるように強くなりたい、だからこんなとこで諦めて負けを認めちゃったら俺は今以上に弱くなると思うんだ」

やっぱり同じ答えが返ってくる。だからこの兄弟は強いのか。決して強くない、自分が弱いと認めているから強くなろうと努力する、それこそこいつらが強い理由なのだ。

「なんでだ、貴様も織斑一夏も十分強いだろ？」

ラウラ自身もなんでこの言葉が出てきたのかびっくりする、その言葉がとても皮肉が籠ったものだったから。

「今俺がここにいれるのは、皆のおかげだ。

俺はマリアがいなかったら自分自身という存在を認めなかっただろう。

千冬姉さんがいなかったら俺は生きてないだろう。

一夏がいなかったら強さの意味をはき違えていただろう。

アキがいなかったら本当の優しさをしらなかっただろう。

遥がいなければ生きるという大切さをしらなかっただろう。

紅葉がいなかったら自分を見失っただろう。

俺はたくさんの人に支えられて生きてきた。だからこそ今度は皆が笑っていられるように努力する、次こそ誰も俺の前で死なせたくはない、だからこそこの蒼月を手に入れた。それに・・・」

そして、どこか懐かしそうな表情をして、

「それに、約束したからな。絶対に強くなるって、そして、どんなことが遇っても諦めないってな」

満面笑みを浮かべ笑っているこいつはまるで千冬みたいだった。

「昔、ある人が言ってたいたんだ。『弱いということは決してダメなことじゃない、誰も本当は弱い。強いっていうのは弱い心と諦めない心を持ち合わせていること』だと・・・」

ラウラは初めて気づいた、こいつはだから強いのか、一夏とまた違

う、千冬とも違う強さを秘めている、そう直感的に感じた。

「約束なんだ、その人とどんなことが遇っても絶対諦めるという選択はしないって・・・」

千冬とも一夏とも違う、感じ・・・、尊敬でもない好意でもないこの感情は・・・・なんだろう？

「ごめんな・・こんなこと言って、でも、これからもよろしくな、ラウラ」

そんなこと言った海斗に対しラウラは・・・・

「今まですまなかったな・・・これからもよろしく頼む、結城海斗」

それから、海斗は部屋を出ていった。

「結局、トーナメントは中止かよ・・・」

俺は1年食堂で夕食の蕎麦をすすりながら、テレビを見ていた。何故かまわりの女子のテンションが低い、何かあったんだろか?まぁ、関係ないか。

「やっぱり、ここの飯はうまいな」

「そうだねぇ、あ、海斗、七味とって」

「はいよ」

「ありがとう」

あんなことがあったというのに当の当事者がこんなでいいのかと思うがそれは別にいいだろ。

俺は保健室でて食堂に向かっていた時、ちょうど事情聴取を終えた一夏とシャルルいたので一緒に食堂にきて今に至るわけだが・・・。

「ふー、おしかった、ごちそうさまでした」

それにしてもまわりのやつらのテンションが低すぎる、いったい何があったんだよ。

「・・・・・優勝・・・・チャンス・・・消え・・」

「・・・交際・・無効・・・」

「・・・・・うわぁぁぁぁぁ」

よく見ると食堂にいるほとんどの女子が泣きながら去って行ってい

る。気になるな・・・。
そして、もう一人隣でポカンと口を開けて立っているのは俺と一夏の幼馴染の篠ノ之箒だ。まるで、魂が抜けたような顔である。口が半開きで立っている箒を見て一夏が近くに移動する。

「箒、先月の約束だが――――――」

「ぴくっ」

一夏が話題を持ち出すと箒はちょっとだけ反応した。でも、約束ってなんだろう・・・・・・。

「付き合ってもいいぞ」

「――――。――――――――――――なに？」

凄い間を開けて箒が一夏に掴みかかる。それにしても付き合うか・・・まさか、箒がそんな約束していたとはな。まぁ、結果はたぶん・・・

「本当に付き合ってもいいんだな・・・」

「ああ、それは付き合うさ幼馴染の頼みだからな」

これで、一夏も唐変木オブ唐変木ズ卒業なんだな、

「買い物ぐらい」

「へ？」

訂正、やっぱり、一夏は一夏でした。その後、箒にボコボコされる一夏・・・・自業自得だな。

「一夏ってさ、たまにわざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

うんうん、その通りだ。俺がシャルルの言葉に頷いているとシャルルが、

「海斗って・・・遥や紅葉達がかわいそうに思えてくるよ」

シャルルの言ってる意味が分からんがとにかく今は一夏だ、唸り声をあげて床に倒れている。

「デュノアさんたちここにいましたか。それにしても・・・・どうしたんですか？」

床に倒れている一夏を心配そうに眺めている山田先生に「たぶん大丈夫です」と告げる。

「そんなことより、朗報です！」

そんなことって・・・・この人見た目のわりになんか時折酷いこと言ってるな。

『お前もな・・』

何故か黒斗にツッコまれた・・・・まぁ、気にしなくてもいいだろ。

「ついに、今日から男子も大浴場解禁です」

「ほ、本当ですか！？」

さっきまで床に倒れていた一夏がものすごい速さで立ち上がり、山田先生の手を握る。隣からの視線には気づいてないのかな一夏？

「あ、はい。では今から部屋まで着替えを取りに行ってください。私は大浴場の前で待ってますから」

「じゃあ、早速着替えを取りに――――――」

ようやく事の重大さに気づいた一夏はシャルルの方を向く、さて、どうするか・・・。」

「とにかく、今は部屋に着替えを取りに戻ろう」

「ああ、そうだな」

「いい案が浮かぶのは天に任せよう・・」

それから、俺たちは自分たちの食器を片付け、一旦部屋に戻ることにした。

「いやぁ、とにかく広いな。さすが大浴場」

一夏は大浴場に入るなりそんなことを叫んでいた。

「にしても、海斗の奴遅いな・・・」

まぁ、一夏としては久振りのお風呂だ、テンションが上がっておりそれどころではない。まずは、体を洗い流してから湯船の中につかる。

「はぁ～、生き返る～」

る～・・・・る～・・・・・・・。

こんな広い大浴場、しかも一夏一人だと大声出しても平気（真似し

ないように！）なのでついつい叫んでしまう。

「あ～あ、このまま眠りたい・・・・」

まぁ、寝たら死ぬけどなんて冗談を言っていると・・・、

からからから・・・・。

「お、海斗、ようやく来たか――――――」

そこで、一夏は絶句する、何故ならそこにいたのは・・・・・・シャルルだったのだから。

「あの・・・マリアさん、そこで何やってらしゃるの？」

俺が部屋に戻ると、なにかベットで動くものがあったのでそこを覗くと、そこには俺のベットですやすや寝ているマリアだった訳で、

「いや・・・・・つい・・・」

「ついって、お前。てかどうやって入った？」

「え？普通にこれで・・・」

これでと言って見せたものは、小さな針金だった・・・。泥棒かこいつは・・・。全く末恐ろしいな。まぁ、被害にあうのは俺だろうけど・・・。

「とにかく、俺の部屋に勝手に入るなよ」

「だって・・・・」

ものすごい上目使いでこちらを見てくる・・・・くそ・・そんなことされたら許しちまうじゃねえか・・・。

「まぁ、今回は許す・・・今度から入りたい時は俺に言えよ」

俺はとことん甘いな・・・・・。あれ、ところでアキはどこなんだ？あいつも同じ部屋んだからいるはずだが・・・・。
だが、まわりを見わたしても俺とマリア以外いない――――――

「・・・・そこで何してるのかな？」

いないと思われたアキはいつの間にか俺のベットに寝ている・・・・・
しかも、熟睡してやがる。絶対に起きないなこいつ・・。

「とにかく、俺は今から大浴場に行くからおとなしくていろよ」

「あ、私も一緒に行きたい！」

「ぶっ！」

「な、何言ってんだよ、マリア」

「何って・・・・だから私も海斗と一緒お風呂入りた――――――」

俺はこれ以上聞くと色々やばいのでさっさと部屋を出て大浴場に急ぐ。

「あ、海斗～、待って～」

「いや～、やっぱり大浴場はいいな一夏！」

「ああ、そうだな」

さっきから一夏のテンションは低い、やっぱさっきのことがいけなかったのかな？

さっき俺はやっと大浴場にたどり着き、中に入るとそこには湯船につかる一夏とシャルルだった。なぜ、今ここにシャルルがいるのかは追及しなかったが俺が入ってくるとシャルルは上がって行った。

なんでも大事な話をやっていたらしく、なんか気まずい雰囲気のところに俺が入きてしまったらしい。

「それにしても、いいな大浴場は」

広いし、色なものがあるし文句なしだな。
でも、さっきから部屋の外がうるさいな・・・・・あ、静かになった。なにがあったんだろう?気になるな。まぁ、特に気にする必要性はない・・・・かな?
それから10分ぐらい風呂を堪能した後、俺は大浴場を出る。

「マリア・・・どうしたんだ?」

「・・・・・海斗~~~」

外にいたのは頭に大きなこぶをつくっているマリアがいました。

(千冬姉さんは相変わらず容赦ないな・・・)

翌朝、俺はＳＨＲの前に千冬姉さんに呼び出され、職員室にいた。

「用事ってなんですか？」

「それなんだが・・・」

千冬姉さんは言いにくそうな顔をして、

「黒斗と変わってくれ」

先日、学年別トーナメントのときいきなり現れた、いわゆるもう一人の俺だ。まるで、某カードゲームのアニメの主人公みたいだな・・・。

ちなみに、黒斗と俺の会話は皆に聞こえるが端から見たら俺が一人で話しているように見えるので千冬姉さんに「話すときは自分たちの中で話せ」と言われてしまった。ちなみに、中というのは普段黒斗がいる空間で、ここでは声を出さずに話すことができる（表にだして喋ると髪の色がいちいち変わるから目立つらしい）

「はい、出てきましたよ」

「よし、今度お前の身体検査をやるらしいから今度の休みは空けておけよ」

「は～い」

『海斗、そろそろ変わるぞ～』

『おう、分かった』

俺は黒斗の話が終わったらしいので表に出ることにする。にしても、わざわざこんなことを話すために呼ばれたのかよ・・・。

「てか、急ごう。ＳＨＲ始まってるし」

『そうだな』

俺はその後教室に向かう・・・。

ガラガラ・・。

「・・・・・・」

『・・・・・・』

俺たちが教室に入るとそこはまさに・・・・・・

「地獄ですかここは?」

『そのまえに一夏は大丈夫か?』

一夏が箒、セシリア、鈴、シャルルにＩＳで殺されそうになっているが・・・・・、

「千冬姉さんが来るから席に着くか・・」

『そうだな・・・・』

俺たちは無視することにした。

ちなみにこの後、後から来た千冬姉さんに1時間みっちり説教された一夏たちだった。

第３３話　海斗の強さ（後書き）

３巻内容行くと言ってましたが、次回はちょっとだけオリジナルです。

第３４話　買い物にレッツゴー！（前書き）

今回から3巻の内容に入ります。

駄文ですが最後まで読んでいただくと幸いです。

第３４話　買い物にレッツゴー！

「もう・・・朝か」

俺は窓から差し込む光を見る、正直眠い・・・。

（もう、ちょっとだけ・・・）

もう、一回、俺は寝ようと――――――――

ふに。

（・・・・・？）

ふにふに。

（あれ？なんだこの感触、こんなものベットに在ったけ？）

何かものすごくやわらかいものがある。だが、この至福の時を放棄することなどできない。俺は再び眠りに――――

ふにふにゅっ。

「う・・・・」

なんか、俺の声じゃない声がしなかったか？気のせいかな・・・・・・

「ふにゅぅ～」

気のせいではない・・・・・布団に誰かいる・・・・・。

俺はそこで布団をめくる。と、そこには――――――――

「ま、マリア！？」

そこにいたのは、先月引っ越してきたばかりの俺の記憶のないころの知り合いがいた（記憶がないので何があったのかは知らない）つい最近までは千冬姉さんと同じ部屋だったが、新しい部屋が用意されたということでこの前引っ越したばかりなのだが（マリアはアキ、シャルロットは遥、紅葉はラウラとなったらしい、ちなみに箒は学園側のミスして1人らしい本人曰く「大丈夫です・・・」とのこと）

「・・・もう、朝・・？」

「もう、朝・・・じゃねよ。なんでお前がここにいるんだよ」

「でも、夫婦とはこうするものだってラウラが・・・」

ラウラかよ・・・。マリアは何故かラウラと仲が良いというかなんか変な知識を教え込まれている。

『日本では気に入った相手のことを自分の嫁にするらしいぞ』

みたいにどこかずれた知識を知っているラウラだが、マリアは素直のため聞いたことをすぐ実践しようとしてしまう。この前も俺とアキで止めるのが大変だった。元々マリアとラウラという部屋割りだったが、マリアが変な知識をすりこまれて、俺に被害がでるから変えてくれと千冬姉さんに頼んだら、あっさりと部屋を変えてもらった。きっと千冬姉さんもこれ以上悪化するとやばいとわかったんだな・・。

ふっとマリアの方に視線をやると重大なことに気付いた・・。

「ま、マリア・・なんで服着てないの？」

「え・・・だって、夫婦は包み隠さないんものだってラウラが・・・」

またか・・・。たぶん一夏も被害受けてるんだろうな・・。

ぎゃぁぁぁぁぁぁ！

あ、一夏の悲鳴だ・・・。あっちもあっちで大変だな・・。

「と、とにかく・・・前・・隠してくれ・・」

「あ・・・」

なんで、ここにきて顔を赤らめているの？考えてみろ目の前で同い年とは思えないほどの美少女が顔を赤らめてこっちを見てるんだぞ？いくら俺とて・・・・・・

やばい・・・自分で言っておいてなんで俺が顔が赤くなってんだ！

考えるな・・・・考えるな・・・。

やばいさらに体が熱くなってる・・・・もう、助けて～～～～。

『おい・・・大丈夫か？』

『大丈夫・・・・ではない・・』

ハッキリ言ってこんなところ他の人に見られたら・・・。

ガチャッ！

「海斗、朝食に行かない？」

やばい、あの声は紅葉。どうしようこんなとこ見られたら・・・。

『海斗！とりあえずだな・・・紅葉を気絶させて・・』
『馬鹿！なんでそんな考えしか浮かんでこないんだよ！』
そんな、漫才じみたことをしている場合じゃない、何かいい方法は・・・。
俺はとっさにマリアを俺の布団の中に隠れさせた。
「海斗、ちょっと早いけど朝食行かない？」
「い、いいよ。じゃあ、着替えるから先に――――」
ゴソッ・・・。
「うん？今何か動かなかった？」
「え、な、なにが？き、気のせいなんじゃない？」
ゴソゴソッ！
「海斗、布団が動いた！」
（マリア動かないでくれ、頼む！）
俺の願いも虚しく、紅葉は俺の布団を思いっきりめくった・・。
「・・・・・・」
「・・・・・・・」
『・・・・・・』
「あ～もう、見つかちゃった～」
素晴らしいほど清々しい顔でそんなことを言っているマリア・・・・
見てみろ目の前の鬼を・・。

「カ・イ・ト・コ・レ・ハ・ナ・ニ・？」

お～い、紅葉さん片言になってますよ、てかその手にもっている銃をしまってください～。

「オ・ハ・ナ・シ・キ・コ・ウ・カ」

これは完全に変なスイッチ入ったな・・・。とりあえず・・・・いい人生だった・・・。

俺が半ばあきらめかけた時・・・

「朝から何やっている・・・」

扉の方から呆れたような声が聞こえてくる、一瞬で全員背筋が凍りつく・・・。

「織斑先生・・・・」

「全員・・・・正座！それと早くマリアは服を着ろ！」

この後、全員にげんこつでの制裁があったことは言うまでもないだろう。

「俺って・・・・無実だよな」

『少なくとも、マリアをすぐに返さなかったのが悪い・・』

「そんなぁ、はぁ～」

朝の6時すぎの悲劇だった・・・・・。

「あ～、やっと終わった・・・」
『おつかれ、じゃあ交代な』
「ああ、頼む。どうも表は慣れなくてな」

土曜の夕方、朝のあの事件の後、俺はい冬姉さんから言われた黒斗の身体検査にきていた。政府の病院だろか、やけに高そうな機材が揃っている。早くこんな場所からおさらばしたい俺はちょっとだけ走って病院を出た。

「それにしても、普通5時間続けてやるかね」
『そうだな、そのせいで俺はクタクタだぜ』

それにしても、なんだったんだろかあれ?なんであんなことに5時間も・・・もう、夕焼けがきれいな時間だな・・。

お腹もすいてきた・・・。

「今日は・・・・弾の家にでも寄っていくか」
『そうだな・・』

俺は今日の夕食は五反田食堂に決定したが、

「あ・・・・そういえば、どうやって帰るんだ？」
『どうやってってバスで・・・・・・』

二人とも固まる、今の時間に限ってバスがこの辺に無いという事実に・・・。

「歩くか・・・・」
『そうだな・・』

意外とＩＳ学園から離れているこの場所から帰るのは遅くなりそうだな。
いくら黒斗に代わっていたとしても体は俺、当然のように体の疲れは俺に来るわけで・・・・。

「もう、疲れた・・」
疲れがピークになり座りこんでしまう。てか、身体検査でどんだけ疲れてるんだ、俺？

「大丈夫・・君？」

「は、はい・・」

目の前にいたのは綺麗な緑色の髪をした女性が立っていた。

「大丈夫？こんなところに座り込んだりして」

「いや、疲れちゃいまして・・・」

「家まで送って行きましょか？」

「いやいや、いいですよ。そこまでしなくても」

「いや、いいのよ。ここで会ったのも何かの縁だしね」

「そ、そうですか・・」

『いいんじゃねえの？俺はこれ以上歩きたくはないな』

俺は仕方なく、その女性の車にお世話になったが・・・、

「君はあのＩＳ学園の生徒か～、ふ～ん」

さっきから何かと質問してくるなこの人・・・。

趣味はなんだとか、ＩＳ学園はどんなところかとか、彼女はいるのかとか・・・

「おもしろそうだねＩＳ学園、私も行きたかったな～」

よく喋るなこの人・・。

『そろそろ、面倒くさいな』

「あ、ここでいいです」

ちょうどＩＳ学園の前にきたから車を止めてもらった。

「あ、私の名前教えとくの忘れてた・・・・私は佐野比嘉（さのひき）っていうの」

「佐野さん、今日はありはとうございました！」

俺は一礼し、ＩＳ学園のゲートの中をくぐる、

「今日はお話楽しかったわ、ありがとう、結城海斗君！」

あれ？俺名前教えたっけ？気にすることでもないだろ・・。

「・・・あれが、結城海斗・・・いい男なのに残念ね」

そういうと佐野は車に乗り込む。その時、彼女は不敵な笑みを浮かべていた。

「よ～く、晴れたな」

週末の日曜日、天気は快晴、最高だな。

俺は来週の臨海学校の準備もあってある女子と町に繰り出していた。

その女子というのは・・・・

「海斗と二人で買い物なんて・・・・ふふ」

なぜか、超ご機嫌のマリアである。なんでマリアと買い物に来ているのかというのは、昨日に引き続きまた俺の部屋に忍び込もうとしたマリアを捕まえたところに遡る。

「またかよ・・・いい加減眠らせてくれ。明日出かけるんだから」

俺はあの悪魔のような身体検査から帰ってきて身も心も疲れ切っている。結局飯も食えなかったからな・・・。そういうことが重なってすごく眠いのですばやく夕食をとり、ベットに直行して眠りにつこうとしたときにこの、マリアが入ってきたわけで・・・・。

「俺は眠いから、今日は勘弁てか勝手に俺の部屋に侵入してくるなよ」

「でも、海斗寝てるかと思ったから・・・・」

寝てたらいいのかよ!そうツッコミしたいところだが、どうせあまり効果がないのであえて言わない。

「さっきも言ったが、俺は明日買い物にいくから寝たいの」

「え・・海斗、買い物行くの?」

「ああ、そうだけど」

「じゃ、私も行く~」

「え、なんでそうなるの?」

『良いんじゃねえの？この前マリア水着が無いって言ってたし』

「・・・・よし、わかった。マリアも明日水着を買いに行こう！
だから今日のところは自分の部屋に戻ろうか・・」

「ほ、本当！？やった～」

そこまで嬉しいのか？まぁ、喜んでもらえて何よりだな。

「デート、デート～！」
なんか変な方向に向かってる気がするんだが・・・・。

「では、マリアまた明日な」

「うん、じゃあね～」

で、現在に至るんだが・・・ぶっちゃけ眠い。昨日、何故か寝つけなかった・・・やばい、寝そう。

「・・・海斗・・どうかした？」

「い、いや、なんでもない」

「それならいいけど・・」

あぶない、あぶないもうちょっとで寝そうだった。寝てしまったらすごく不機嫌になるもんなこいつ。そしたらなにをしでかすやら・・・・・・。

そしている内に駅につく。ここに来たのは結構前だな、あの時はマリアのことがあったからまともに買い物できてなかったからな。

「海斗・・・その・・」

なんか横でマリアが手を前で交差させたり、離したりしている・・・・トイレかな？

『トイレではないからな海斗・・・』

俺が口に出すよりも先に黒斗がそれを遮る。

「あの・・・手を握って・・」

「え・・・手を握る？」

考えているのよりも普通のことだったので呆気にとられてしまう。

「そう、手握って」

俺に手を差し出してくるマリア、俺は仕方なく手を握る。なんというか恥ずかしい、こんな町の中ということもあるけれど、マリアの手の感触と体温が直に伝わってくる。一夏だったら絶対恥ずかしがらずにやるだろう、だが、俺は健全な１６歳の高校１年生なのだ、これが恥ずかしいわけがない。

俺はドキドキしながらも駅前に向かっていく。

「あ、海斗～！」

どこからか俺を呼ぶ声が聞こえる。気のせいだろうかでもあの声は俺の知り合いに似てるような・・・・

「海斗も来てたのか」

そこにいたのは一夏と何故か顔が赤いシャルロットだった。たぶん、顔が赤い理由はおそらく・・・・・

『一夏の事だからたぶん気づいてなねぇな』

「そうだな・・・」

俺と同じく手を握ってるが一夏は平然としている。あの顔は・・・・・よし、変なことは考えてないな。

「なぁ、海斗よかったら一緒にいかなか?」

「ああ、別に俺は良いけど・・・・」

俺はマリアに目で許しをもらうと次はシャルロットにも許可を・・・・。シャルロットの顔がすごいことなってんだけど大丈夫かな?

そんなことはお構いなしに一夏話を進め、俺たちは一夏達と行動することになった。

海斗たちが駅前に歩き出したときその傍の自動販売機で海斗たちを見ている影が３つ、

「手をつないでるね」

「そうだね」

「つないでるね・・・」

「一夏とシャルロットもいるわね・・・」

「ええ、しかも手をつないでいますわね」

紅葉、遥、時雨、鈴、セシリアは海斗とマリア、一夏とシャルロットが横断歩道を通り過ぎた後、自動販売機の影から出てくる５人。その目にはハイライトが無い。

「やっぱ――――――殺す」

一瞬で紅葉がＩＳを準戦闘モードで展開させている、アマテラスを展開させている紅葉はその発射まで２秒ぐらいだろう、発射されればここから半径１０メートル以上は吹っ飛ぶに違いない。

「白昼夢でもないんだ――――――やっぱ殺そう！」

紅葉と同じくＩＳを展開させている鈴。二人は顔を数秒見合わせ、そして、

「「やっぱり、殺す」」

鈴は衝撃砲、紅葉はアマテラスをそれぞれ発射準備を整え――――

「ほう、楽しそうだな。では、私も交ぜるがいい」

「「「「「!?」」」」」

いきなり後ろから話かけられた声に、驚いて振り向く一同。そこにいたのは鈴とセシリア、時雨がボコボコにされたラウラが立っていた。

「あ、あんた――――」

「何か用?」

「再戦なら受けて立ちますわよ」

3人は完全に闘志むき出しにしてラウラに突っかかっている。セシリアと鈴の場合、1対2で一方的にやれて。時雨の場合、ラウラに一撃与えただけでやられてしまったので余計に怒りが込み上げてくるのだろう。

「なに、お前らに危害を加えるつもりはない、では、私は一夏を追うとしよう」

そう言ってすたすた歩きだそうとしているのを鈴とセシリアが止める。

「ちょっと、何勝手に行こうとしてんのよ」

「そ、そうですわ！追ってどうしようと言いますの？」

「決まっているだろう、私も交ざる。それだけだ」

ここまでストレートに言わると逆に怯んでしまう2人。ここまで来ると羨ましいのかがわからない。

「そうですわ、未知の相手と戦うときはまずは情報収集が先決でしょう！」

「追跡か・・・それには一理あるな」

「それに、あの4人の関係がどのような状態なのかを見極めるべきだからね」

「なるほど、では行くとしよう」

ここに、よくわからない追跡6人組が結成された。

一方ショッピングモールの通路では2人の女性が歩いていた。一人は鋭い目つきで剣のように鋭く、醸し出すオーラは氷のように冷たい、もう一方の女性は対照的に、子供のような感じを醸し出している。

「山田先生、新しい水着売り場はどっちだ？」

「あ、２階です。」

そう、そこにいるのは何を隠そう織斑千冬と山田麻耶だ。二人は２階の水着売り場に向かっている、

「・・・・山田先生、さっき馬鹿どもの声が聞こえなっかたか？」

「馬鹿ども？・・・・・ああ、凰さんたちの事ですね。それが、どうかしました？」

「いや・・・・なんでもない」

馬鹿どもで通じるとは・・・・それはさておき、二人は水着売り場に行くためエスカレーターに乗り込む。

「おい、蘭いったいいくつ買うんだよ！」

「お兄は黙ってて、中３の夏は１度しかないんだから、プール用水着、海用水着、勝負水着、スーパー勝負水着、ウルトラ勝負水着、これだけじゃ足りないんだから」

そいうって、歩いているのは海斗や一夏の親友の五反田弾と有名私

立中学校の生徒会長の五反田蘭だ。
二人はそんなことを言い合いながらも2階に行くためのエスカレーターに乗る。

「なんか、今日人多いな」

『そうだな、なんか、今日は知ってるやつに会いそうな気がするな』

海斗たちの上に広がっている青空はよりいっそう晴れ渡っていた。

第３４話　買い物にレッツゴー！（後書き）

次回も日常回です。

この小説の直した方がいい点やアドバイス、要望などありましたら教えてください。いつでもご意見お待ちしておりますのでよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7412w/

IS〜インフィニット・ストラトス〜蒼き月の輝き

2011年11月6日02時39分発行